

豊前市  
男女共同参画づくりに向けての  
市民意識調査  
結果報告書

令和8年3月

豊前市



# 目次

第1章 調査の概要 .....	1
1. 調査の目的 .....	3
2. 調査の実施要領・回答数 .....	3
3. 調査結果利用上の注意 .....	3
第2章 調査結果 .....	5
1. 回答者の属性 .....	7
2. 男女共同参画社会づくりについて .....	9
3. ワーク・ライフ・バランスについて .....	24
4. 地域活動全般について .....	38
5. 暴力・ハラスメントについて .....	48
6. 悩みや困りごとについて .....	70
7. 女性の活躍推進について .....	73
8. 今後の施策について .....	75



---

---

# 第1章 調査の概要

---

---



## 1. 調査の目的

本調査は、令和9年度からの新たな計画「第3次豊前市男女共同参画行動計画」の策定に向け、市民の皆様のご日常生活の実態および社会生活における男女共同参画の実態やご意見等を集計・分析し、計画策定並びに今後の取り組みに向けた計画の基礎資料とすることを目的としています。

## 2. 調査の実施要領・回答数

調査時期	令和7年12月～令和8年1月
調査対象者	豊前市内にお住いの18歳以上の方の中から、無作為に抽出した1,000名
調査方法	郵送による配布・回収およびインターネット回収
配布数	1,000件
有効回収数	433件 (郵送：348件) (WEB:85件)
有効回答率	43.3%

## 3. 調査結果利用上の注意

- ・各設問のnは、回答者数を表しています。
- ・回答率は百分比の小数点第2位を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。
- ・2つ以上の回答を要する（複数回答）質問の場合、選択肢ごとの割合を合計すると100%を超える場合があります。
- ・回答があっても、小数点第2位を四捨五入して0.1%に満たない場合は、図表には「0.0」と表記しています。
- ・数表・図表は、スペースの都合上、文言等を省略している場合があります。



---

---

## 第2章 調査結果

---

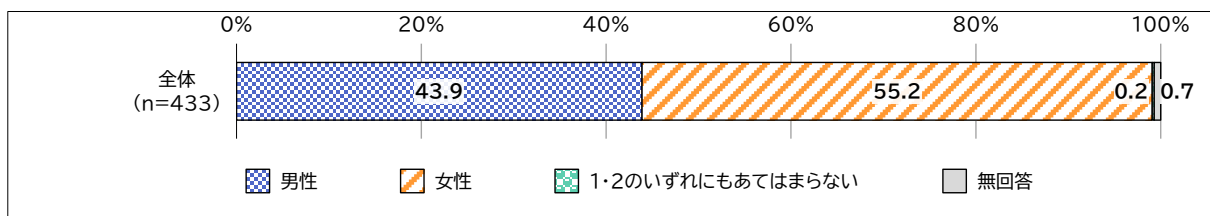
---



# 1. 回答者の属性

## F1 性別

○性別では、「男性」43.9%、「女性」55.2%、「1・2のいずれにもあてはまらない」0.2%となっている。

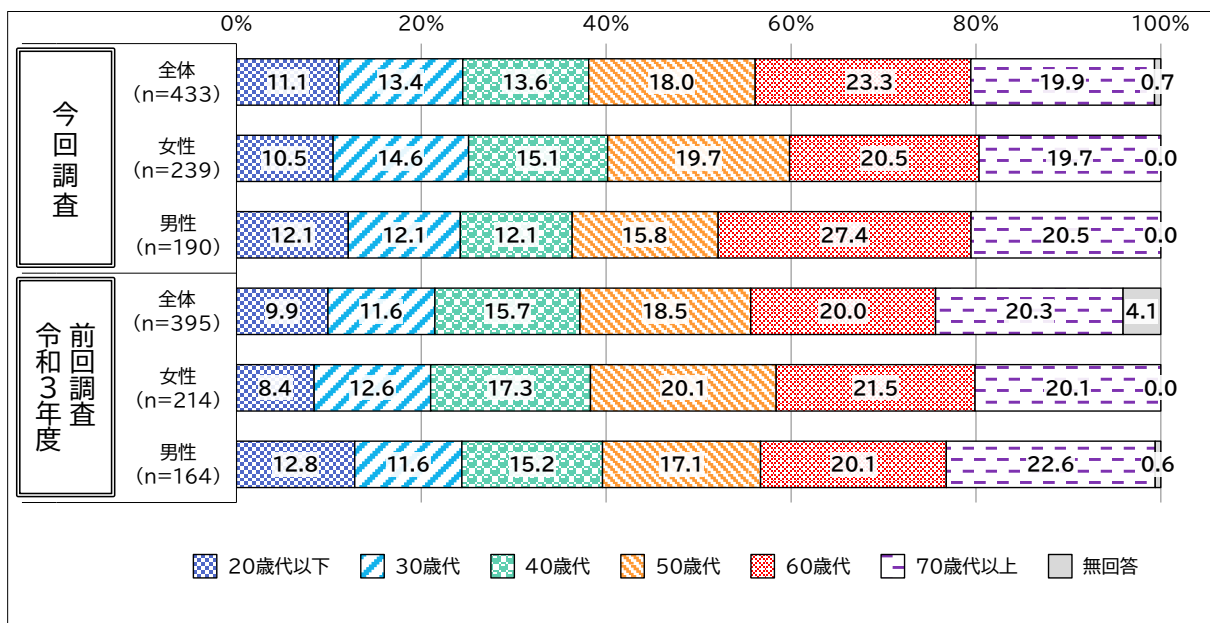


## F2 年齢

○年齢では、「60歳代」が23.3%と最も高く、次いで「70歳代以上」19.9%、「50歳代」18.0%となっている。

○性別でみても、男女ともに「60歳代」が最も高く、男女差はみられない。

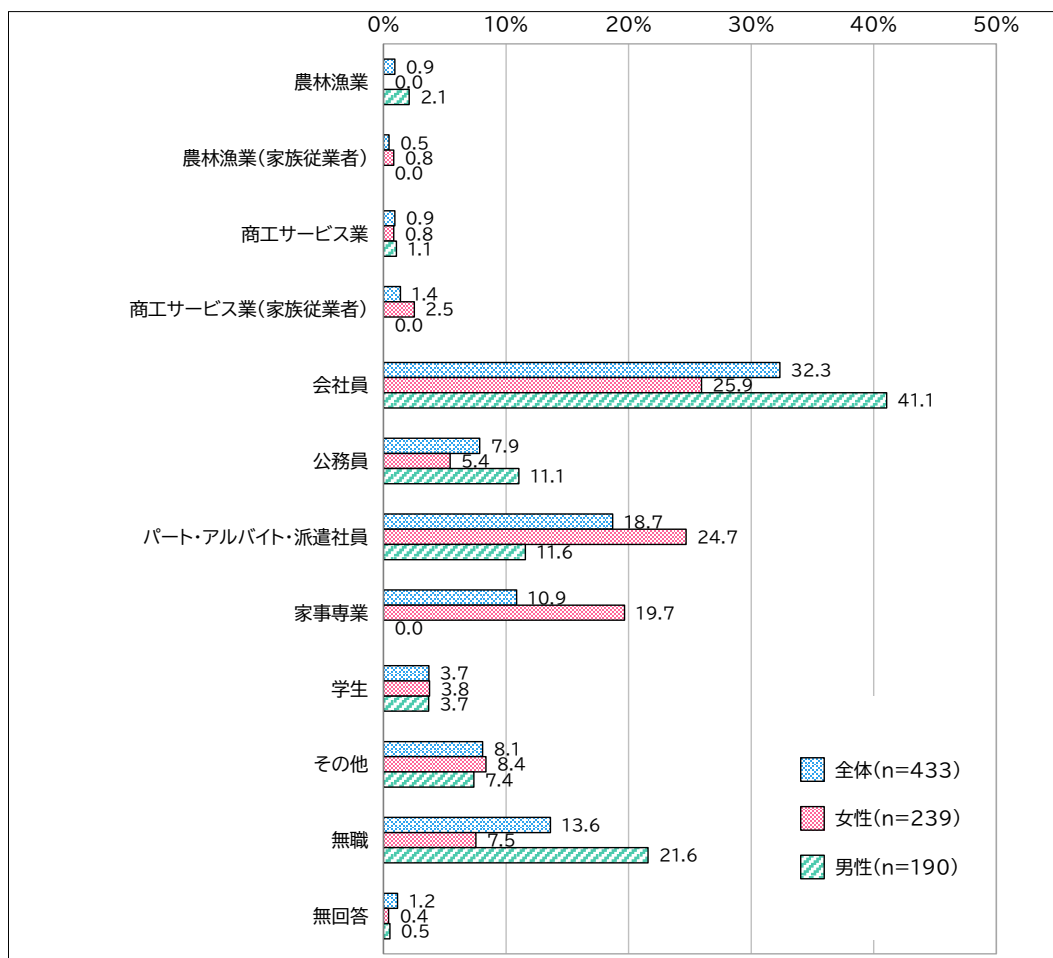
○前回調査と比較しても、全体および性別ともに「60歳代」が最も高くなっている



### F 3 職業

○職業では、「会社員」が 32.3%と最も高く、次いで「パート・アルバイト・派遣社員」18.7%、「無職」13.6%となっている。

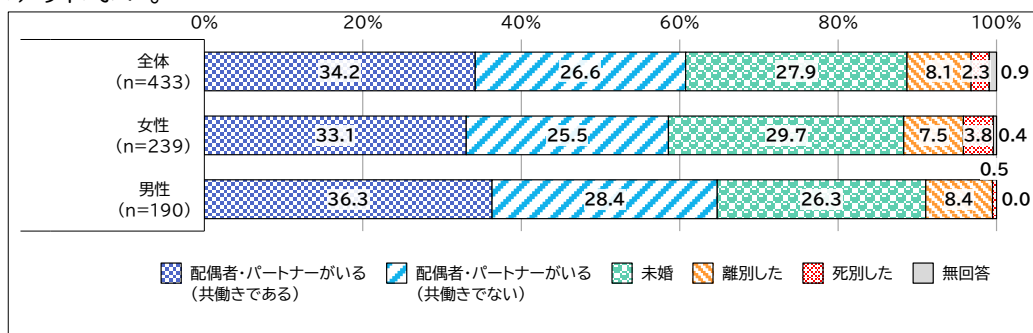
○性別でみると、男女ともに「会社員」が最も高く、次いで女性は「パート・アルバイト・派遣社員」、「家事専業」、男性は「無職」、「パート・アルバイト・派遣社員」となっている。また、女性は男性より「パート・アルバイト・派遣社員」「家事専業」が高く、「会社員」「無職」が低くなっており、10ポイント以上差が生じている。



### F 4 配偶関係

○配偶関係では、「配偶者・パートナーがいる（共働きである）」が 34.2%と最も高く、次いで「未婚」27.9%、「配偶者・パートナーがいる（共働きでない）」26.6%となっている。

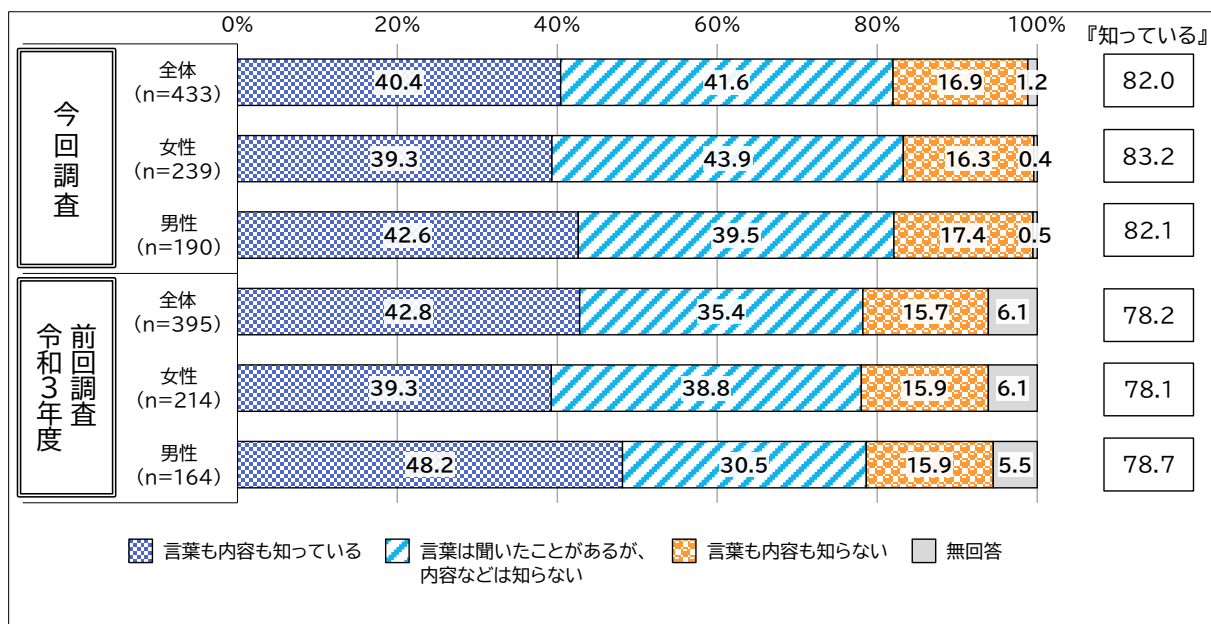
○性別でみても、男女ともに「配偶者・パートナーがいる（共働きである）」が最も高く、男女差はみられない。



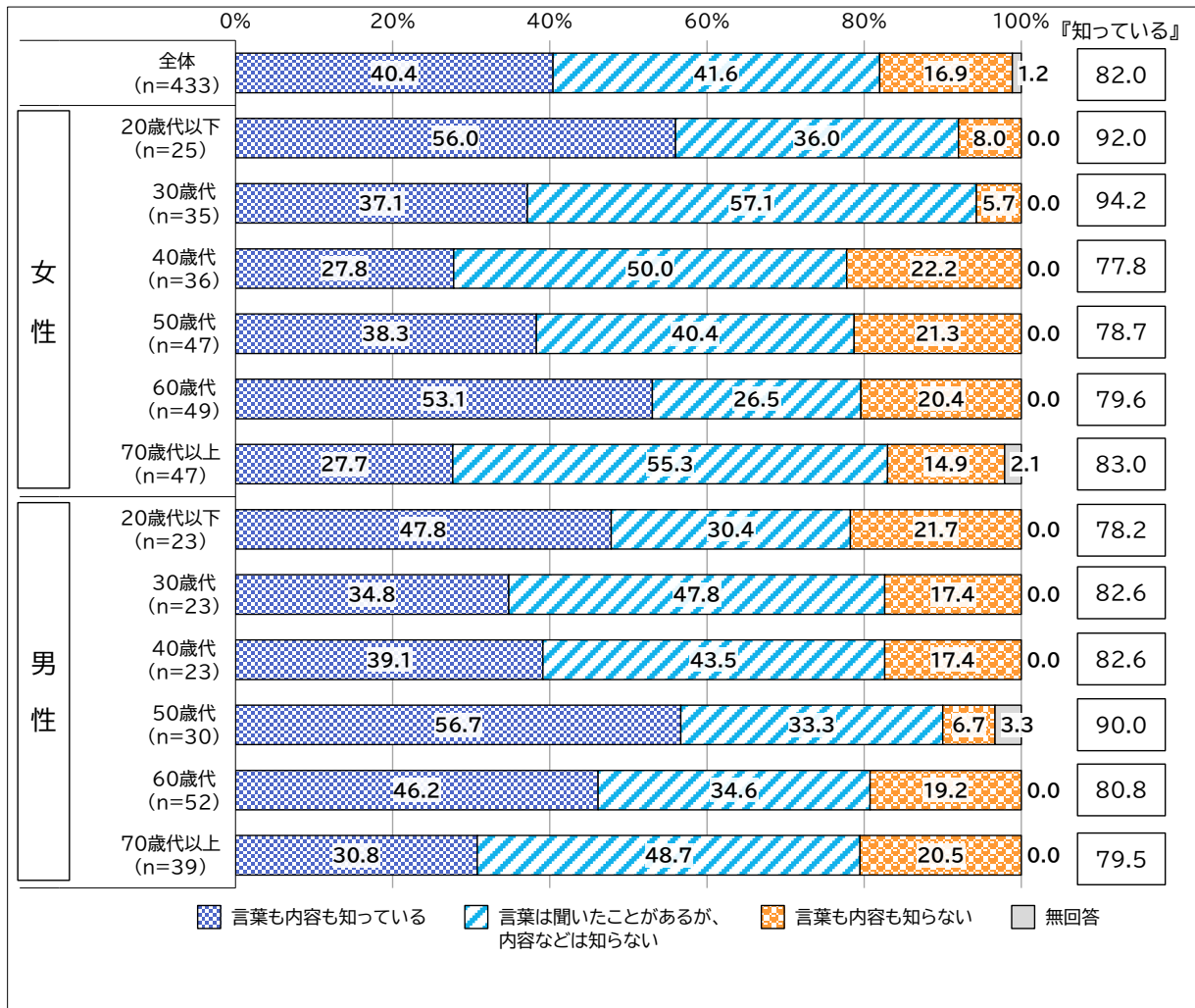
## 2. 男女共同参画社会づくりについて

### 問1 「男女共同参画社会」という言葉を知っていますか。(単数回答)

- 「男女共同参画社会」という言葉の認知度については、「言葉は聞いたことがあるが、内容などは知らない」が41.6%と最も高く、次いで「言葉も内容も知っている」40.4%、「言葉も内容も知らない」16.9%となっており、『知っている：言葉も内容も知っている＋言葉は聞いたことがあるが、内容などは知らない』は82.0%となっている。
- 性別でみても、男女ともに『知っている』が8割台、「言葉も内容も知らない」が1割台となっており、男女差はみられない。
- 前回調査と比較すると、『知っている』は前回よりも高くなっているものの、「言葉も内容も知っている」が低く、「言葉は聞いたことがあるが、内容などは知らない」「言葉も内容もしらない」が高くなっている。
- 性・年代別でみると、男女すべての年代で『知っている』は7割を超えており、女性の30歳代以下および男性の50歳代では9割を超えている。また、男性の40歳代から60歳代では『知っている』が女性より高く、それ以外の年代では女性の方が高くなっている。一方、「言葉も内容も知らない」も一定数みられ、女性の40歳代から60歳代、男性の20歳代以下および70歳代以上では2割を超えている。
- 以上のことから、「男女共同参画社会」という言葉は7割を超えて認知されており、広く浸透していることがうかがえる。一方で、「言葉は聞いたことがあるが、内容などは知らない」が多く、年代で最も高く、内容まで十分に理解されているとは言い難い。また、一部の年代では「言葉も内容も知らない」が2割を超えており、性別・年代による差もみられる。今後は、年代特性に応じた効果的な啓発により、理解の深化を図る必要がある。

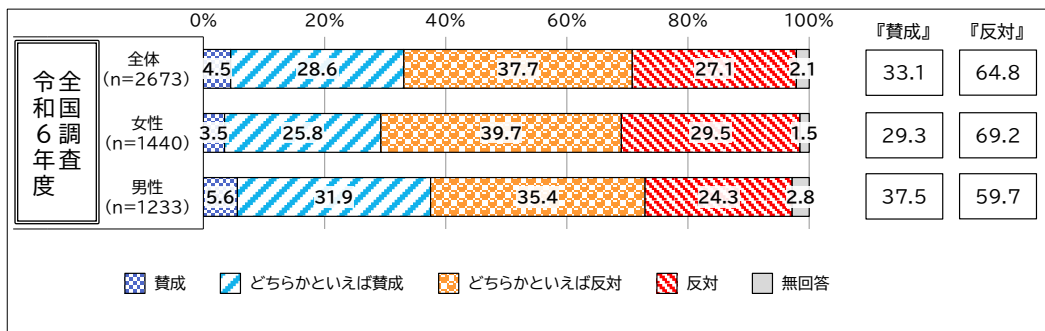
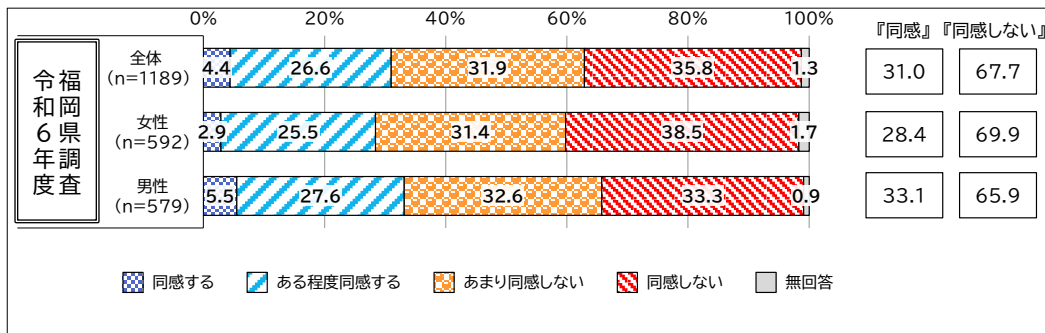
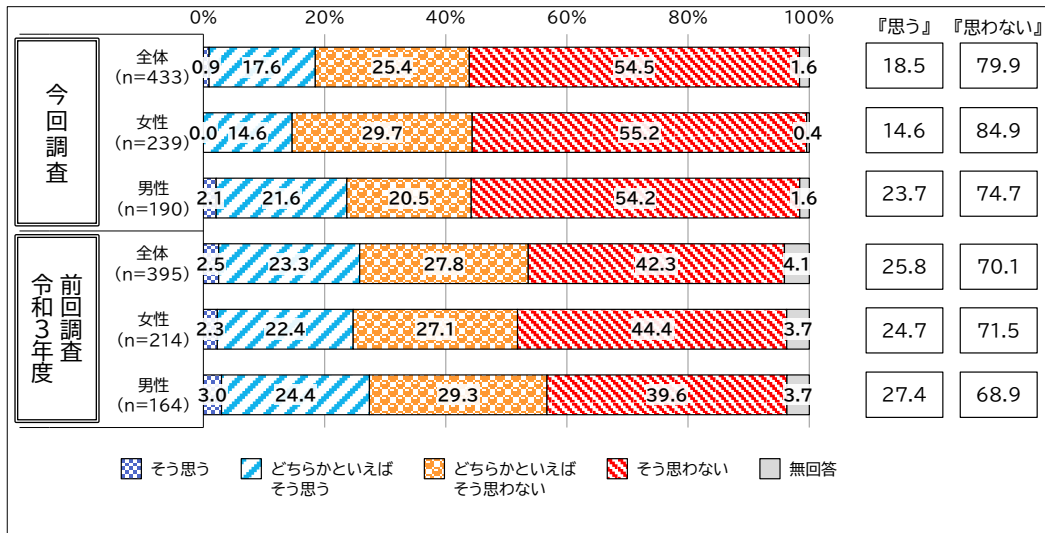


【性・年代別】



問2 「男は仕事、女は家庭」という考え方について、あなた自身の気持ちとしては、この考え方にどの程度同感しますか。(単数回答)

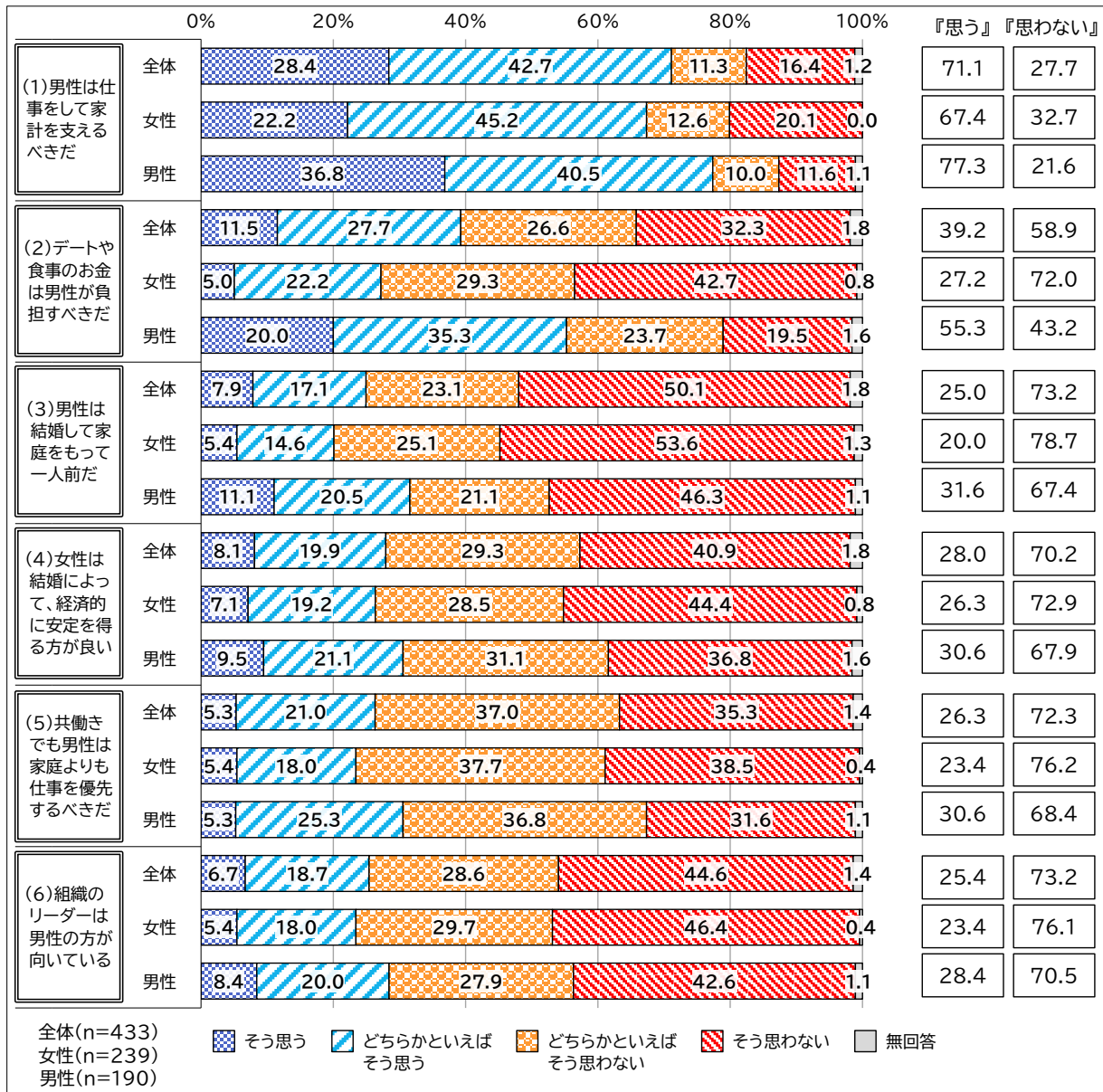
- 「男は仕事、女は家庭」という考え方については、「そう思わない」が 54.5%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思わない」25.4%、「どちらかといえば思う」17.6%となっており、『思わない：どちらかといえばそう思わない+そう思わない』（性別役割分担を容認しない）が約8割となっている。
- 性別でみると、女性は男性より『思わない』が10.2ポイント高くなっている。
- 前回調査と比較すると、女性は『思う：そう思う+どちらかといえば思う』（性別役割分担を容認する）が低く、『思わない』は高くなっており、いずれも10ポイント以上差が生じている。
- 福岡県調査・全国調査と比較すると、選択肢の項目に違いはあるものの、全体および性別ともに性別役割分担を容認しない人の割合が高く、容認する人の割合が低くなっている。
- 以上のことから、「男は仕事、女は家庭」という固定的な性別役割意識は弱まりつつあることがうかがえる。男女間で意識の差がみられるものの、特に女性において容認しない割合が高く、前回調査と比較しても全体として否定的な意見が大きく増加している。さらに、福岡県調査および全国調査と比べても、性別役割分担を容認しない割合が高い傾向にあり、本市においては男女共同参画の意識が着実に広がっていると考えられる。

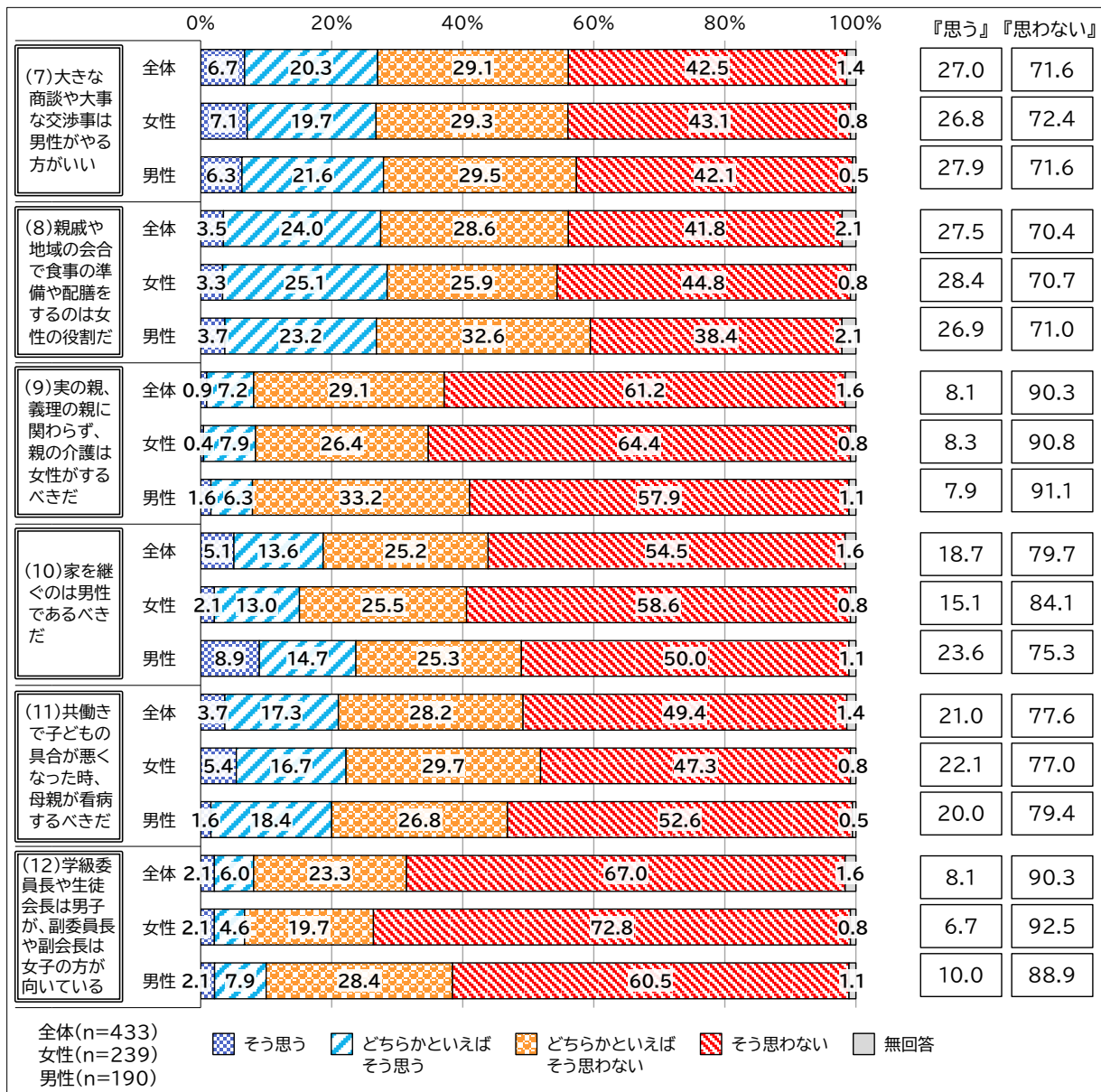


### 問3 あなたは下記の考え方について、どのように思いますか。(単数回答)

○固定的な性別役割分担意識について、「男性は仕事をして家計を支えるべきだ」は『思う』が『思わない』より高く、7割を超えているが、それ以外の項目はいずれも『思わない』が『思う』を上回っており、特に「実の親、義理の親に関わらず、親の介護は女性がするべきだ」「学級委員長や生徒会長は男子が、副委員長や副会長は女子の方が向いている」は9割を超えている。

○以上のことから、固定的な性別役割分担意識は全体として弱まりつつあるものの、男性の経済的責任に関する考え方は依然として根強く残っていることがうかがえる。

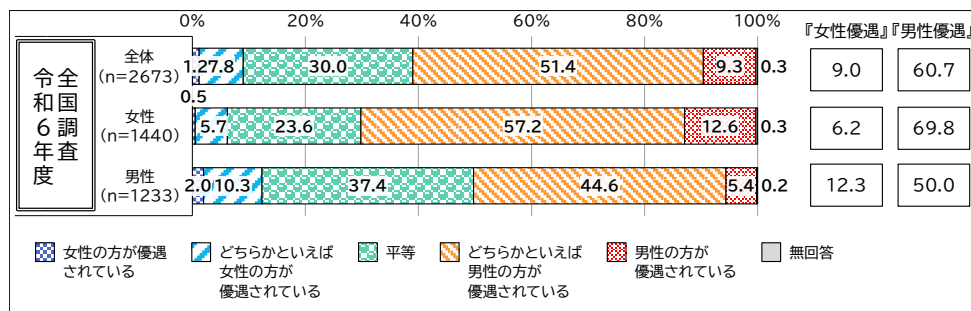
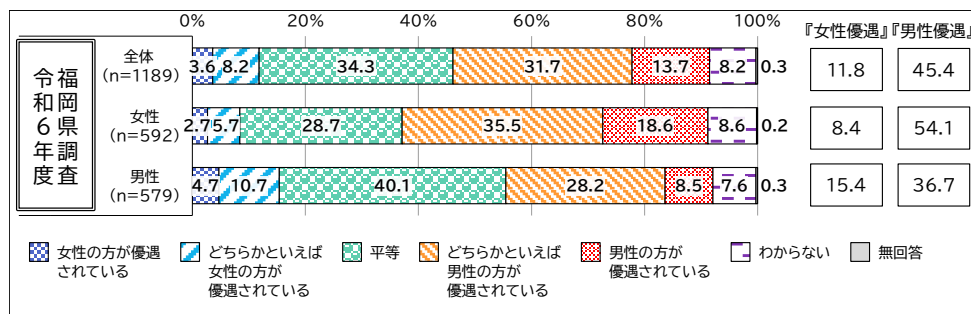
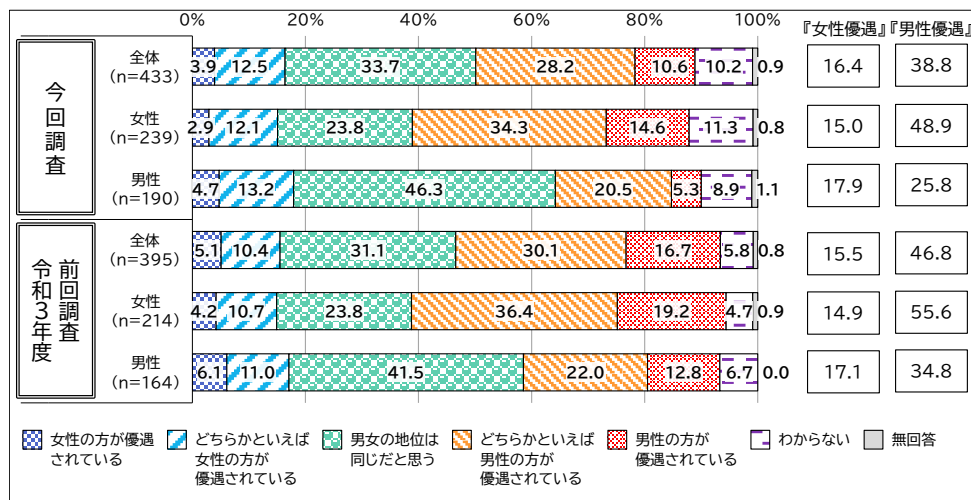




問4 あなたは、次のような分野で、男女の地位はどうなっていると思いますか。  
(単数回答)

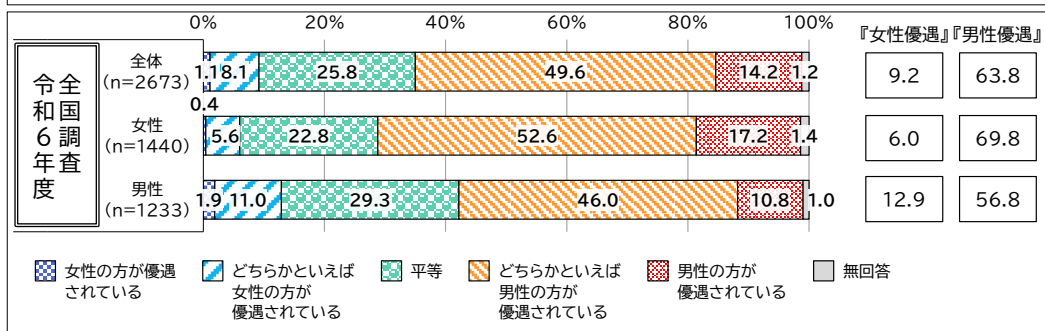
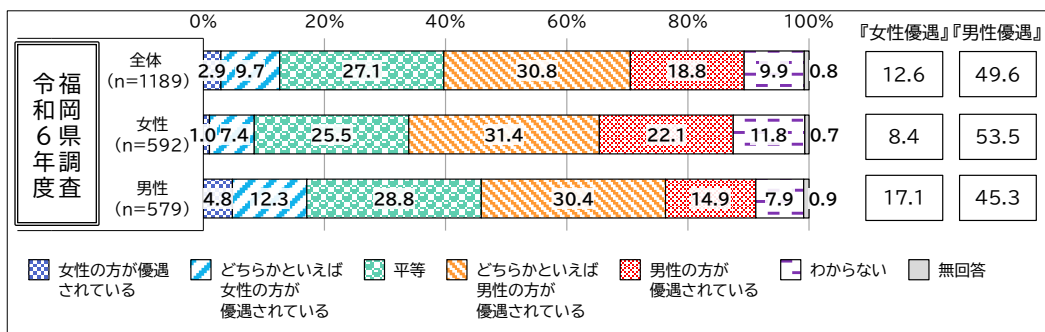
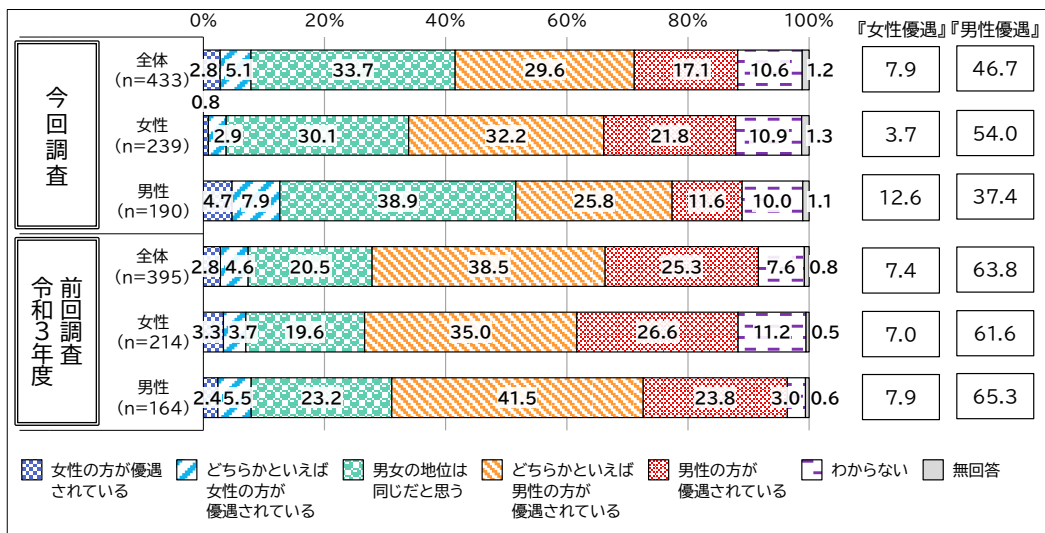
(1) 家庭生活では

- 「家庭生活」における男女の地位については、「男女の地位は同じだと思う」が33.7%と最も高く、次いで「どちらかといえば男性の方が優遇されている」28.2%、「どちらかといえば女性の方が優遇されている」12.5%となっている。また、『男性優遇：どちらかといえば男性の方が優遇されている+男性の方が優遇されている』は『女性優遇：女性の方が優遇されている+どちらかといえば女性の方が優遇されている』より22.4ポイント高くなっている。
- 性別でみると、女性は男性より『男性優遇』が23.1ポイント高くなっている。
- 前回調査と比較すると、全体および性別ともに『女性優遇』が高く、『男性優遇』が低くなっている。
- 福岡県調査と比較すると、全体および性別ともに『女性優遇』が高く、『男性優遇』が低くなっており、特に男性では『男性優遇』が10.9ポイント低くなっている。
- 全国調査は、選択肢の項目が異なるため、参考程度。以下同様。
- 以上のことから、「家庭生活」における男女の地位については、「男女の地位は同じだと思う」が最も高いものの、『男性優遇』が『女性優遇』を上回っており、依然として男性が優位であるとの認識が一定程度残っていることがうかがえる。特に女性は男性よりも『男性優遇』と感じる割合が高く、男女間で認識の差がみられる。一方で、前回調査および福岡県調査と比較すると、『男性優遇』は低く、『女性優遇』は高くなっており、本市における平等意識は徐々に広がっていると考えられる。



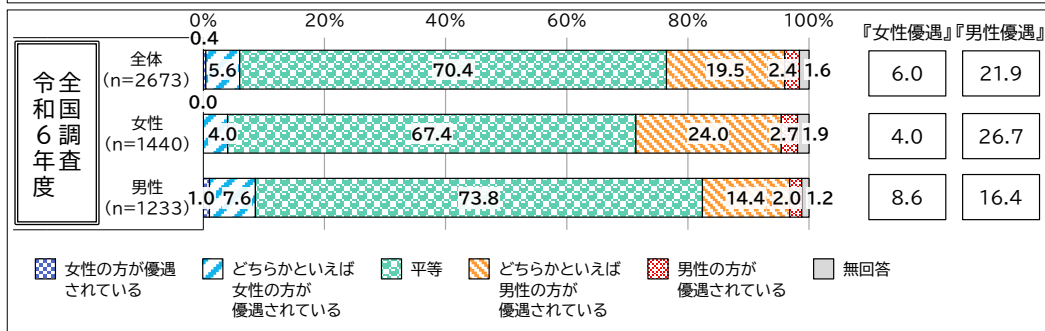
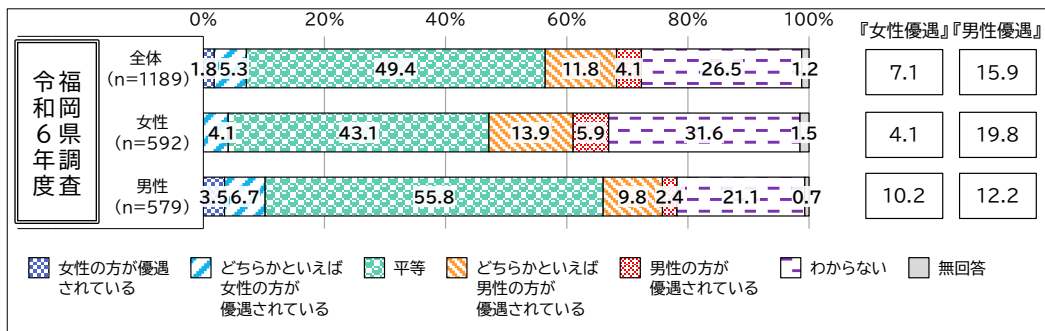
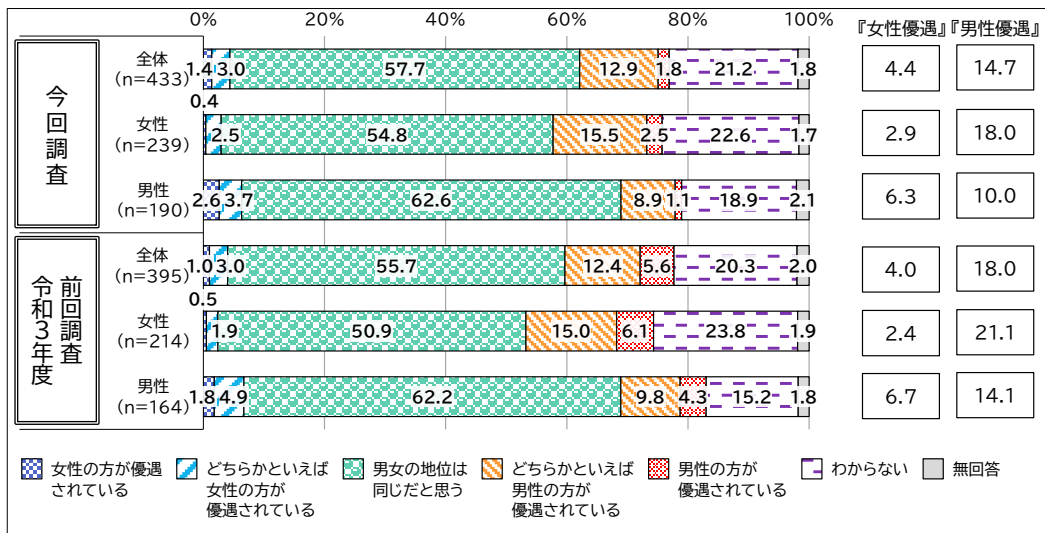
## (2) 職場では

- 「職場」における男女の地位については、「男女の地位は同じだと思う」が 33.7%と最も高く、次いで「どちらかといえば男性の方が優遇されている」29.6%、「男性の方が優遇されている」17.1%となっている。また、『男性優遇』は『女性優遇』より 38.8ポイント高くなっている。
- 性別でみると、女性は男性より『男性優遇』が16.6ポイント高くなっている。
- 前回調査と比較すると、全体および性別ともに『男性優遇』は低く、特に男性は 27.9ポイント低くなっている。
- 福岡県調査と比較すると、男性では「男女の地位は同じだと思う（福岡県：平等）」が10.1ポイント高くなっている。
- 以上のことから、「職場」における男女の地位については、「男女の地位は同じだと思う」が最も高いものの、『男性優遇』が『女性優遇』を大きく上回っており、男性が優位であるとの認識が依然として強い状況がうかがえる。特に女性は男性よりも『男性優遇』と感じる割合が高く、男女間で認識の差がみられる。一方で、前回調査と比較すると「男女の地位は同じだと思う」が高く、『男性優遇』は低くなっており、認識の偏りが緩和しつつある傾向もみられる。また、福岡県調査との比較においても「男女の地位は同じだと思う」が高くなっており、本市における職場の平等意識が相対的に高いことがうかがえる。



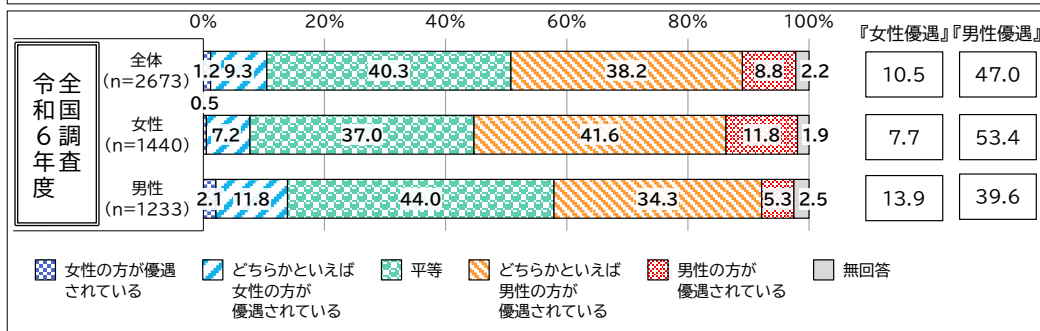
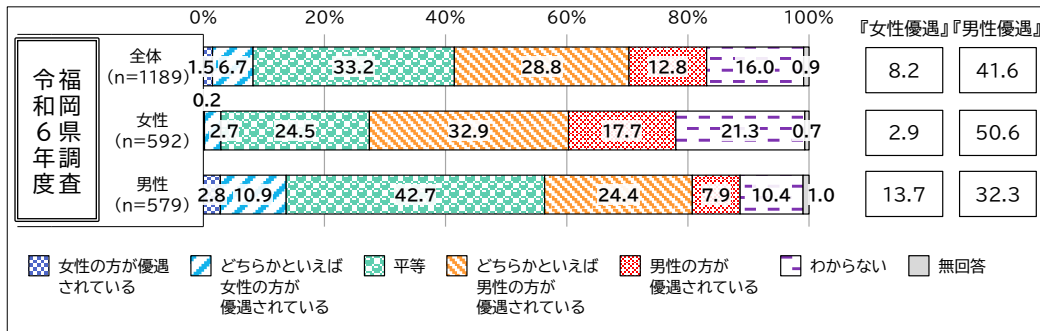
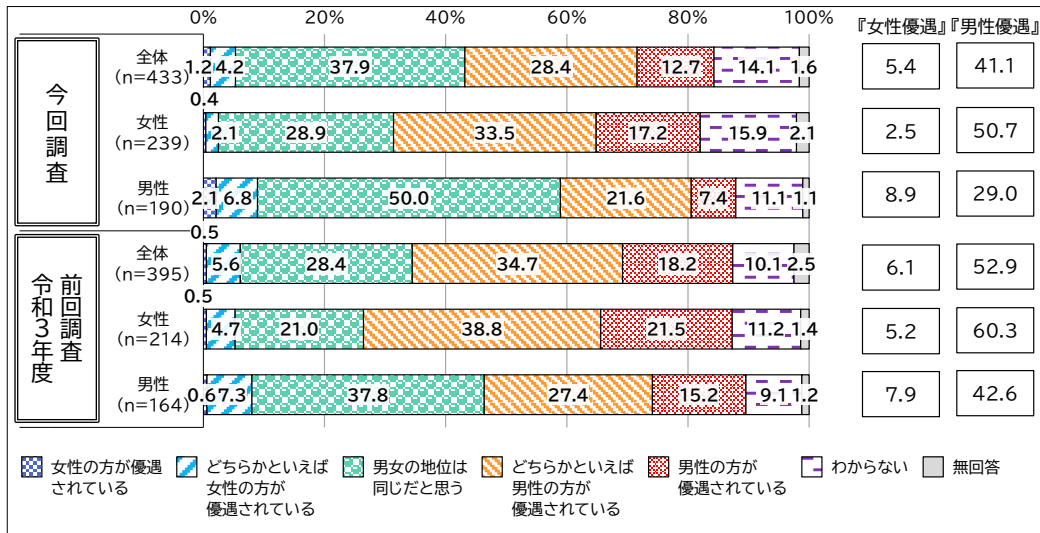
### (3) 学校教育の場では

- 「学校教育の場」における男女の地位については、「男女の地位は同じだと思う」が57.7%と最も高く、次いで「わからない」21.2%、「どちらかといえば男性の方が優遇されている」12.9%となっている。また、『男性優遇』は『女性優遇』より10.3ポイント高くなっている。
- 性別でみても、男女ともに「男女の地位は同じだと思う」が5割を超えている。
- 前回調査と比較すると、全体および性別ともに「男女の地位は同じだと思う」が高く、『男性優遇』が低くなっている。
- 福岡県調査と比較すると、全体および性別ともに「男女の地位は同じだと思う（福岡県：平等）」が高く、特に女性は11.7ポイント高くなっている。
- 以上のことから、「学校教育の場」における男女の地位については、「男女の地位は同じだと思う」が過半数を占め、他の分野と比べても平等と捉える割合が高い。一方で、『男性優遇』は『女性優遇』を上回っており、一定程度男性優位との認識もみられる。また、「わからない」とする割合も比較的高く、状況について判断が難しいと感じている層もみられる。前回調査と比較すると、「男女の地位は同じだと思う」が高く、『男性優遇』は低くなっており、平等とする認識が広がりつつある状況がみられる。さらに、福岡県調査との比較では「男女の地位は同じだと思う」が高くなっていることから、本市では学校教育の場における平等意識が相対的に高いことがうかがえる。



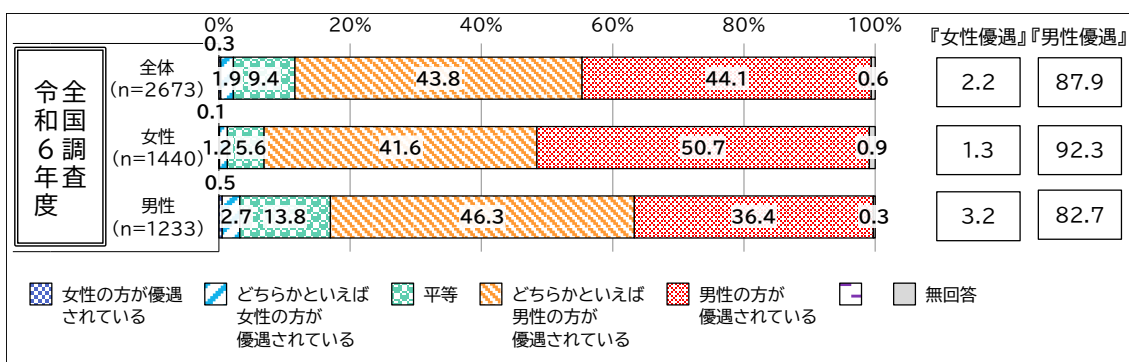
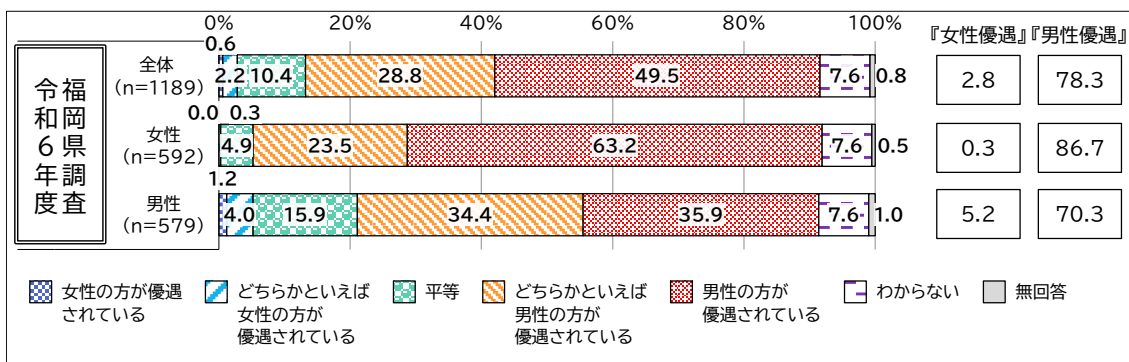
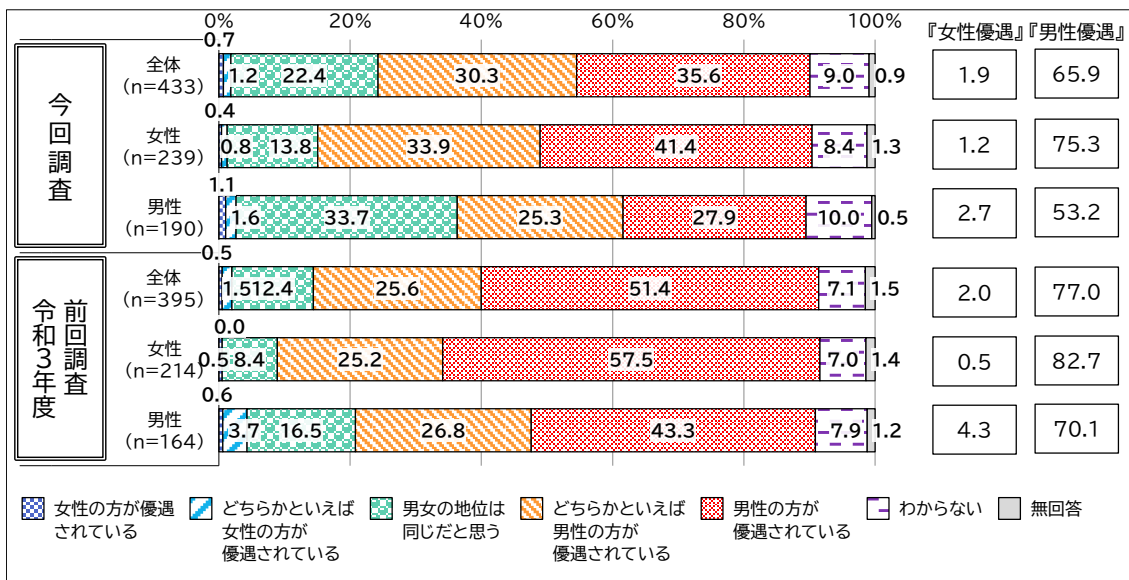
#### (4) 地域活動・社会活動の場では

- 「地域活動・社会活動の場」における男女の地位については、「男女の地位は同じだと思う」が37.9%と最も高く、次いで「どちらかといえば男性の方が優遇されている」28.4%、「わからない」14.1%となっている。また、『男性優遇』は『女性優遇』より35.7ポイント高くなっている。
- 性別でみると、女性は男性より『男性優遇』が21.7ポイント高くなっている。
- 前回調査と比較すると、全体および性別ともに「男女の地位は同じだと思う」が高く、特に男性では12.2ポイント高くなっている。一方、『男性優遇』は10ポイント前後低くなっている。
- 福岡県調査と比較すると、全体および性別ともに「男女の地位は同じだと思う（福岡県：平等）」が高く、『女性優遇』は低くなっている。
- 以上のことから、「地域活動・社会活動の場」における男女の地位については、「男女の地位は同じだと思う」が最も高いものの、『男性優遇』が『女性優遇』を大きく上回っており、依然として男性が優位であるとの認識がみられる。特に女性は男性よりも『男性優遇』と感じる割合が高く、男女間で認識の差が生じている。一方で、前回調査と比較すると、「男女の地位は同じだと思う」が高く、『男性優遇』は低くなっており、平等とする認識が広がりつつある状況がみられる。また、福岡県調査と比較すると、「男女の地位は同じだと思う」は高く、『男性優遇』は低くなっており、本市の地域活動・社会活動の場における平等意識が相対的に高いことがうかがえる。



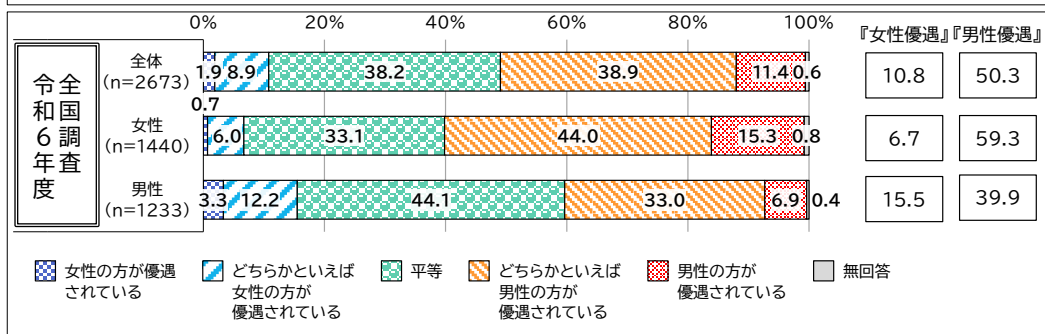
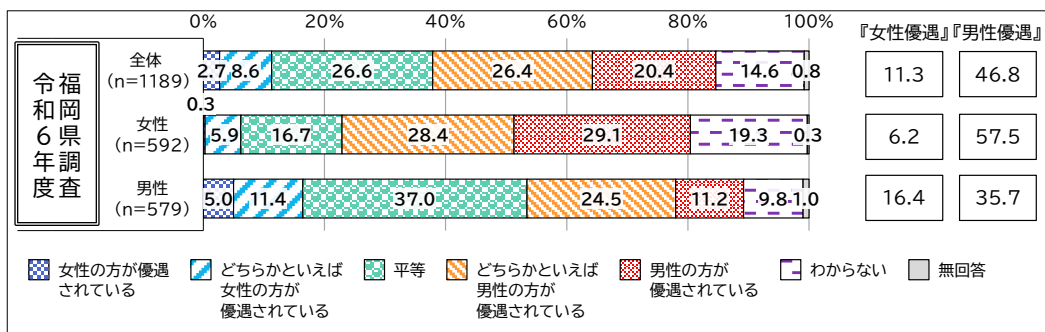
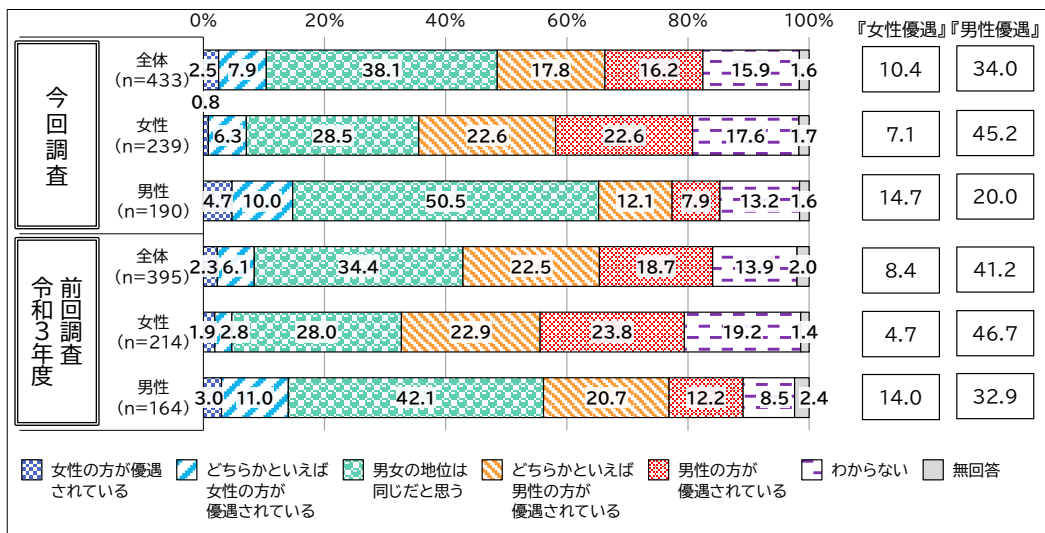
## (5) 政治の場では

- 「政治の場」における男女の地位については、「男性の方が優遇されている」が35.6%と最も高く、次いで「どちらかといえば男性の方が優遇されている」30.3%、「男女の地位は同じだと思う」22.4%となっている。また、『男性優遇』は『女性優遇』より64.0ポイント高くなっている。
- 性別でみると、女性は男性より『男性優遇』が22.1ポイント高くなっている。
- 前回調査と比較すると、全体および男性では「男女の地位は同じだと思う」が10ポイント以上高くなっている。一方、全体および性別ともに『男性優遇』は低く、特に全体および男性では10ポイント以上低くなっている。
- 福岡県調査と比較すると、全体および性別ともに「男女の地位は同じだと思う（福岡県：平等）」が高くなっている。一方、『男性優遇』は10ポイント以上低くなっている。
- 以上のことから、「政治の場」における男女の地位については、『男性優遇』が『女性優遇』を大きく上回っており、男性が優位であるとの認識が強くみられる。特に女性は男性よりも『男性優遇』と感じる割合が高く、男女間で認識の差が生じている。一方で、前回調査および福岡県調査と比較すると、「男女の地位は同じだと思う」は高く、『男性優遇』は低くなっており、本市では政治の場における平等意識が一定程度広がっていると考えられる。



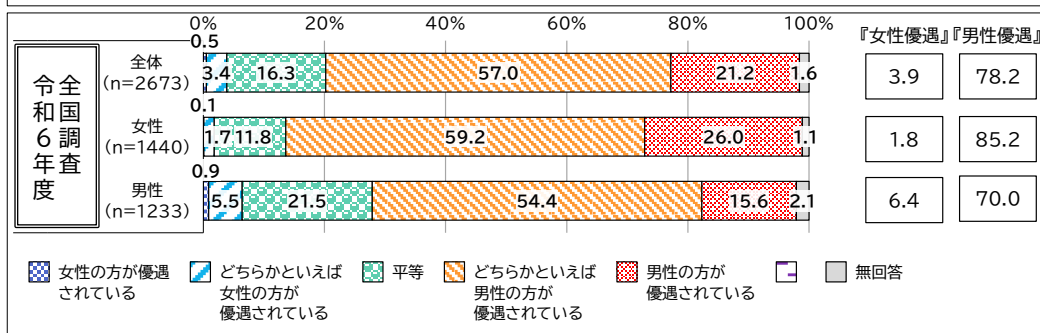
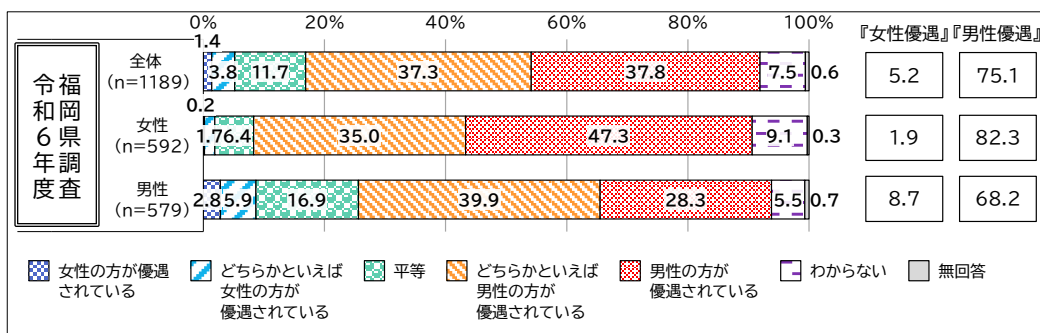
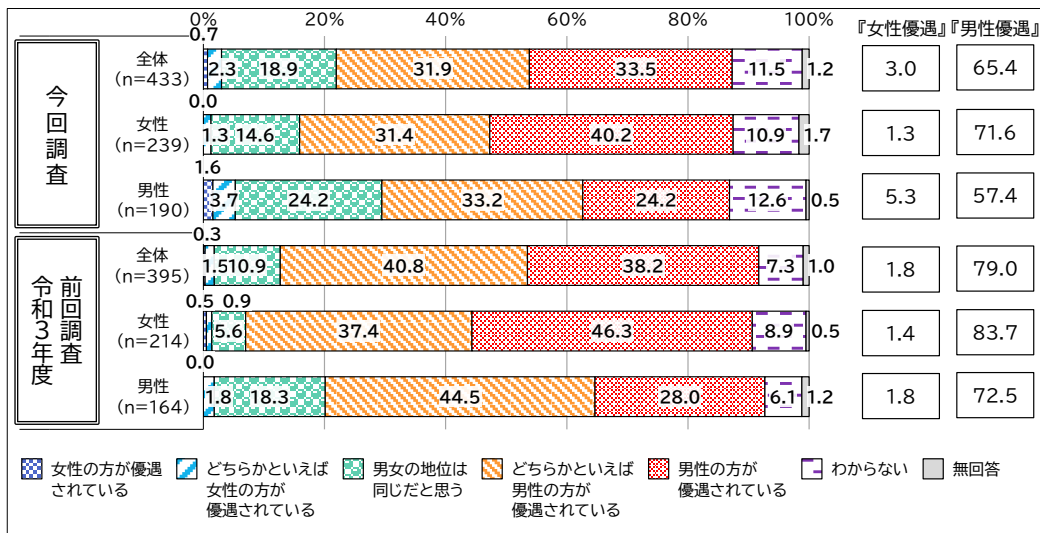
## (6) 法律や制度の上では

- 「法律や制度の上」での男女の地位については、「男女の地位は同じだと思ふ」が 38.1%と最も高く、次いで「どちらかといえば男性の方が優遇されている」17.8%、「男性の方が優遇されている」16.2%となっている。また、『男性優遇』は『女性優遇』より 23.6 ポイント高くなっている。
- 性別でみると、女性は男性より『男性優遇』が 25.2 ポイント高くなっている。
- 前回調査と比較すると、全体および性別ともに「男女の地位は同じだと思ふ」が高くなっている。一方、『男性優遇』は低く、特に男性では 12.9 ポイント低くなっている。
- 福岡県調査と比較すると、全体および性別ともに「男女の地位は同じだと思ふ（福岡県：平等）」が高く、『男性優遇』が低く、10 ポイント以上差が生じている。
- 以上のことから、「法律や制度の上」での男女の地位については、「男女の地位は同じだと思ふ」が最も高いものの、『男性優遇』が『女性優遇』を上回っており、依然として男性が優位であるとの認識がみられる。特に女性は男性よりも『男性優遇』と感じる割合が高く、男女間で認識の差が生じている。一方で、前回調査および福岡県調査と比較すると、「男女の地位は同じだと思ふ」は高く、『男性優遇』は低くなっており、本市の法律や制度の上における平等意識は一定程度広がっている傾向がうかがえる。



## (7) 社会通念・慣習・しきたりなどでは

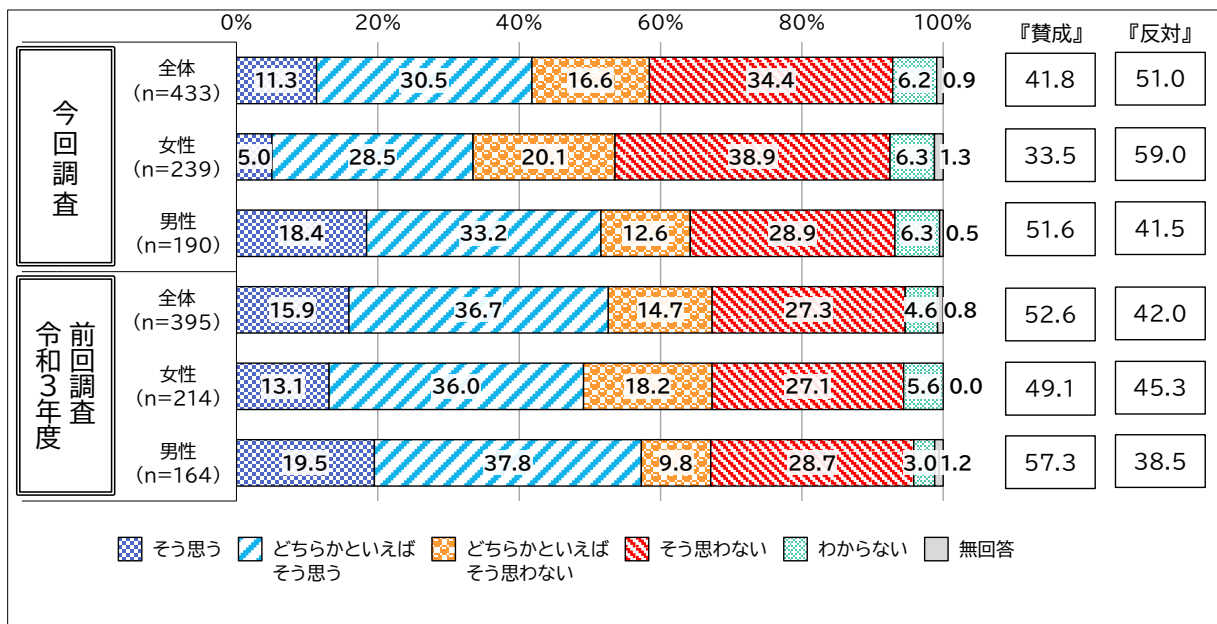
- 「社会通念・慣習・しきたりなど」における男女の地位については、「男性の方が優遇されている」が33.5%と最も高く、次いで「どちらかといえば男性の方が優遇されている」31.9%、「男女の地位は同じだと思う」18.9%となっている。また、『男性優遇』は『女性優遇』より62.4ポイント高くなっている。
- 性別でみると、女性は男性より『男性優遇』が14.2ポイント高くなっている。
- 前回調査と比較すると、全体および性別ともに「男女の地位は同じだと思う」が高くなっている。一方、『男性優遇』は10ポイント以上低くなっている。
- 福岡県調査と比較すると、全体および性別ともに「男女の地位は同じだと思う（福岡県：平等）」が高くなっている。一方、『男性優遇』は10ポイント程度低くなっている。
- 以上のことから、「社会通念・慣習・しきたりなど」における男女の地位については、『男性優遇』が『女性優遇』を大きく上回っており、男性が優位であるとの認識が強くみられる。特に女性は男性よりも『男性優遇』と感じる割合が高く、男女間で認識の差が生じている。一方で、前回調査および福岡県調査と比較すると、「男女の地位は同じだと思う」は高く、『男性優遇』は低くなっており、本市の社会通念・慣習・しきたりなどにおける平等意識は一定程度広がっている傾向がうかがえる。



問5 あなたは、子どものしつけや教育について、どのような考え方をお持ちですか。  
(単数回答)

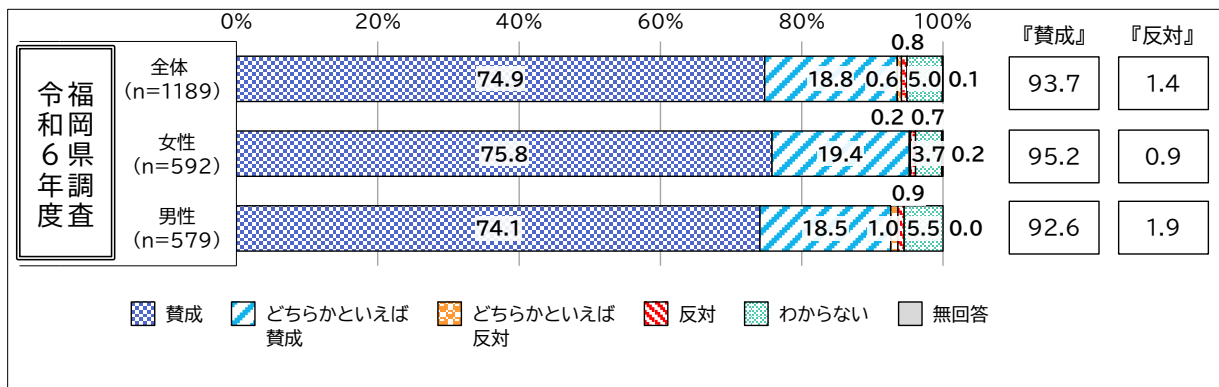
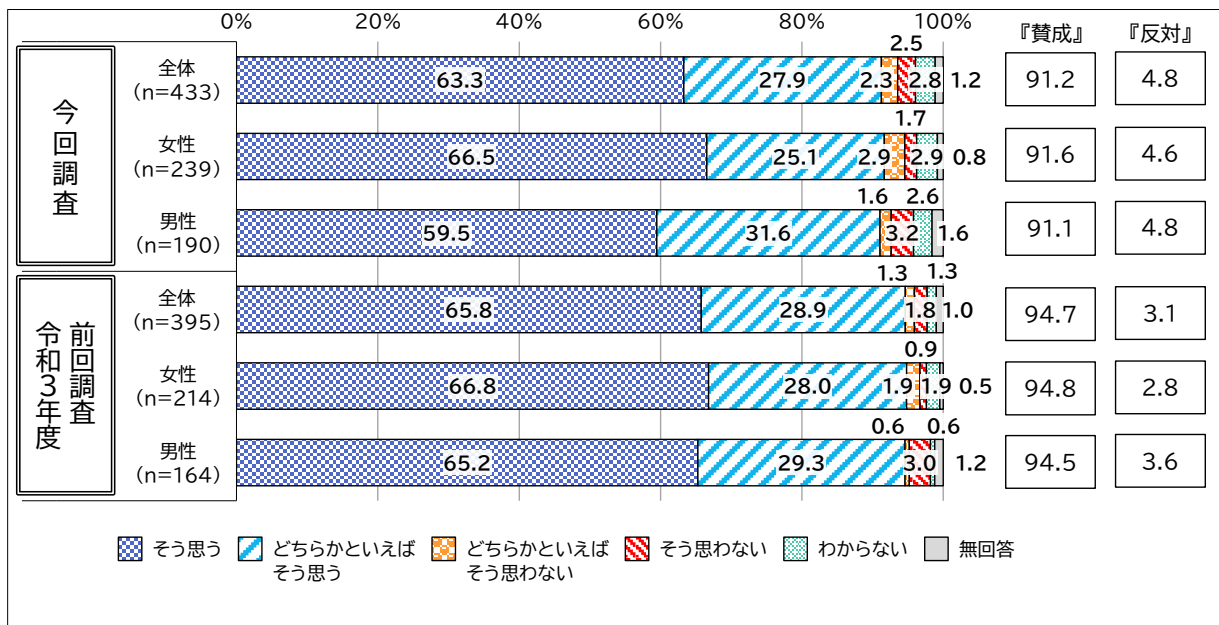
(1) 女性は女性らしく、男性は男性らしく育てた方が良い

- 「女性は女性らしく、男性は男性らしく育てた方が良い」という考え方については、「そう思わない」が 34.4%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」30.5%、「どちらかといえばそう思わない」16.6%となっている。また、『反対：どちらかといえばそう思わない+そう思わない』は『賛成：そう思う+どちらかといえばそう思う』より 10 ポイント程度高くなっている。
- 性別で見ると、女性は男性より『反対』が高く、『賛成』が低くなっており、いずれも 10 ポイント以上差が生じている。
- 前回調査と比較すると、全体および性別ともに『反対』が高く、『賛成』が低くなっており、特に女性でその傾向が顕著である。
- 以上のことから、「女性は女性らしく、男性は男性らしく育てた方が良い」という考え方については、『反対』が『賛成』を上回っており、固定的な性別役割分担意識に否定的な考え方が一定程度広がっていることがうかがえる。特に女性は男性よりも『反対』、男性は女性よりも『賛成』とする割合が高く、男女間で認識の差がみられる。一方で、前回調査と比較すると、『反対』が高く、『賛成』は低くなっており、固定的な性別役割分担意識は徐々に弱まりつつある状況がみられる。



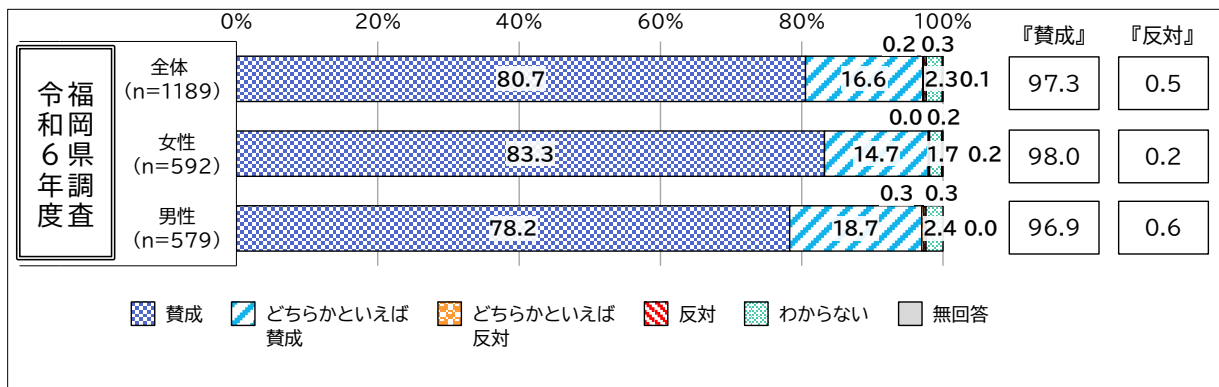
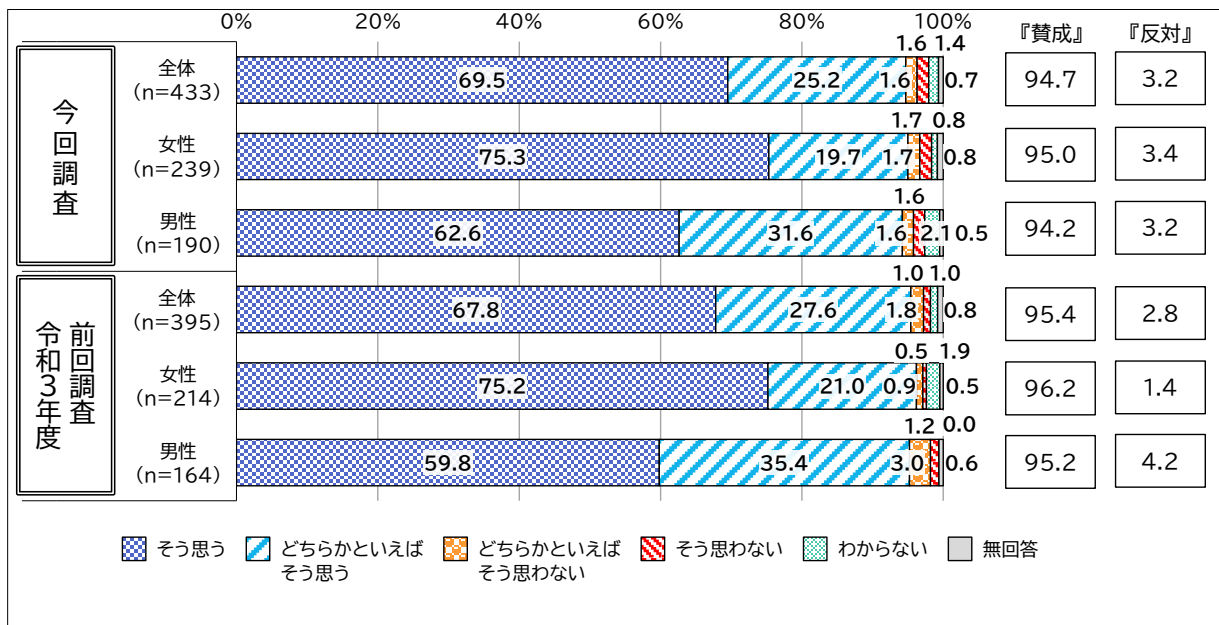
## (2) 性別に関わらず経済的に自立できるための教育が必要だ

- 「性別に関わらず経済的に自立できるための教育が必要だ」という考え方については、「そう思う」が63.3%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」27.9%、「わからない」2.8%となっており、『賛成』が9割台となっている。
- 性別でみても、男女ともに『賛成』が9割台となっている。
- 前回調査、福岡県調査と比較しても、全体および性別ともに、いずれも『賛成』が9割台となっている。
- 以上のことから、「性別に関わらず経済的に自立できるための教育が必要だ」という考え方については、『賛成』が9割台となっており、その必要性が広く認識されていることがうかがえる。また、性別、前回調査、福岡県調査と比較しても同様の傾向となっている。



### (3) 性別に関わらず、生活に必要な技術を身につけさせる方がよい

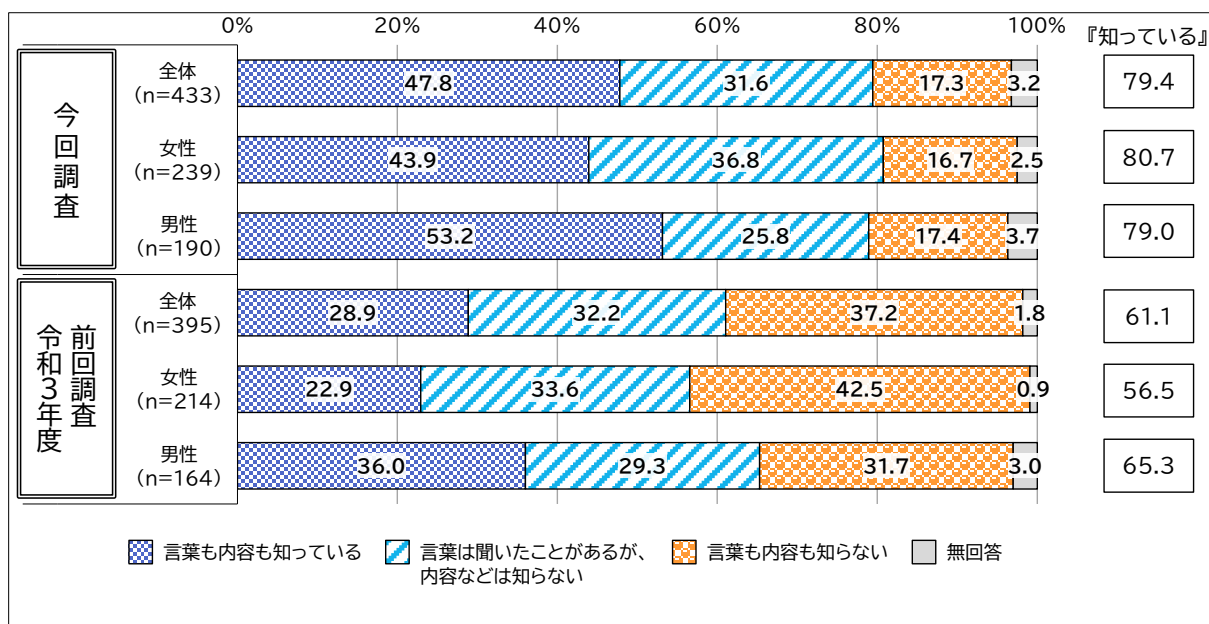
- 「性別に関わらず、生活に必要な技術を身につけさせる方がよい」という考え方については、「そう思う」が69.5%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」25.2%となっており、『賛成』が9割台となっている。
- 性別でみても、男女ともに『賛成』が9割台となっている。
- 前回調査、福岡県調査と比較しても、全体および性別ともに、いずれも『賛成』が9割台となっている。
- 以上のことから、「性別に関わらず、生活に必要な技術を身につけさせる方がよい」という考え方については、『賛成』が9割台となっており、その重要性が広く認識されていることがうかがえる。また、性別、前回調査、福岡県調査と比較しても同様の傾向となっている。



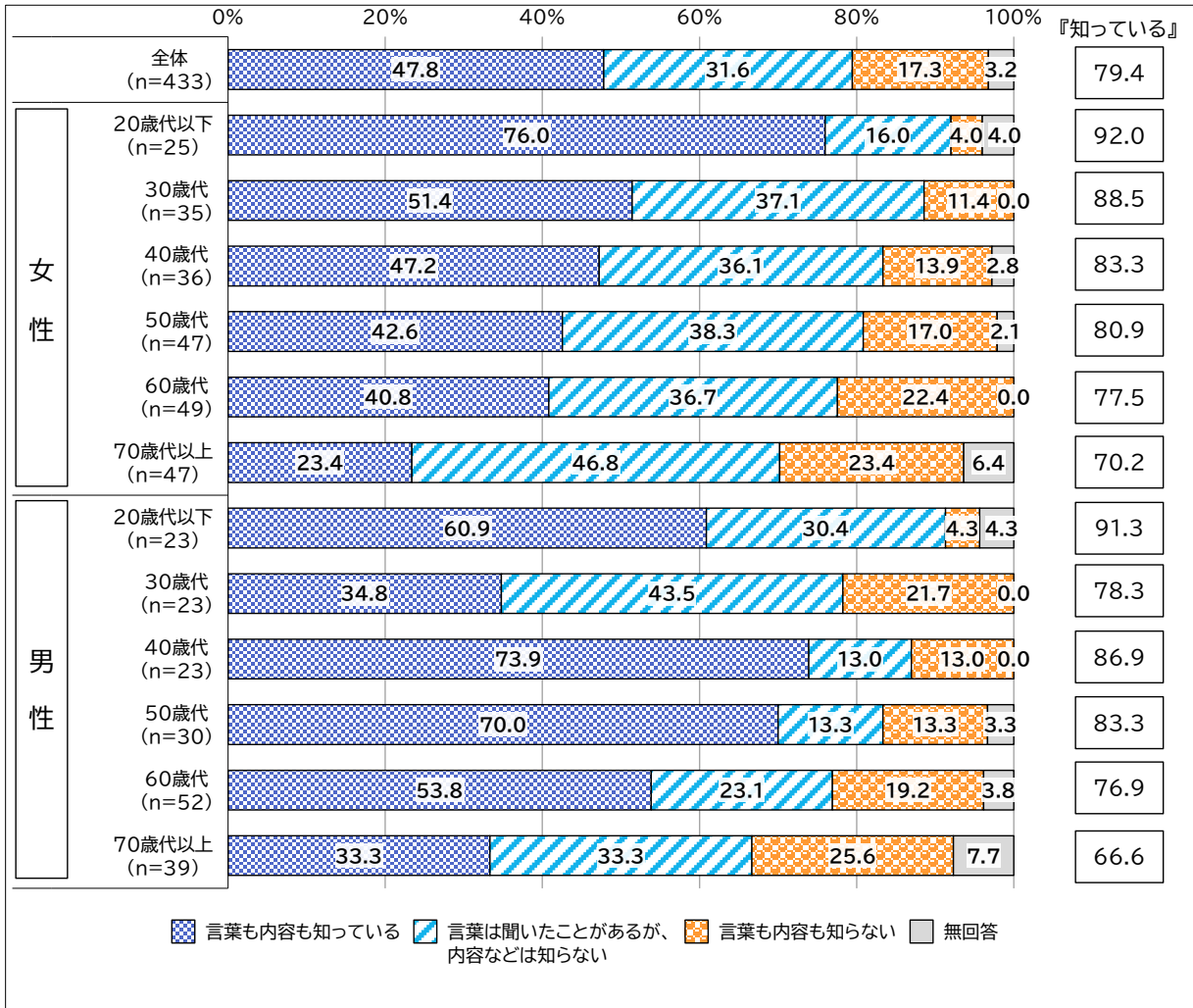
### 3. ワーク・ライフ・バランスについて

#### 問6 あなたは、「ワーク・ライフ・バランス」（仕事と生活の調和）という言葉を知っていますか。（単数回答）

- 「ワーク・ライフ・バランス」という言葉の認知度については、「言葉も内容も知っている」が47.8%と最も高く、次いで「言葉は聞いたことがあるが、内容などは知らない」31.6%、「言葉も内容も知らない」17.3%となっており、『知っている』は79.4%となっている。
- 性別で見ると、男女ともに『知っている』が8割程度となっている。
- 前回調査と比較すると、全体および性別ともに『知っている』の割合が1～2割程度高くなっている。
- 性・年代別で見ると、男女すべての年代で『知っている』は6割を超えており、特に20歳代以下では、男女ともに9割を超えている。一方、「言葉も内容も知らない」も一定数みられ、女性では60歳代および70歳代、男性では30歳代および70歳代以上で2割を超えている。
- 以上のことから、「ワーク・ライフ・バランス」という言葉については、『知っている』が約8割となっており、前回調査から2割程度高くなっていることから、認知は一定程度広がっていることがうかがえる。一方で、「言葉は聞いたことがあるが、内容などは知らない」とする回答も3割を超えており、認知の深さには差がみられる。性別では、女性は男性に比べて内容まで理解している割合がやや低く、年代別では高齢層を中心に「言葉も内容も知らない」が一定程度みられるなど、引き続き理解の促進が求められる。



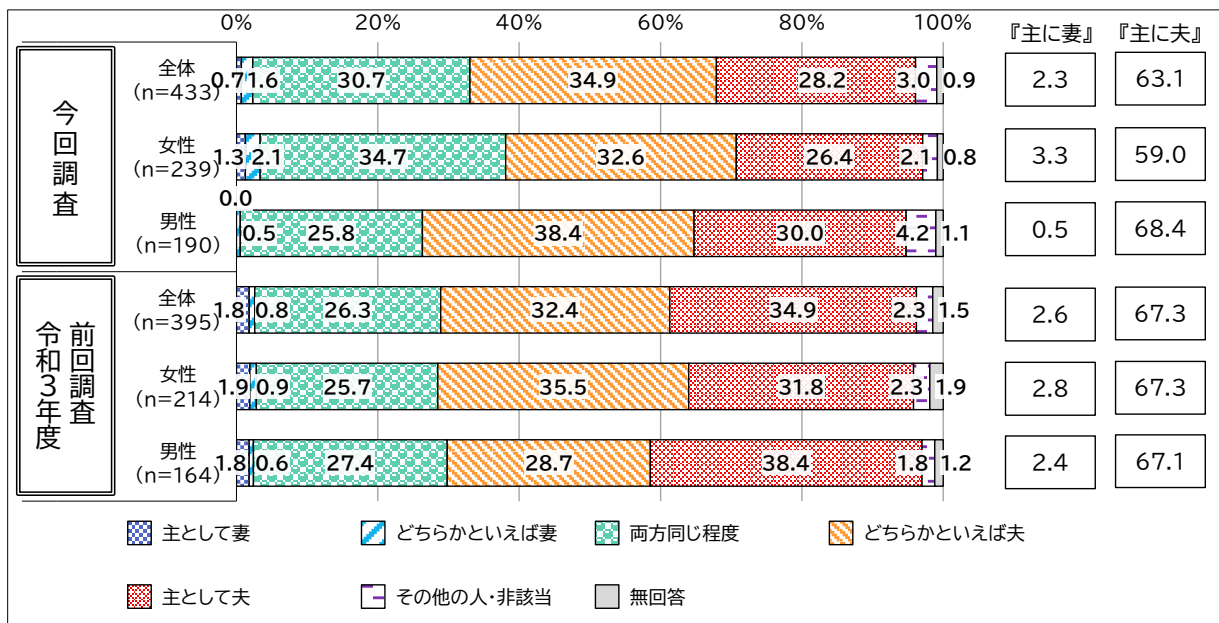
【性・年代別】



問7 あなたの家庭では、次にあげる事柄を主に誰が担当していますか。(単数回答)

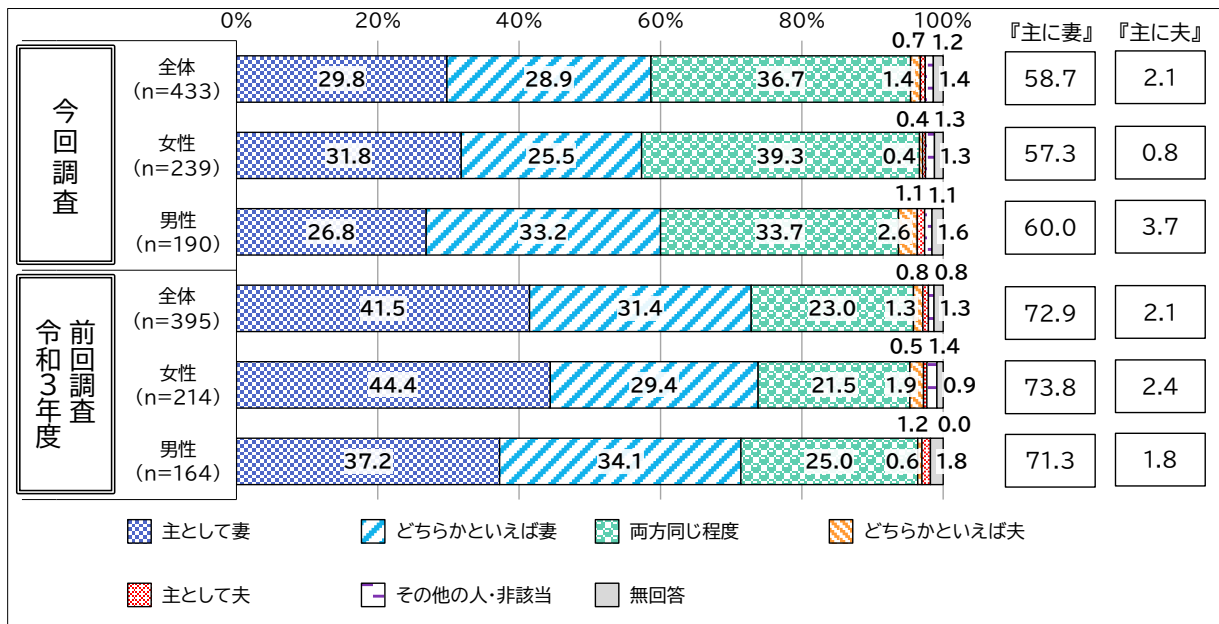
(1) 生活費を稼ぐ

- 「生活費を稼ぐ」ことの主な担当については、「どちらかといえば夫」が34.9%と最も高く、次いで「両方同じ程度」30.7%、「主として夫」28.2%となっており、『主に夫：どちらかといえば夫+主として夫』が6割を超えている。
- 性別でみると、女性は男性より『主に夫』が10ポイント程度低くなっている。
- 前回調査と比較すると、女性では「両方同じ程度」が10ポイント程度高くなっている。
- 以上のことから、「生活費を稼ぐ」という事柄については、『主に夫』が6割を超えており、依然として夫が主な担い手となっている家庭が多い状況にある。一方で、「両方同じ程度」とする回答も3割を超えており、特に女性では男性よりその割合が高く、前回調査と比べても増加していることから、女性において、家計を支える役割を夫婦で分担する傾向が強まっていることがうかがえる。



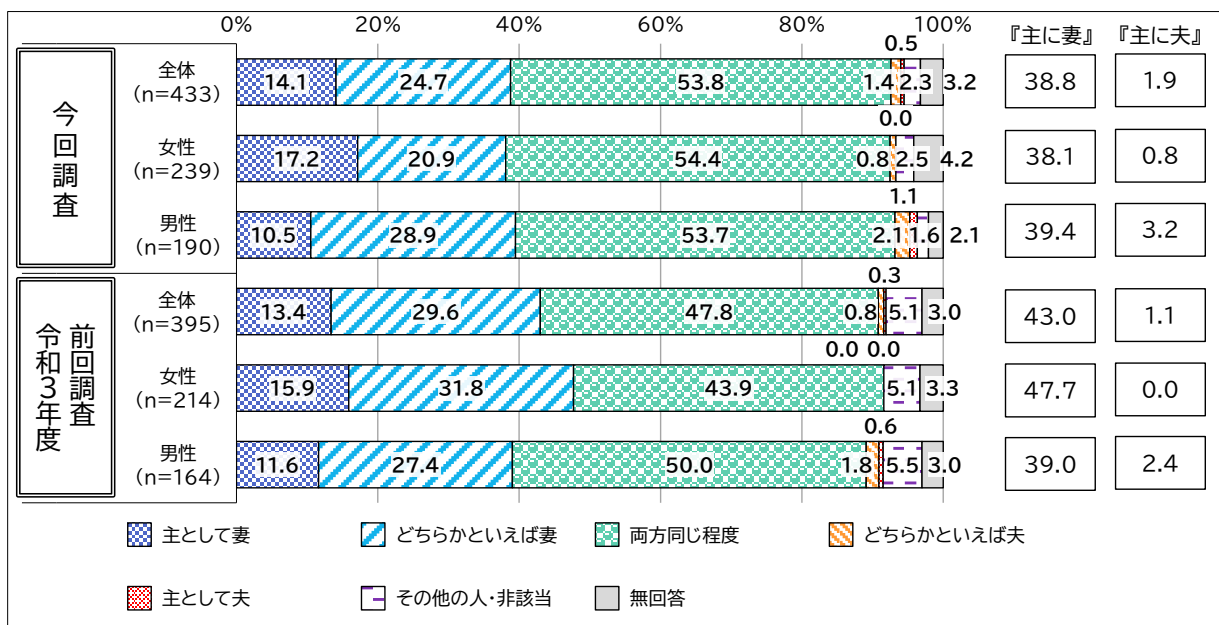
## (2) 炊事・掃除・洗濯などの家事

- 「炊事・掃除・洗濯などの家事」の主な担当については、「両方同じ程度」が 36.7%と最も高く、次いで「主として妻」29.8%、「どちらかといえば妻」28.9%となっており、『主に妻：主として妻+どちらかといえば妻』が6割程度となっている。
- 性別でみても、男女ともに『主に妻』が6割程度となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較すると、全体および性別ともに「両方同じ程度」が高く、『主に妻』が低くなっており、特に女性ではいずれも15ポイント以上差が生じている。
- 以上のことから、「炊事・掃除・洗濯などの家事」については、依然として『主に妻』が6割程度を占めており、家事の主な担い手は妻である家庭が多い状況がみられる。一方で、「両方同じ程度」とする回答は前回調査より増加しており、全体および男女ともにその割合が高まっていることから、家事を夫婦で分担する動きが広がっていることがうかがえる。



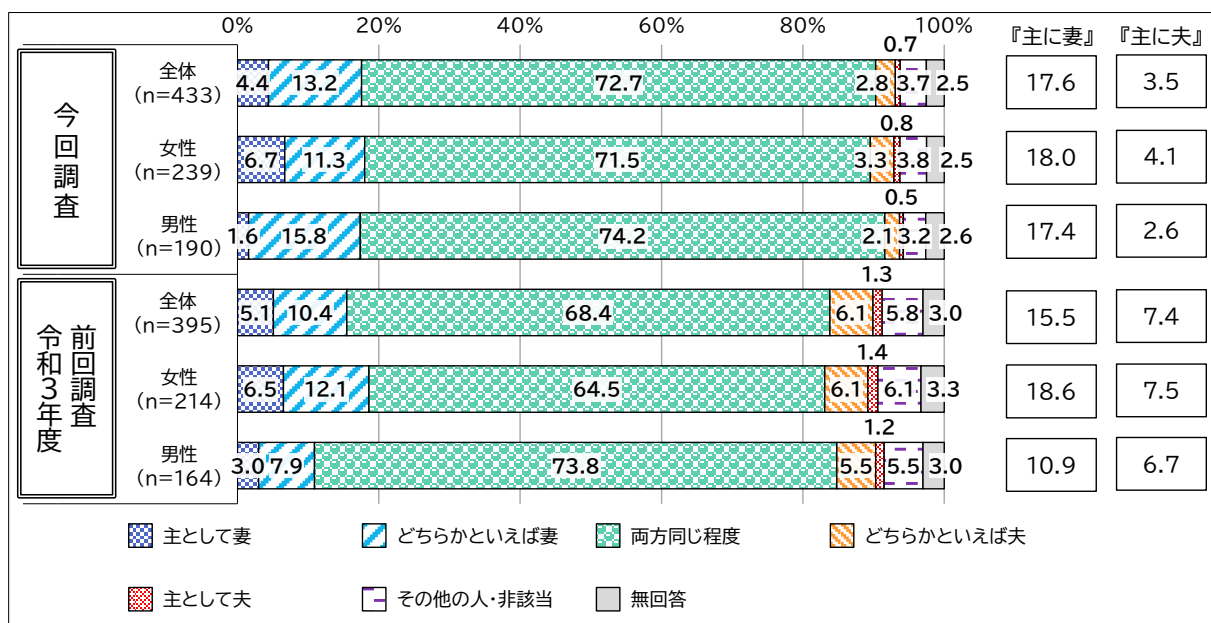
### (3) 育児・子どものしつけ

- 「育児・子どものしつけ」の主な担当については、「両方同じ程度」が 53.8%と最も高く、次いで「どちらかといえば妻」24.7%、「主として妻」14.1%となっており、『主に妻』も約4割となっている。
- 性別でみても、男女ともに「両方同じ程度」が5割台、『主に妻』が約4割となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較すると、女性では「両方同じ程度」が高く、『主に妻』が低くなっており、いずれも10ポイント程度差が生じている。
- 以上のことから、「育児・子どものしつけ」については、「両方同じ程度」が半数を占め、夫婦で分担している家庭が多いことがうかがえる。一方で、『主に妻』も約4割を占めており、依然として女性が中心となっている家庭も一定程度みられる。また、前回調査と比較すると、特に女性では「両方同じ程度」が高く、『主に妻』が低くなっていることから、育児・子どものしつけについては女性を中心に夫婦分担の傾向が強まっていることがうかがえる。



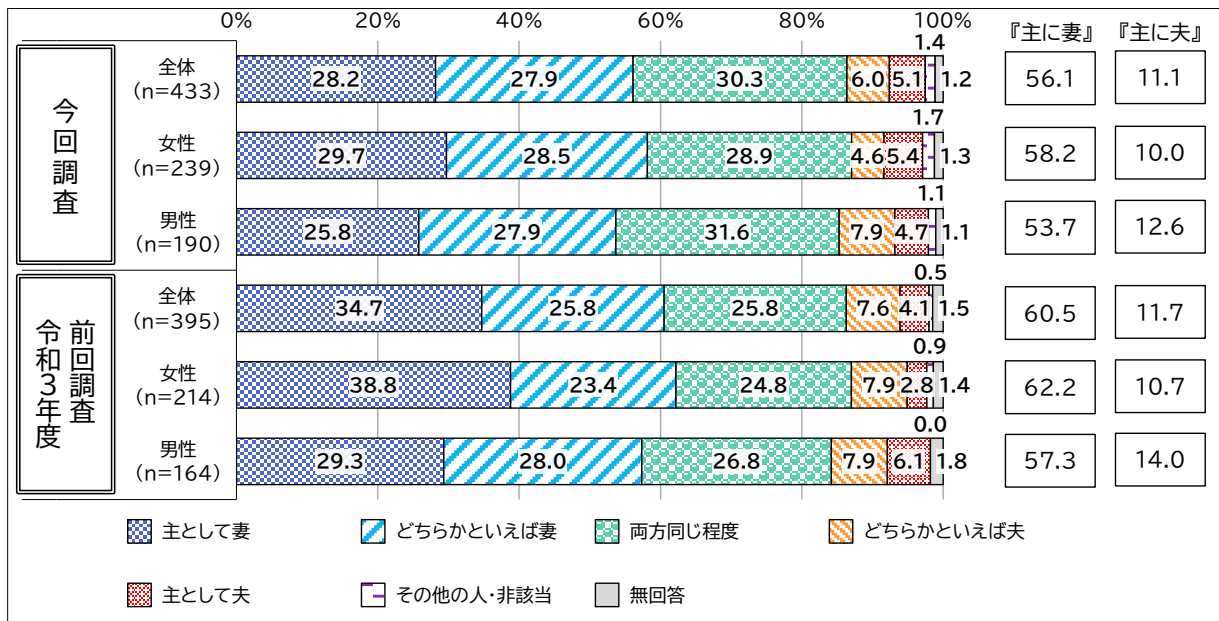
#### (4) 子どもの教育方針・進路目標の決定

- 「子どもの教育方針・進路目標の決定」の主な担当については、「両方同じ程度」が72.7%と最も高く、次いで「どちらかといえば妻」13.2%、「主として妻」4.4%となっており、『主に妻』が約2割となっている。
- 性別でみても、男女ともに「両方同じ程度」が7割台、『主に妻』が約2割となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較しても、全体および性別ともに大きな変化はみられない。
- 以上のことから、「子どもの教育方針・進路目標の決定」については、夫婦で共同して決定している家庭が大半を占めており、性別による大きな差はみられず、前回調査と比較しても大きな変化はみられないことから、教育方針や進路決定については、夫婦による共同決定が定着している様子がうかがえる。



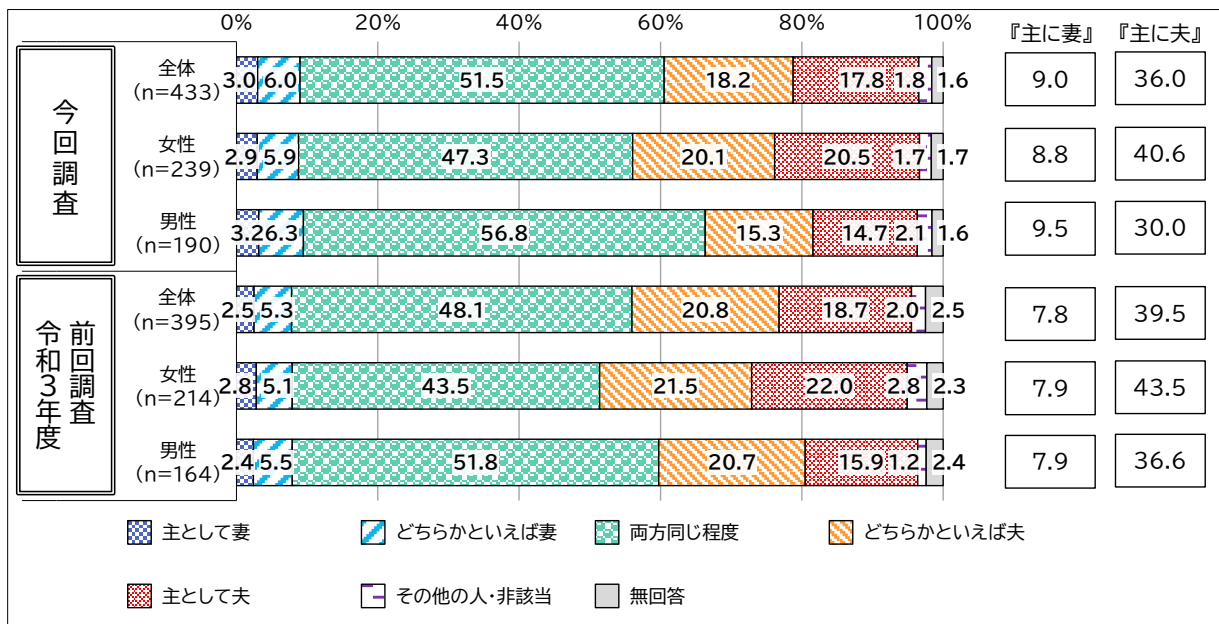
## (5) 家計支出の管理

- 「家計支出の管理」の主な担当については、「両方同じ程度」が 30.3%と最も高く、次いで「主として妻」28.2%、「どちらかといえば妻」27.9%となっており、『主に妻』が5割台となっている。
- 性別でみても、男女ともに『主に妻』が5割台、「両方同じ程度」が3割程度となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較すると、女性では「主に妻」が4ポイント程度低くなっている。
- 以上のことから、「家計支出の管理」については、『主に妻』が5割台であり、依然として妻が中心となって担っている家庭が多いことがうかがえる。一方で、「両方同じ程度」も3割を占め、前回調査と比較しても高くなっていることから、家計管理においても夫婦で分担する傾向が徐々に広がっている様子もみられる。



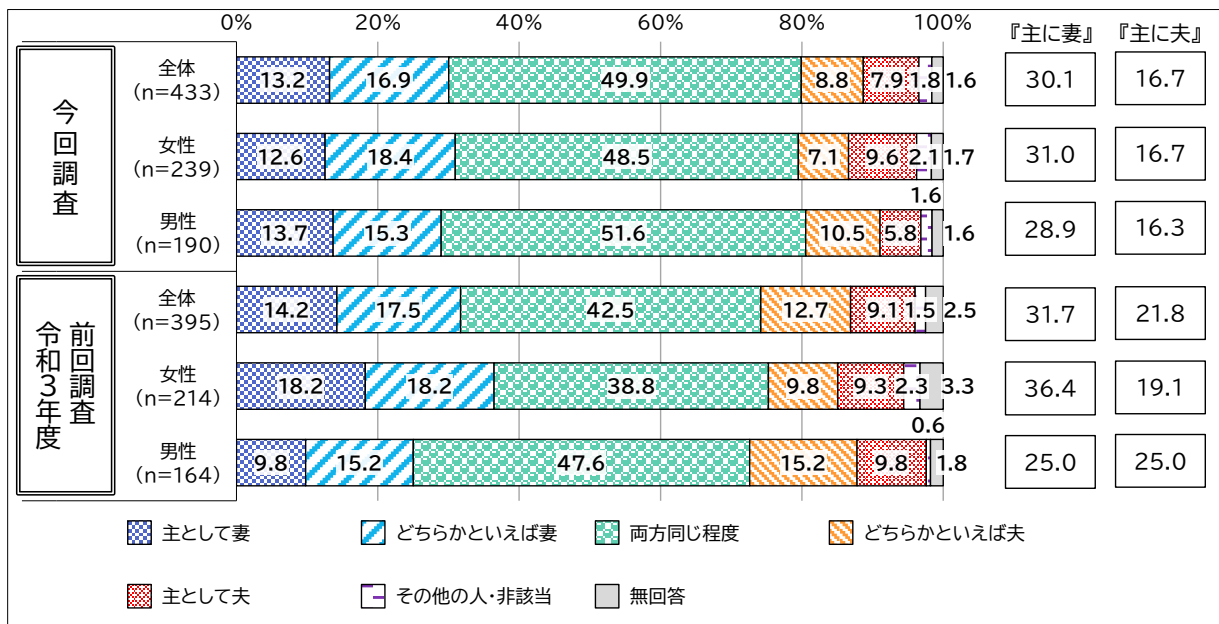
## (6) 土地・家屋・その他高額商品の購入

- 「土地・家屋・その他高額商品の購入」の主な担当については、「両方同じ程度」が 51.5%と最も高く、次いで「どちらかといえば夫」18.2%、「主として夫」17.8%となっており、『主に夫』も3割を超えている。
- 性別でみると、女性は男性より『主に夫』が高く、「両方同じ程度」が低くなっており、いずれも10ポイント程度差が生じている。
- 前回調査と比較すると、全体および性別ともに大きな変化はみられない。
- 以上のことから、「土地・家屋・その他高額商品の購入」については、「両方同じ程度」が5割を超えており、夫婦が共同で決定している家庭が多いことがうかがえる。一方で、『主に夫』も3割を超えており、依然として夫が中心となっている家庭も一定程度みられる。また、性別でみると、女性は男性より『主に夫』が高く、「両方同じ程度」が低いなど、男女で認識の差もうかがえる。



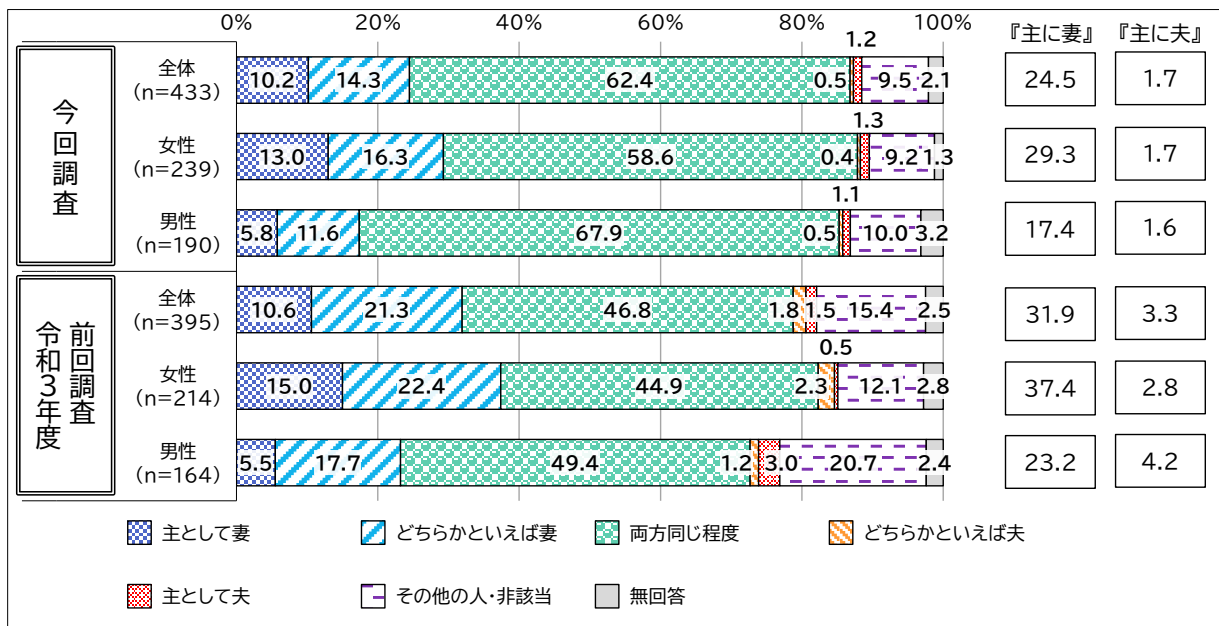
## (7) 貯蓄・投資などの生活設計

- 「貯蓄・投資などの生活設計」の主な担当については、「両方同じ程度」が49.9%と約5割で最も高く、次いで「どちらかといえば妻」16.9%、「主として妻」13.2%となっており、『主に妻』も3割となっている。
- 性別でも、男女ともに「両方同じ程度」が5割程度、『主に妻』が3割程度となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較すると、女性では「両方同じ程度」が10ポイント程度高くなっている。
- 以上のことから、「貯蓄・投資などの生活設計」については、「両方同じ程度」が約5割を占め、夫婦で共同して担っている家庭が多いことがうかがえる。一方、『主に妻』も3割を占めており、妻が中心となって担っている家庭も一定数みられる。また、前回調査と比較すると共同で担う割合が増加しており、生活設計においても夫婦での分担や協力の傾向が広がっている様子がうかがえる。



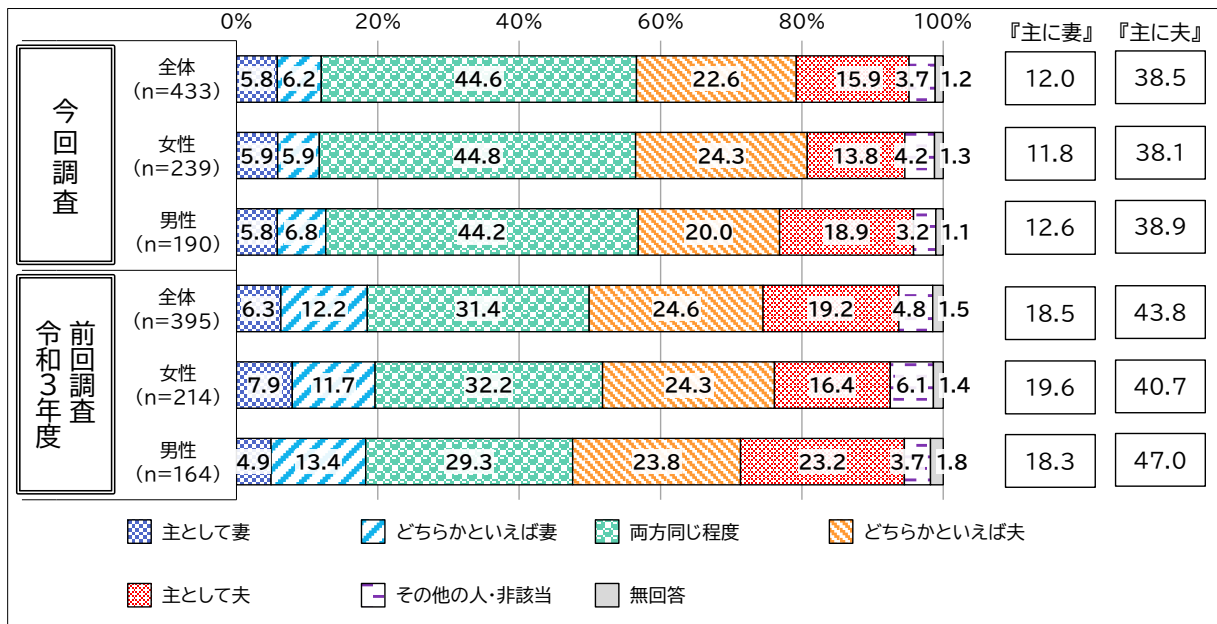
## (8) 親の介護

- 「親の介護」の主な担当については、「両方同じ程度」が 62.4%と最も高く、次いで「どちらかといえば妻」14.3%、「主として妻」10.2%となっており、『主に妻』は2割台となっている。
- 性別でみると、女性は男性より『主に妻』が高く、「両方同じ程度」が低くなっており、10ポイント前後差が生じている。
- 前回調査と比較すると、全体および性別ともに「両方同じ程度」が10ポイント以上高くなっている。一方『主に妻』『主に夫』は低くなっている。
- 以上のことから、「親の介護」については、「両方同じ程度」が6割を超えており、夫婦で共同して担うとする回答が多数を占めている。一方で、『主に妻』も2割台となっており、妻が中心となる家庭も一定程度みられる。性別でみると、女性は男性より妻中心とする割合が高く、認識に差がみられるものの、前回調査と比較すると共同で担う割合が大きく増加していることから、親の介護においても夫婦で協力して対応しようとする実態が広がっている様子がうかがえる。



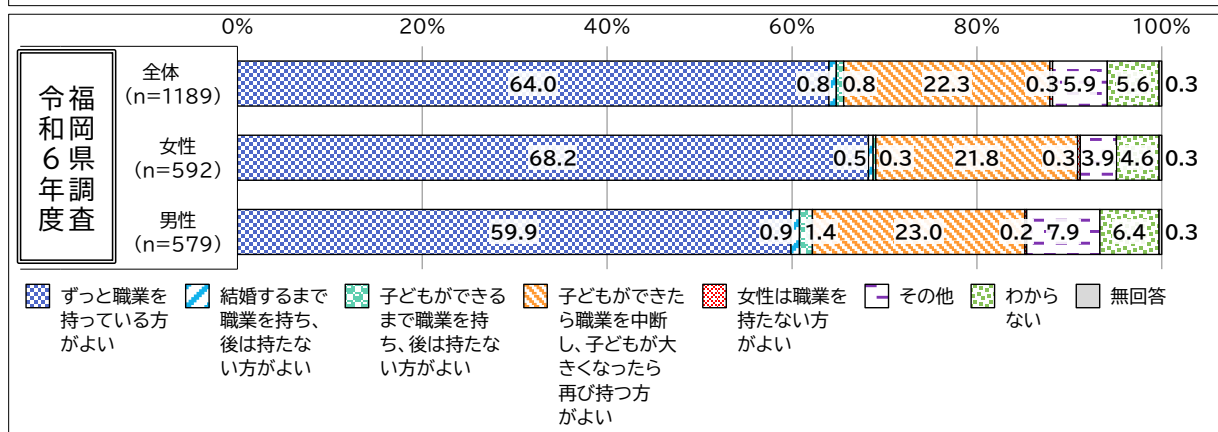
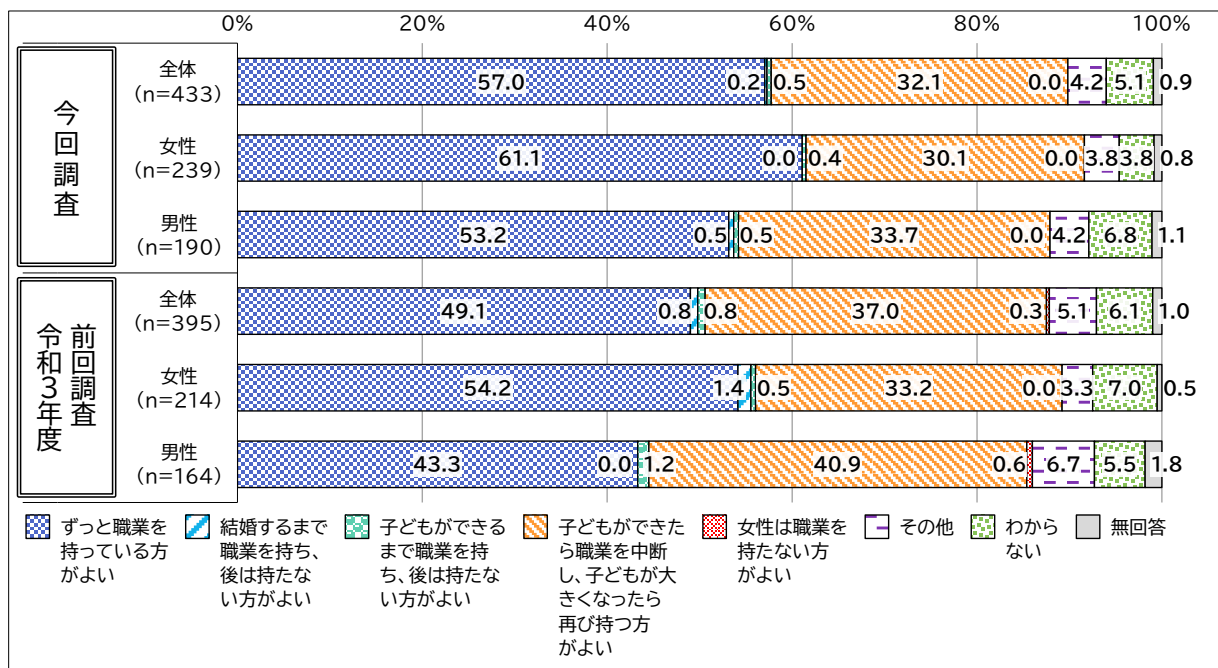
### (9) 町内会・自治会等、会合への参加

- 「町内会・自治会等、会合への参加」の主な担当については、「両方同じ程度」が44.6%と最も高く、次いで「どちらかといえば夫」22.6%、「主として夫」15.9%となっており、『主に夫』も約4割となっている。
- 性別でみても、男女ともに「両方同じ程度」が4割台、『主に夫』が約4割となっている。
- 前回調査と比較すると、全体および性別ともに「両方同じ程度」が10ポイント以上高くなっている。一方『主に妻』『主に夫』は低くなっている。
- 以上のことから、「町内会・自治会等、会合への参加」については、「両方同じ程度」が4割を超えて最も高いものの、『主に夫』も約4割を占めており、夫が中心となって参加している家庭も多いことがうかがえる。また、前回調査と比較すると共同で参加する割合が増加しており、地域活動への参加についても夫婦で分担する傾向が広がっている様子がうかがえる。



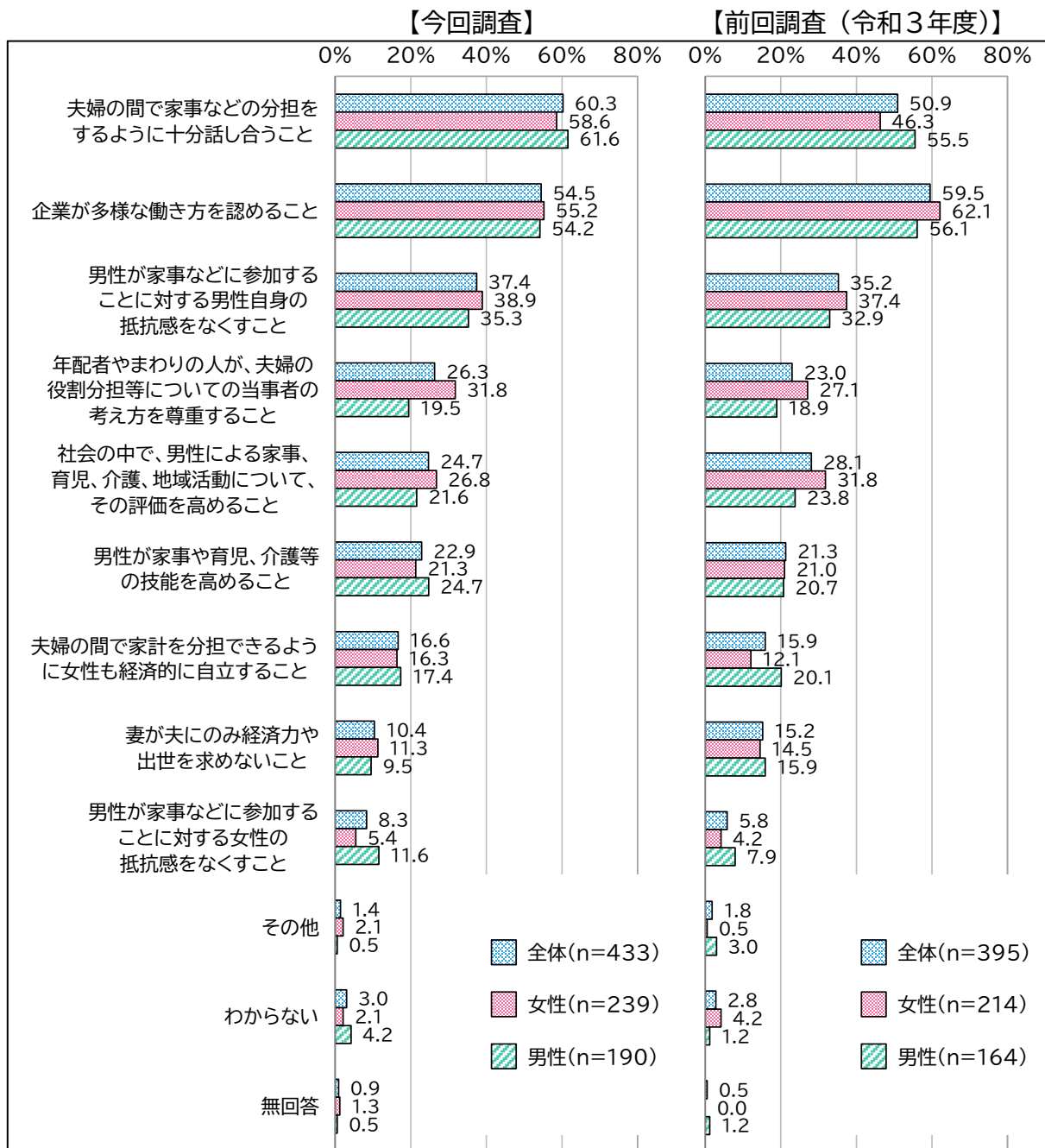
## 問8 女性が職業を持つことについて、どのような形が望ましいと思いますか。 (単数回答)

- 女性が職業を持つことについては、「ずっと職業を持っている方がよい」が57.0%と5割を超えて最も高く、次いで「子どもができたなら職業を中断し、子どもが大きくなったら再び持つ方がよい」32.1%、「わからない」5.1%となっている。
- 性別でみても、男女ともに「ずっと職業を持っている方がよい」が最も高く、いずれも5割を超えている。
- 前回調査と比較すると、全体および性別ともに「ずっと職業を持っている方がよい」は高く、「子どもができたなら職業を中断し、子どもが大きくなったら再び持つ方がよい」は低くなっている。
- 福岡県調査と比較すると、全体および性別ともに「子どもができたなら職業を中断し、子どもが大きくなったら再び持つ方がよい」は10ポイント程度高くなっている。
- 以上のことから、女性が職業を持つことについては、「ずっと職業を持っている方がよい」が全体および性別ともに5割を超えて最も高く、継続就業を望む意識が広くみられる。一方、「子どもができたなら職業を中断し、子どもが大きくなったら再び持つ方がよい」も3割程度みられ、出産・子育て後の再就業を望む考え方も一定程度みられる。前回調査と比較すると継続就業を望む意識は高まっているものの、福岡県調査と比べると本市では出産・子育て後の再就業を望む割合が高く、今後は、出産・育児期においても継続して働くことができる環境づくりが求められる。



**問9 男性が女性とともに家事、育児、介護、地域活動に積極的に参加していくためには、どのようなことが必要だと思いますか。（複数回答）**

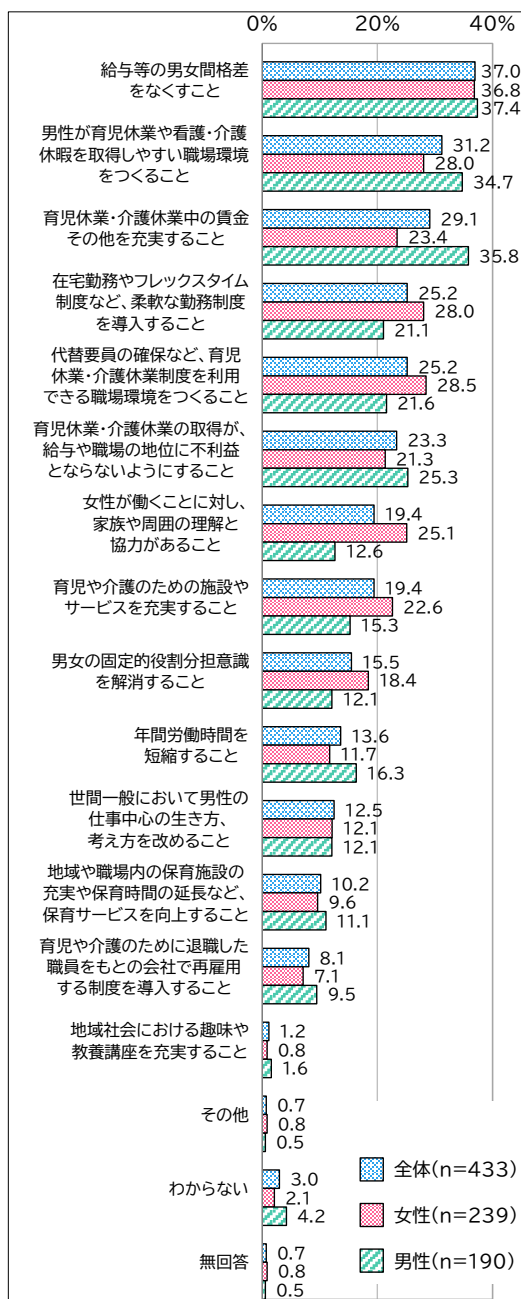
- 男性が女性とともに家事や育児などに積極的に参加するために必要なことについては、「夫婦の間で家事などの分担をするように十分話し合うこと」が60.3%と最も高く、次いで「企業が多様な働き方を認めること」54.5%、「男性が家事などに参加することに対する男性自身の抵抗感をなくすこと」37.4%となっている。
- 性別でみても、男女ともに「夫婦の間で家事などの分担をするように十分話し合うこと」が最も高くなっている。
- 前回調査と比較すると、全体および女性では、「夫婦の間で家事などの分担をするように十分話し合うこと」が10ポイント程度高くなっている。
- 以上のことから、男性が家事や育児などに積極的に参加するためには、「夫婦間で家事分担について十分に話し合うこと」や「企業が多様な働き方を認めること」など、家庭内での役割分担の見直しと働き方の環境整備が重要と考えられる。特に、夫婦間で十分に話し合うことの必要性は前回調査より高まっており、家庭内での意識の変化もうかがえる。



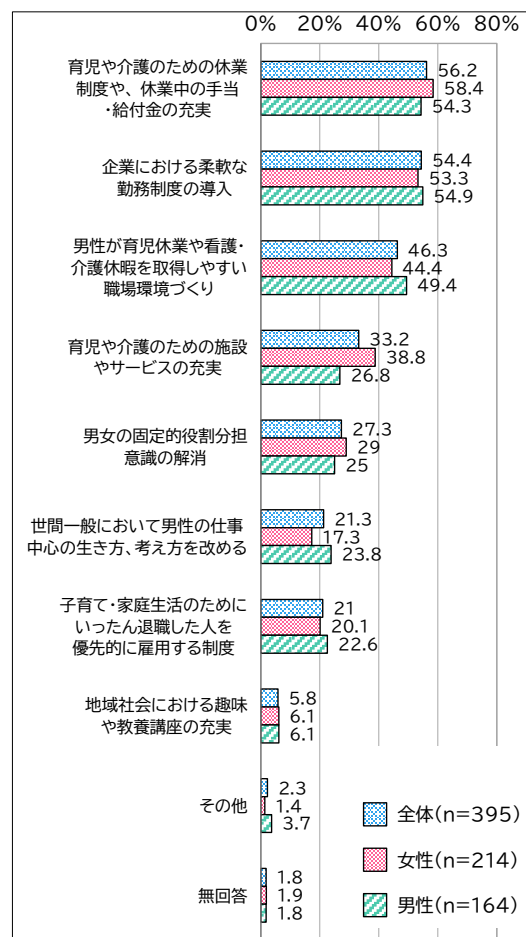
## 問10 男女が共に仕事と家庭の両立をしていくためには、どのような条件が必要だと思いますか。(複数回答)

- 男女が共に仕事と家庭を両立していくために必要なことについては、「給与等の男女間格差をなくすこと」が37.0%と最も高く、次いで「男性が育児休業や看護・介護休暇を取得しやすい職場環境をつくること」31.2%、「育児休業・介護休業中の賃金その他を充実すること」29.1%となっている。
- 性別でみると、男女ともに「給与等の男女間格差をなくすこと」が最も高くなっている。また、女性は男性より、「女性が働くことに対し、家族や周囲の理解と協力があること」が高く、「育児休業・介護休業中の賃金その他を充実すること」が低くなっており、いずれも10ポイント以上差が生じている。
- 前回調査は、選択肢の項目が異なるため、参考程度。
- 男女が共に仕事と家庭を両立していくためには、男女ともに「給与等の男女間格差をなくすこと」など、働き方に関する制度や職場環境の整備が重要であると感じている。それに加えて、女性では男性と比較して家庭や周囲の理解・協力も重視する傾向があり、職場環境の改善と合わせて家庭生活の環境改善も重視している様子が見える。

【今回調査】



【前回調査(令和3年度)】

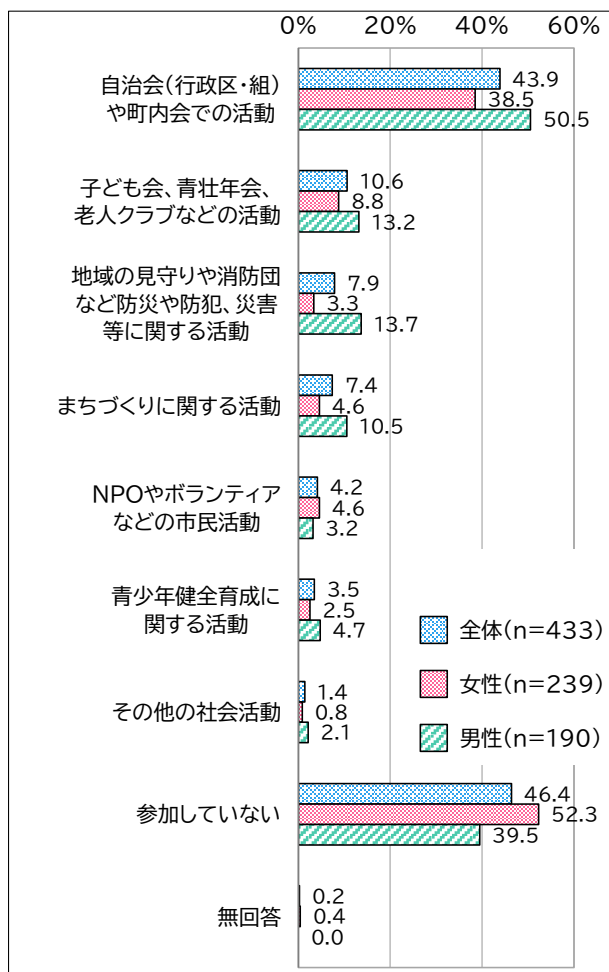


## 4. 地域活動全般について

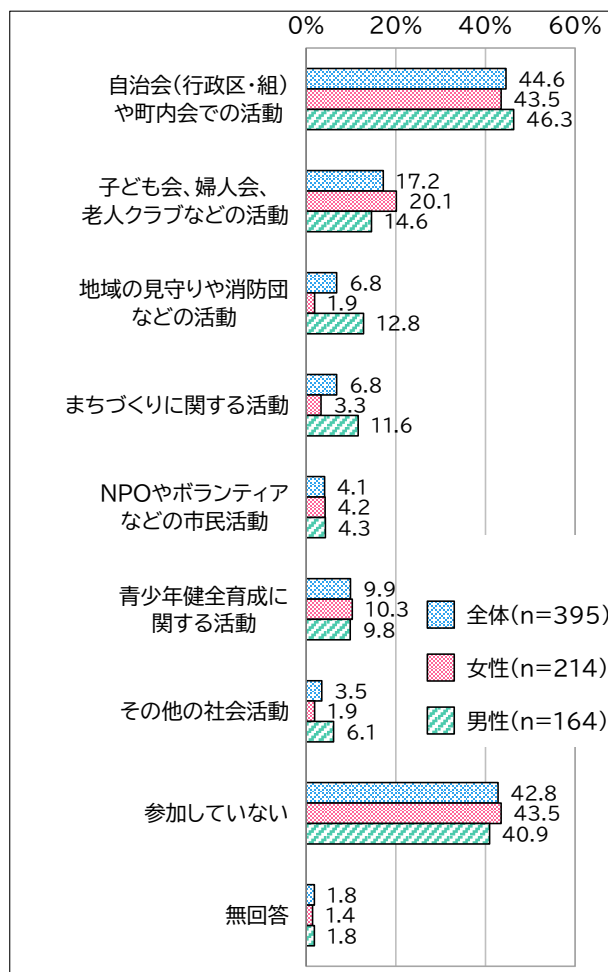
### 問11 あなたは、現在どのような地域活動に参加されていますか。(複数回答)

- 地域活動への参加状況については、「参加していない」が46.4%と最も高く、次いで「自治会（行政区・組）や町内会での活動」43.9%、「子ども会、青壮年会、老人クラブなどの活動」10.6%となっている。
- 性別でみると、女性では「参加していない」が最も高く、男性では「自治会（行政区・組）や町内会での活動」が最も高くなっており、いずれも5割を超えている。また、女性は男性より「参加していない」が高く、「自治会（行政区・組）や町内会での活動」、「地域の見守りや消防団など防災や防犯、災害等に関する活動」が低くなっており、いずれも10ポイント以上差が生じている。
- 前回調査と比較すると、女性では「参加していない」が高く、「子ども会、青壮年会、老人クラブなどの活動」が低くなっており、いずれも10ポイント前後差が生じている。
- 以上のことから、地域活動への参加状況については、「参加していない」が半数近くを占めており、地域活動に参加していない人が多い状況がうかがえる。性別でみると、男性では自治会や町内会での活動への参加が多いのに対し、女性では参加していない割合が高く、男女で参加状況に違いがみられる。また、前回調査と比較すると、特に女性においては地域活動に参加していない割合が高まっていることがうかがえる。今後は、地域活動に参加しやすい環境づくりや、女性を含め多様な住民が参加しやすい環境づくりや仕組みづくりを進めていくことが課題と考えられる。

【今回調査】



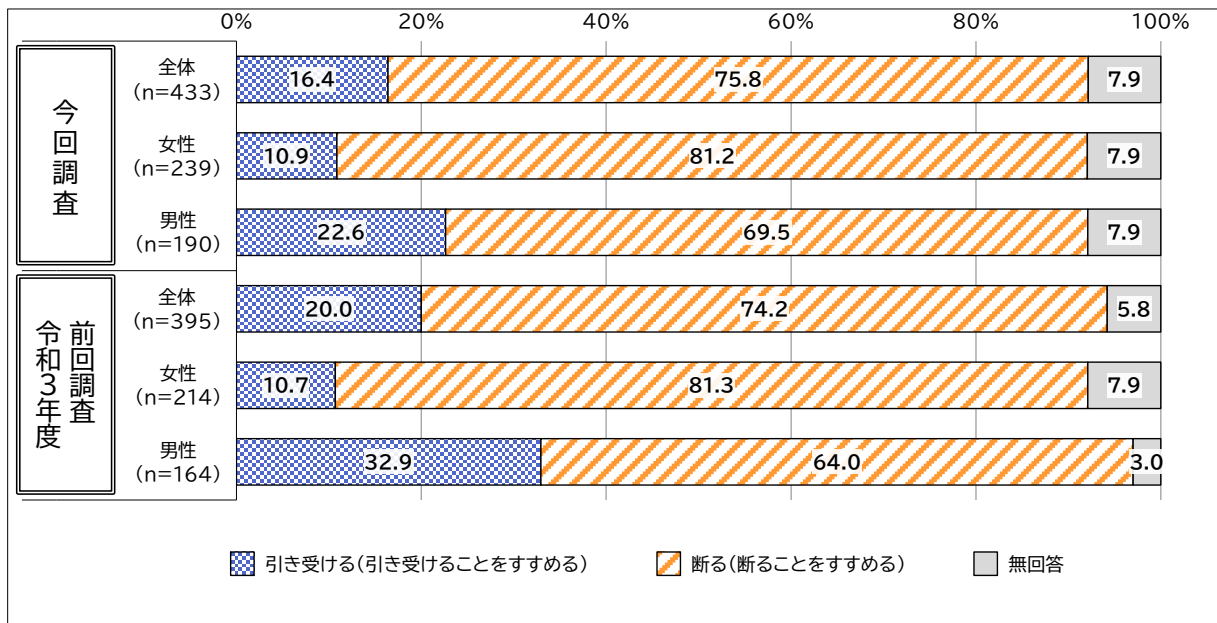
【前回調査(令和3年度)】



問12 自治会長や区長、公民館長、PTA会長、県や市の審議会・委員会のメンバーなどの役職について、おたずねします。回答者が女性の場合、もし、あなたが推薦されたら引き受けますか。回答者が男性の場合、妻などの身近な女性が推薦されたとしたら引き受けることをすすめますか。(単数回答)

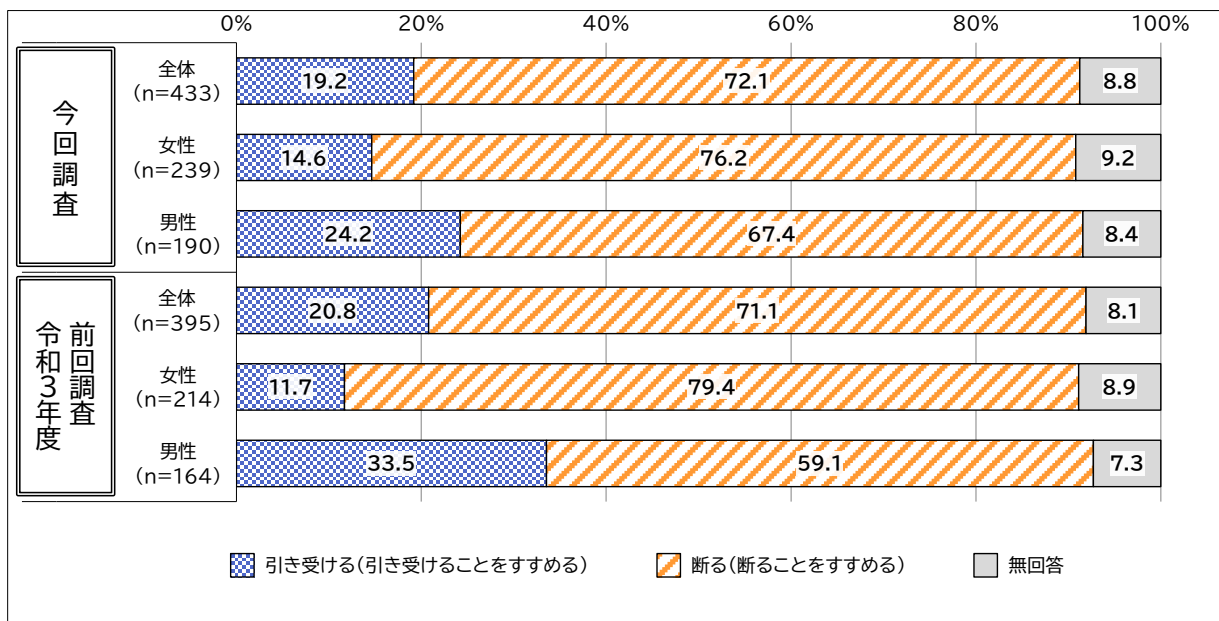
(1) 自治会長(区長)

- 自治会長(区長)について、女性には自分が推薦された場合、男性には身近な女性が推薦された場合の対応をたずねたところ、「引き受ける(引き受けることをすすめる)」は16.4%、「断る(断ることをすすめる)」は75.8%となっている。
- 性別でみると、女性は男性より「断る(断ることをすすめる)」が高く、「引き受ける(引き受けることをすすめる)」は低くなっており、いずれも10ポイント以上差が生じている。
- 前回調査と比較すると、男性では「引き受ける(引き受けることをすすめる)」が10.3ポイント低くなっている。
- 以上のことから、自治会長(区長)への推薦については、「断る(断ることをすすめる)」が約8割を占めており、引き受けることおよび引き受けることをすすめることに対して消極的な傾向がみられる。特に女性では引き受ける割合が男性より低く、役職を担うことに対する意識に男女差がみられる。また、前回調査と比較すると、男性では引き受けることをすすめる割合が低くなっており、身近な女性に役職をすすめる傾向が弱まっていることがうかがえる。



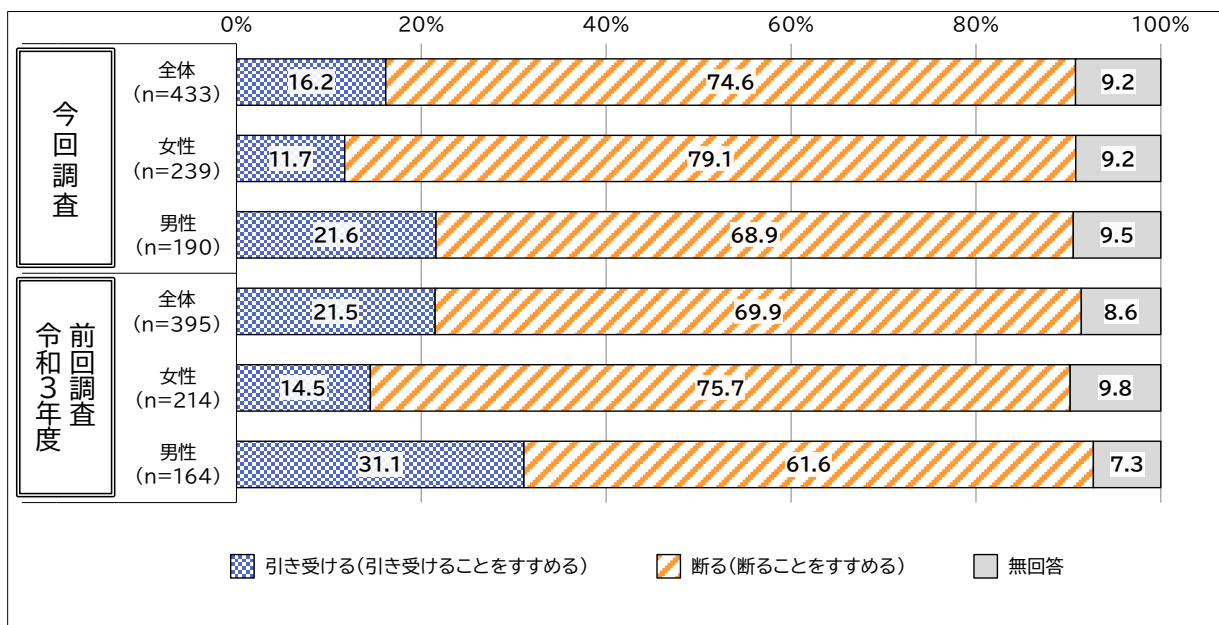
## (2) 公民館長

- 公民館長について、女性には自分が推薦された場合、男性には身近な女性が推薦された場合の対応をたずねたところ、「引き受ける（引き受けることをすすめる）」は 19.2%、「断る（断ることをすすめる）」は 72.1%となっている。
- 性別でみると、女性は男性より「断る（断ることをすすめる）」が高く、「引き受ける（引き受けることをすすめる）」は低くなっており、いずれも 10 ポイント程度差が生じている。
- 前回調査と比較すると、男性では「断る（断ることをすすめる）」が高く、「引き受ける（引き受けることをすすめる）」は低くなっており、いずれも 10 ポイント程度差が生じている。
- 以上のことから、公民館長への推薦については、「断る（断ることをすすめる）」が7割を超えており、引き受けることおよび引き受けることをすすめることに対して消極的な傾向がみられる。特に女性では引き受ける割合が男性より低く、役職を担うことに対する意識に男女差がみられる。また、前回調査と比較すると、男性では断ることをすすめる割合が高く、引き受けることをすすめる割合が低くなっており、身近な女性に役職をすすめる傾向が弱まっていることがうかがえる。



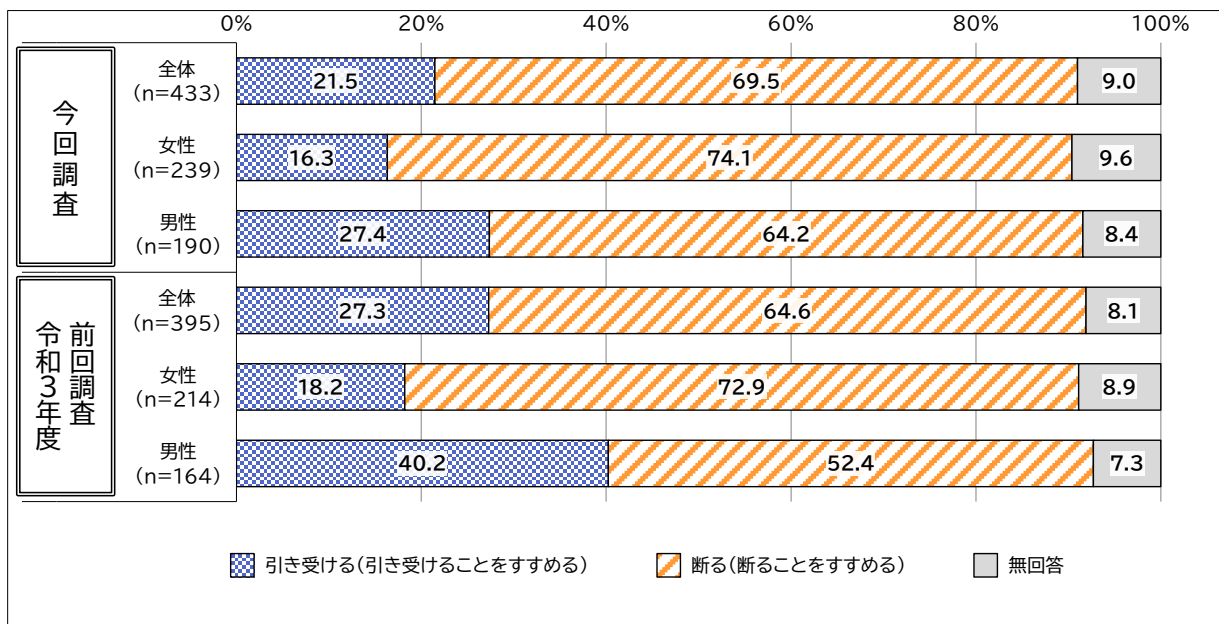
### (3) PTA会長

- PTA会長について、女性には自分が推薦された場合、男性には身近な女性が推薦された場合の対応をたずねたところ、「引き受ける（引き受けることをすすめる）」は16.2%、「断る（断ることをすすめる）」は74.6%となっている。
- 性別でみると、女性は男性より「断る（断ることをすすめる）」が高く、「引き受ける（引き受けることをすすめる）」は低くなっており、いずれも10ポイント程度差が生じている。
- 前回調査と比較すると、男性では「引き受ける（引き受けることをすすめる）」が10ポイント程度低くなっている。
- 以上のことから、PTA会長への推薦については、「断る（断ることをすすめる）」が7割を超えており、引き受けることおよび引き受けることをすすめることに対して消極的な傾向がみられる。特に女性では引き受ける割合が男性より低く、役職を担うことに対する意識に男女差がみられる。また、前回調査と比較すると、男性では引き受けることをすすめる割合が低くなっており、身近な女性に役職をすすめる傾向が弱まっていることがうかがえる。



#### (4) 県や市の審議会・委員会のメンバー

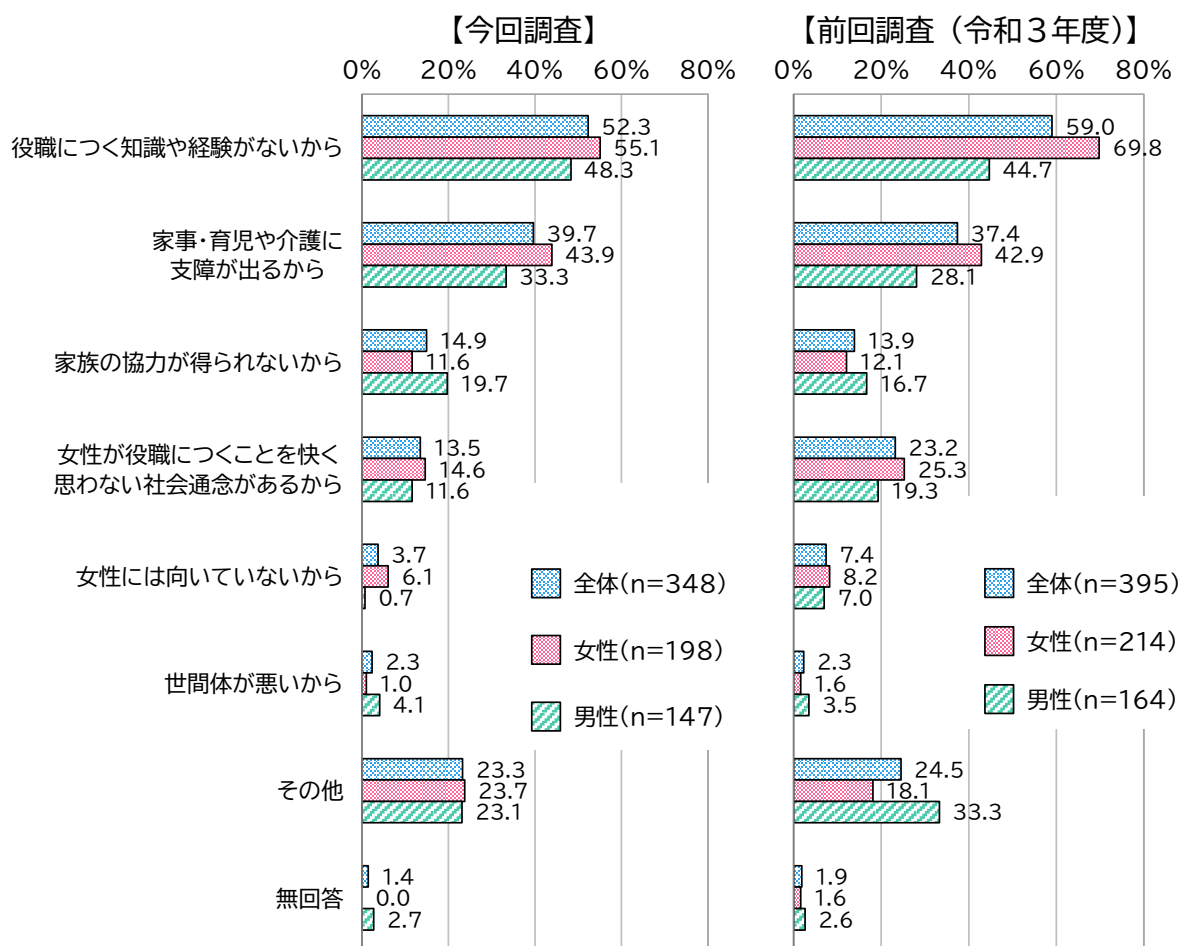
- 県や市の審議会・委員会のメンバーについて、女性には自分が推薦された場合、男性には身近な女性が推薦された場合の対応をたずねたところ、「引き受ける（引き受けることをすすめる）」は21.5%、「断る（断ることをすすめる）」は69.5%となっている。
- 性別でみると、女性は男性より「断る（断ることをすすめる）」が高く、「引き受ける（引き受けることをすすめる）」は低くなっており、いずれも10ポイント程度差が生じている。
- 前回調査と比較すると、男性では「断る（断ることをすすめる）」が高く、「引き受ける（引き受けることをすすめる）」は低くなっており、いずれも10ポイント以上差が生じている。
- 以上のことから、県や市の審議会・委員会のメンバーへの推薦については、「断る（断ることをすすめる）」が約7割となっており、引き受けることおよび引き受けることをすすめることに対して消極的な傾向がみられる。特に女性では引き受ける割合が男性より低く、役職を担うことに対する意識に男女差がみられる。また、前回調査と比較すると、男性では断ることをすすめる割合が高く、引き受けることをすすめる割合が低くなっており、身近な女性に役職をすすめる傾向が弱まっていることがうかがえる。



【問12で1つでも「2. 断る（断ることをすすめる）」と答えた方のみ】

問12—1 その理由は何ですか。（複数回答）

- 地域の役員や審議会・委員会のメンバーへの推薦を断るおよび断ることをすすめる理由としては、「役職につく知識や経験がないから」が52.3%と最も高く、次いで「家事・育児や介護に支障が出るから」39.7%、「その他」23.3%となっている。
- 性別でみると、女性は男性より「家事・育児や介護に支障が出るから」が10.6ポイント高くなっている。
- 前回調査と比較すると、女性では「役職につく知識や経験がないから」「女性が役職につくことを快く思わない社会通念があるから」、男性では「その他」がいずれも10ポイント以上低くなっている。
- 以上のことから、地域の役員や審議会・委員会のメンバーへの推薦を断るおよび断ることをすすめる理由としては、「役職につく知識や経験がないから」や「家事・育児や介護に支障が出るから」が上位となっており、役職に対する不安や家庭との両立の難しさが主な要因となっている状況がみられる。特に女性では「家事・育児や介護に支障が出るから」が男性より高く、家事・育児や介護の負担が男性よりも影響していることがうかがえる。また、前回調査と比べると、女性では役職に対する不安や社会的な受け止め方に変化がみられる。



【その他の具体的な内容（一部抜粋）】

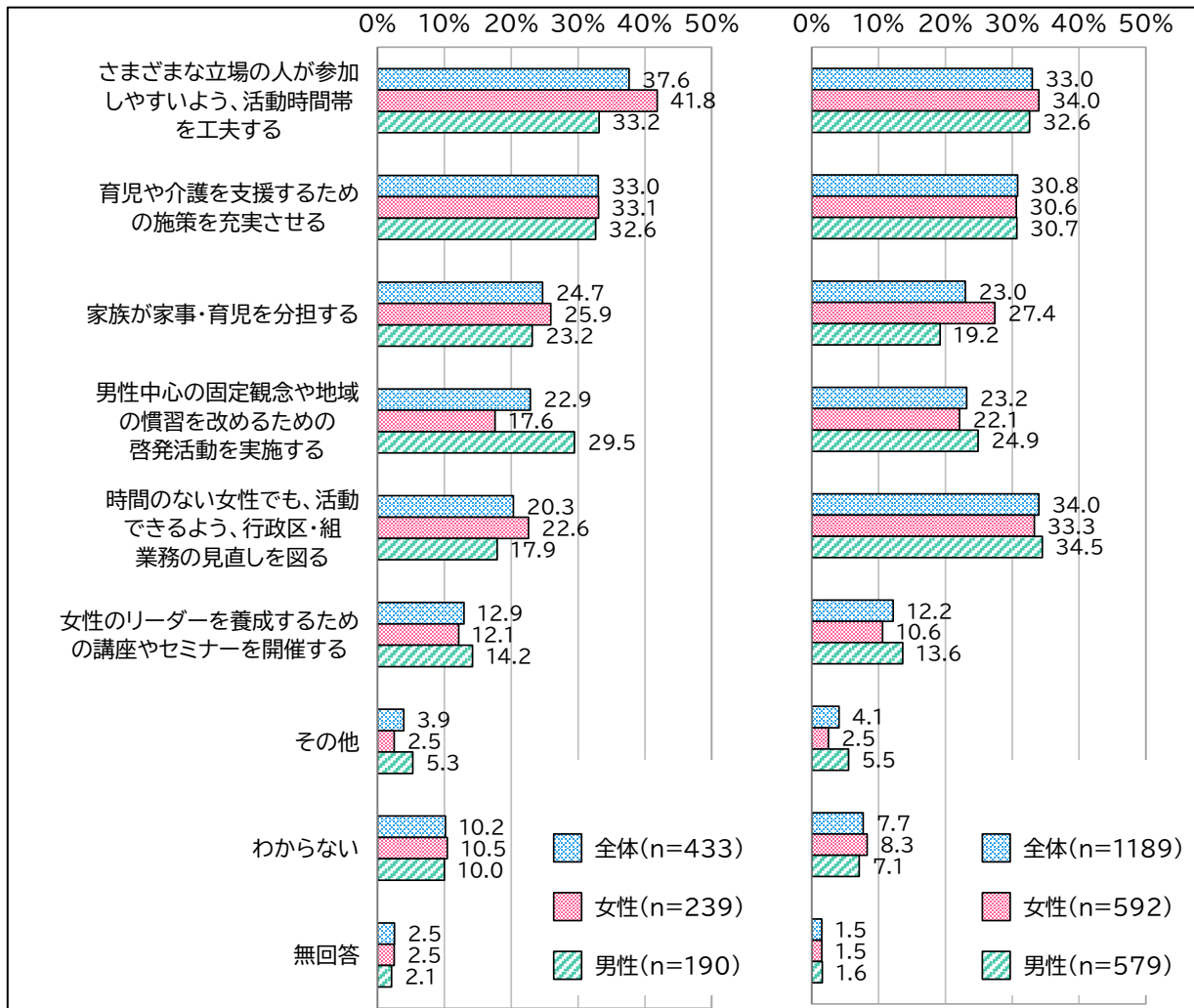
時間がない	体力的に自信がない
女性の区長が例にない気がするから	非協力的な人がいて面倒にかかわりたくない
健康的な問題	仕事が休めない
深く関わりがないから	年齢的に困難
負担が大きいから	人前に立つのが苦手。リーダーシップがない
仕事以外の時間は自分の時間に使いたい	役所に対するための時間を十分に取れない為
仕事があるので両立は厳しい	遠方にいる孫等の育児支援で忙しい
自分の能力では出来ないと思う	仕事・子供の習い事等で時間が無いため
プライベートの時間が減るから	人をまとめたりするのが苦手
時間を有効活用したいから	家事や仕事に支障があるから
仕事、家事だけでも時間や労力かをとらえるのに、ほぼボランティアのような報酬でしたくない。するのであれば仕事のようにきちんとした契約、無理なら外部委託希望	
責任があり大変そう。会議などで家あけることが多そう。上になって進める自信がない。協力はできる。	
以前、地域の縛りの強い地域に住んでいて役も引き受けて大変だったので懲りてしまった。	
めんどくさいから。消費した時間分賃金が出るなら検討する	
交代勤務しているので集会など毎回出席できない。	
責任を持って世話できそうにない。時間と労力がかかるから。	
パートナーが目立つのが少しはずかしいから	
シンプルにやりたくない。やりたい人がやればいい。	
独身でフルタイムで働いているので、時間がありません	
一度受けると「受けてくれる人」と認識されてしまうから。	
子どもが小さいうちは育児と仕事で手一杯になる為。	

### 問13 あなたは、地域活動における女性リーダーを増やすためには、どのようなことが必要だと思いますか。(複数回答)

- 地域活動における女性リーダーを増やすために必要なこととしては、「さまざまな立場の人が参加しやすいよう、活動時間帯を工夫する」が37.6%と最も高く、次いで「育児や介護を支援するための施策を充実させる」33.0%、「家族が家事・育児を分担する」24.7%となっている。
- 性別でみると、女性は男性より「男性中心の固定観念や地域の慣習を改めるための啓発活動を実施する」が11.9ポイント低くなっている。
- 福岡県調査と比較すると、全体および性別ともに「時間のない女性でも、活動できるよう、行政区・組業務の見直しを図る」が10ポイント以上低くなっている。
- 以上のことから、地域活動における女性リーダーを増やすためには、「活動時間帯の工夫」や「育児・介護支援の充実」など、参加しやすい環境づくりが重要である。また、「家族による家事・育児の分担」も一定の割合を占めており、家庭内での役割分担の見直しも必要と考えられる。さらに、福岡県調査と比較すると、本市では地域活動の運営方法の見直しに対する必要性の認識が、県全体と比べて低い傾向がみられることから、今後は女性が地域活動に参画しやすい環境づくりとあわせて、地域活動の運営方法の見直しの必要性について理解を深めるための取組も求められる。

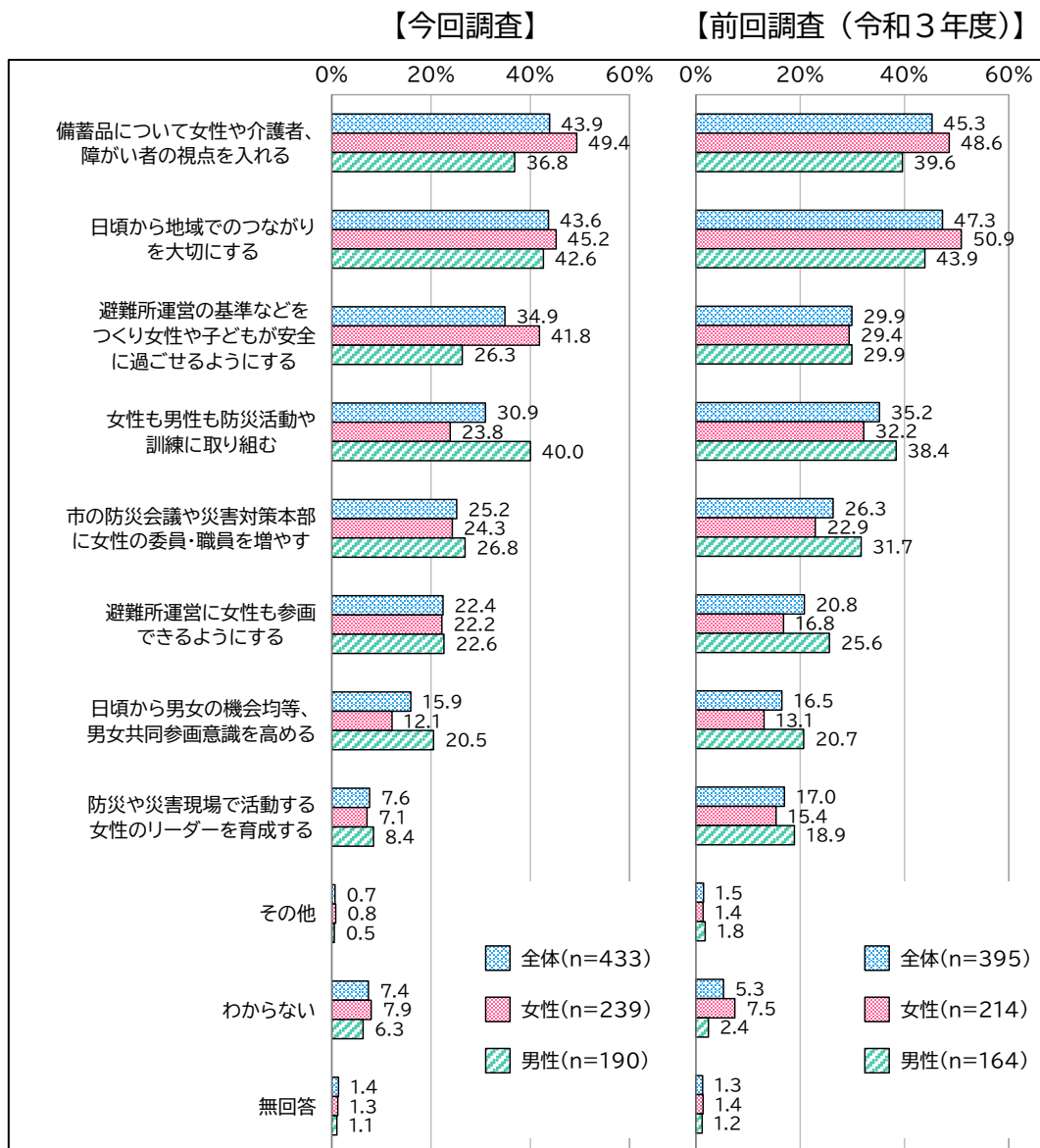
【今回調査】

【福岡県調査（令和6年度）】



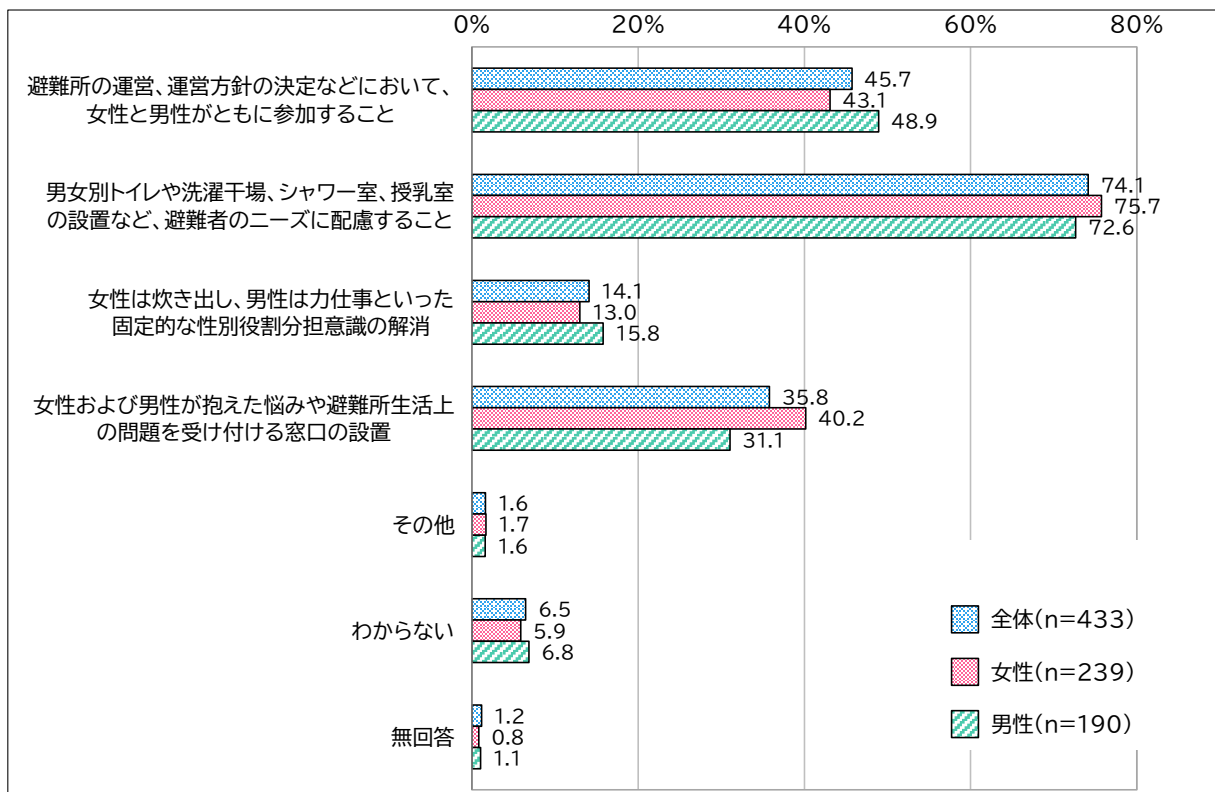
## 問14 日頃の防災や大規模災害対応に、男女共同参画の視点を生かすには、これからのようなことが必要だと思いますか。(複数回答)

- 日頃の防災や大規模災害対応に男女共同参画の視点を生かすために必要なこととしては、「備蓄品について女性や介護者、障がい者の視点を入れる」が43.9%と最も高く、次いで「日頃から地域でのつながりを大切にする」43.6%、「避難所運営の基準などをつくり女性や子どもが安全に過ごせるようにする」34.9%となっている。
- 性別でみると、女性は男性より「備蓄品について女性や介護者、障がい者の視点を入れる」「避難所運営の基準などをつくり女性や子どもが安全に過ごせるようにする」が高く、「女性も男性も防災活動や訓練に取り組む」が低くなっており、いずれも10ポイント以上差が生じている。
- 前回調査と比較すると、女性では「避難所運営の基準などをつくり女性や子どもが安全に過ごせるようにする」が高く、男性では「防災や災害現場で活動する女性のリーダーを育成する」が低くなっており、いずれも10ポイント以上差が生じている。
- 以上のことから、日頃の防災や大規模災害対応に男女共同参画の視点を生かすためには、「備蓄品への多様な視点の反映」や「地域でのつながりの強化」、「女性や子どもが安全に過ごせる避難所運営の基準づくり」など、誰もが安心して避難・活動できる環境整備が求められている。性別でみると、女性では備蓄品や避難所運営における配慮を重視する割合が高く、一方で男性は防災活動や訓練への参加を重視する傾向がみられ、災害対応におけるニーズの違いが一定程度存在していることがうかがえる。また、前回調査と比較すると、女性では避難所運営に関する配慮を求める回答が高く、男性では女性リーダー育成に関する回答が低くなっており、性別により防災における課題認識や重視する内容に変化がみられる。



問15 あなたは避難所における男女共同参画について、どのようなことが必要だと思いますか。(複数回答)

- 避難所における男女共同参画に関して必要なこととしては、「男女別トイレや洗濯干場、シャワー室、授乳室の設置など、避難者のニーズに配慮すること」が74.1%と最も高く、次いで「避難所の運営、運営方針の決定などにおいて、女性と男性がともに参加すること」45.7%、「女性および男性が抱えた悩みや避難所生活上の問題を受け付ける窓口の設置」35.8%となっている。
- 性別でみると、女性は男性より「女性および男性が抱えた悩みや避難所生活上の問題を受け付ける窓口の設置」が10ポイント程度高くなっている。
- 以上のことから、避難所における男女共同参画を進めるためには、「男女別トイレや授乳室などの設置」といった避難者のニーズに配慮した環境整備が特に重要と考えられている。また、「避難所運営への男女の参画」や「避難所生活上の悩みを受け付ける窓口の設置」など、避難所運営体制の充実も求められている。性別でみると、女性では避難所生活上の悩みや問題を相談できる窓口の設置を求める割合が男性より高く、女性は避難所生活における不安や困りごとに対応する支援体制の必要性をより強く認識している様子がうかがえる。

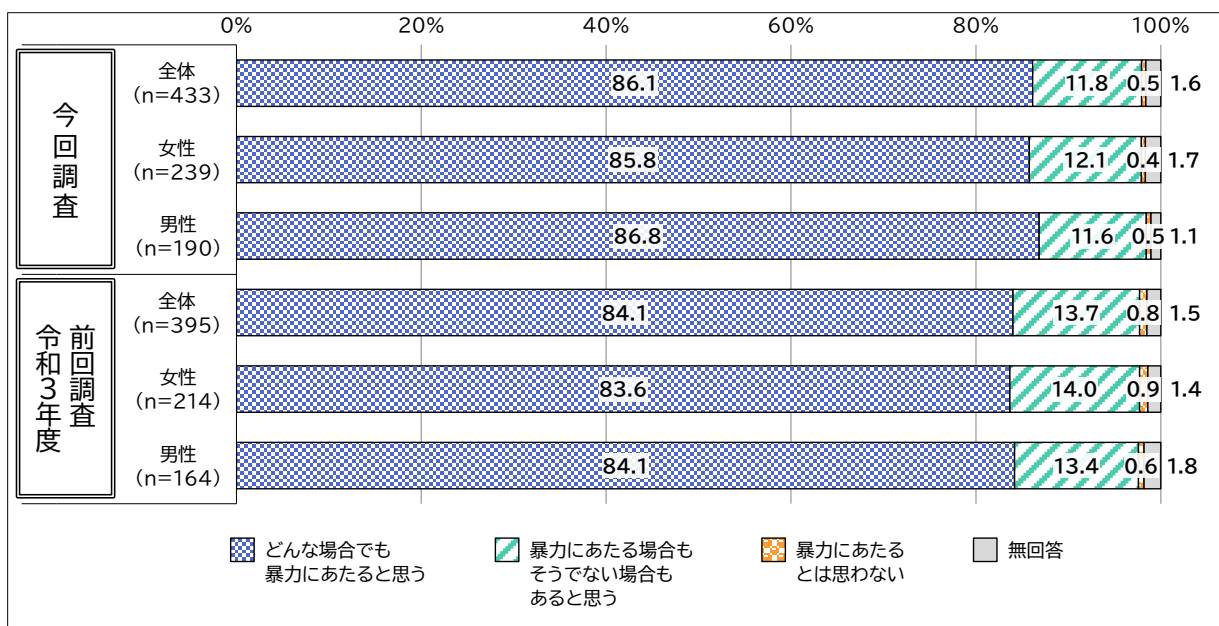


## 5. 暴力・ハラスメントについて

問16 あなたは、次のようなことが配偶者・パートナーや恋人間で行われた場合、それを暴力だと思えますか。(単数回答)

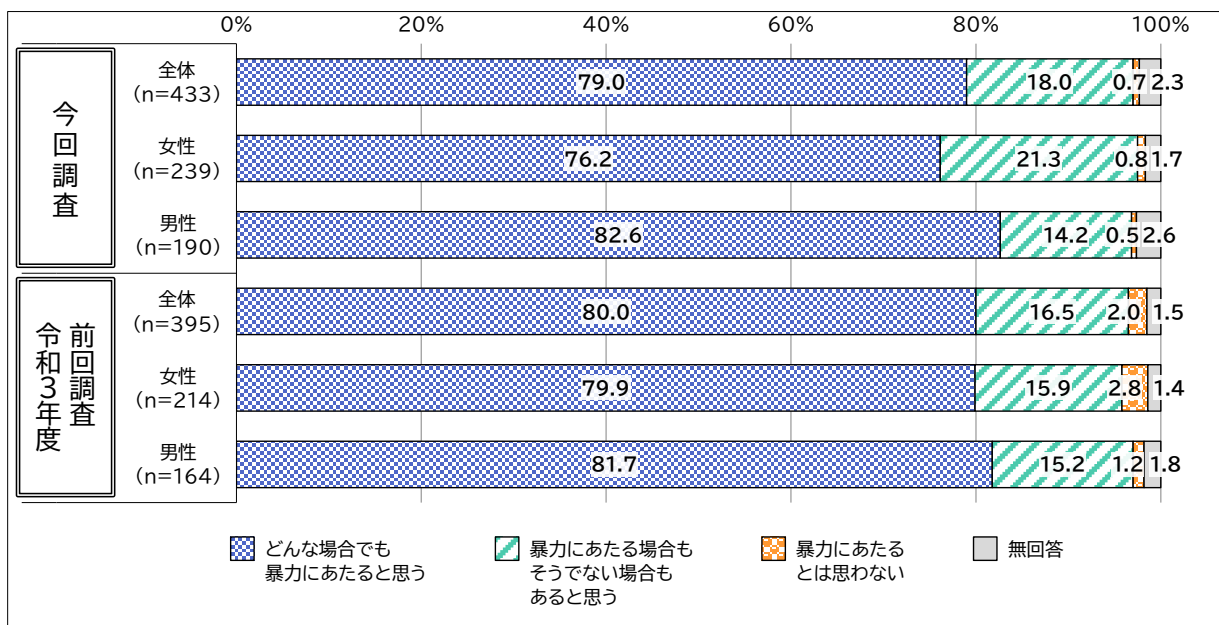
### (1) 骨折させる

- 「骨折させる」という行為が配偶者・パートナーや恋人間で行われた場合、それを暴力だと思うかどうかについては、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が86.1%と最も高く、次いで「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」11.8%、「暴力にあたるとは思わない」0.5%となっている。
- 性別で見ても、男女ともに「どんな場合でも暴力にあたると思う」が8割台、「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」が1割台となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較しても、全体および性別ともに大きな差はみられない。
- 以上のことから、「骨折させる」という行為については、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が全体で8割台と大半を占めており、配偶者・パートナーや恋人間においても暴力にあたる行為であるとの認識が広く共有されていることがうかがえる。また、性別による大きな差や前回調査との大きな違いはみられないことから、こうした行為を暴力と認識する意識は広く定着している状況がうかがえる。



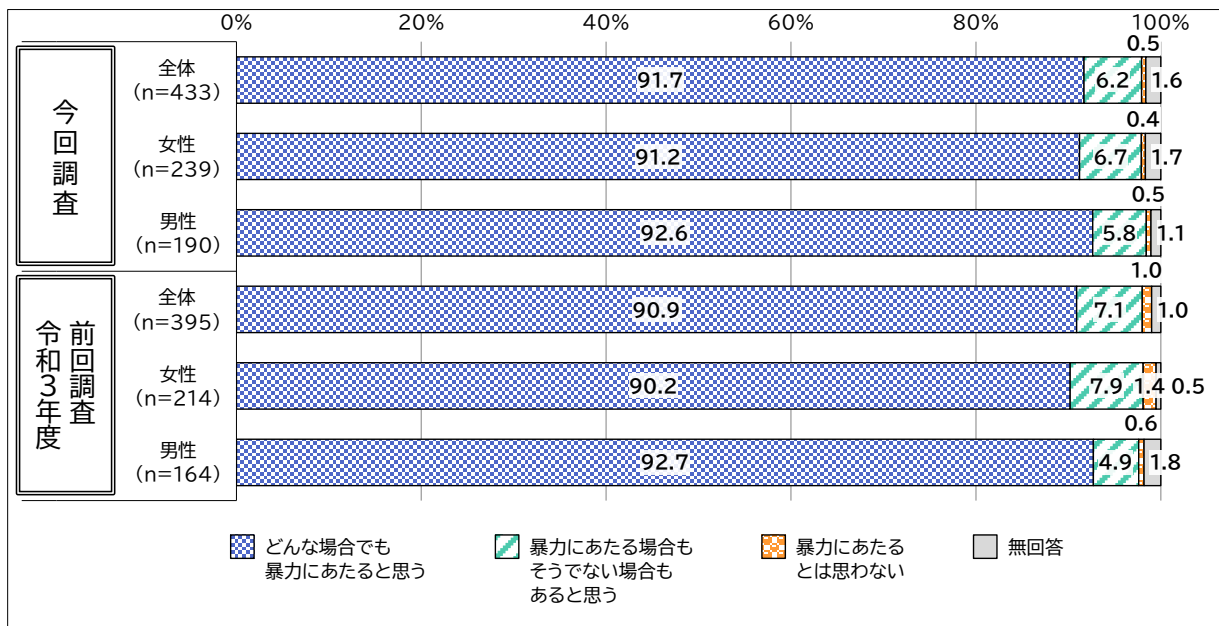
## (2) 打ち身や切り傷などのけがをさせる

- 「打ち身や切り傷などのけがをさせる」という行為が配偶者・パートナーや恋人間で行われた場合、それを暴力だと思うかどうかについては、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が79.0%と最も高く、次いで「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」18.0%、「暴力にあたるとは思わない」0.7%となっている。
- 性別でも、男女ともに「どんな場合でも暴力にあたると思う」が8割前後、「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」が1～2割台となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較しても、全体および性別ともに大きな差はみられない。
- 以上のことから、「打ち身や切り傷などのけがをさせる」という行為については、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が全体で約8割と大半を占めており、配偶者・パートナーや恋人間においても暴力にあたる行為であるとの認識が広く共有されていることがうかがえる。また、性別による大きな差や前回調査との大きな違いはみられず、こうした行為を暴力と認識する意識は引き続き高い状況にあると考えられる。



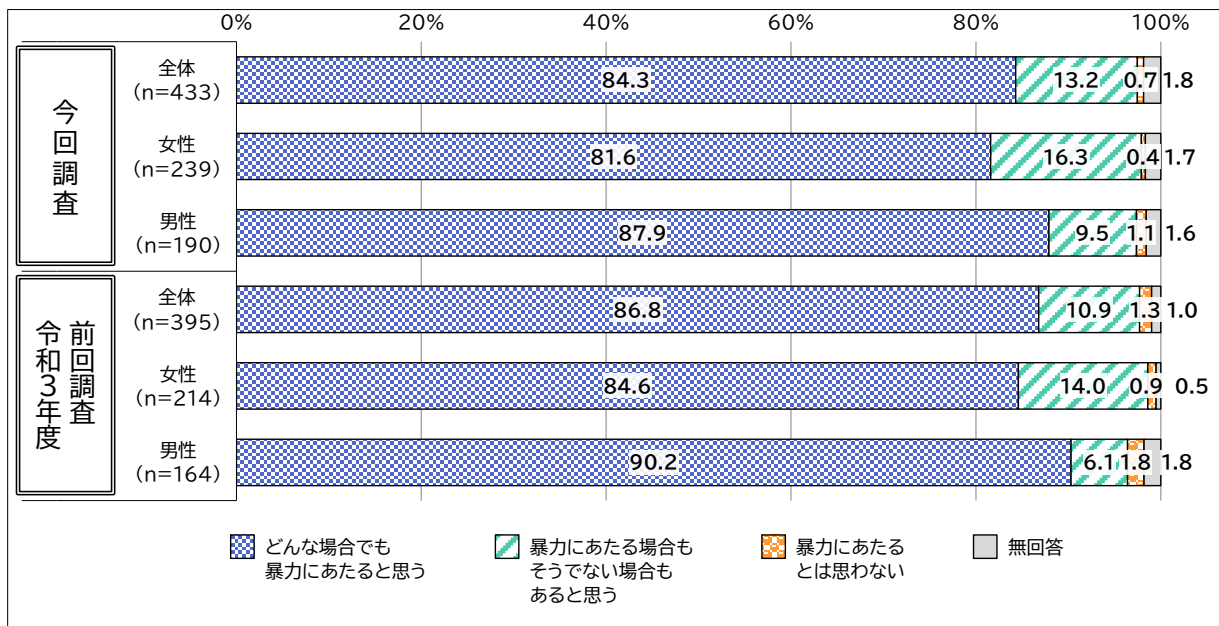
### (3) 足でけったり、平手で打ったりする

- 「足でけったり、平手で打ったりする」という行為が配偶者・パートナーや恋人間で行われた場合、それを暴力だと思うかどうかについては、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が91.7%と最も高く、次いで「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」6.2%、「暴力にあたるとは思わない」0.5%となっている。
- 性別で見ても、男女ともに「どんな場合でも暴力にあたると思う」が9割台となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較しても、全体および性別ともに大きな差はみられない。
- 以上のことから、「足でけったり、平手で打ったりする」という行為については、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が全体で9割台と非常に高く、配偶者・パートナーや恋人間においても暴力にあたる行為であるとの認識が広く浸透していることがうかがえる。また、性別による大きな差や前回調査との大きな違いはみられないことから、こうした行為を暴力と認識する意識は広く定着しているものと考えられる。



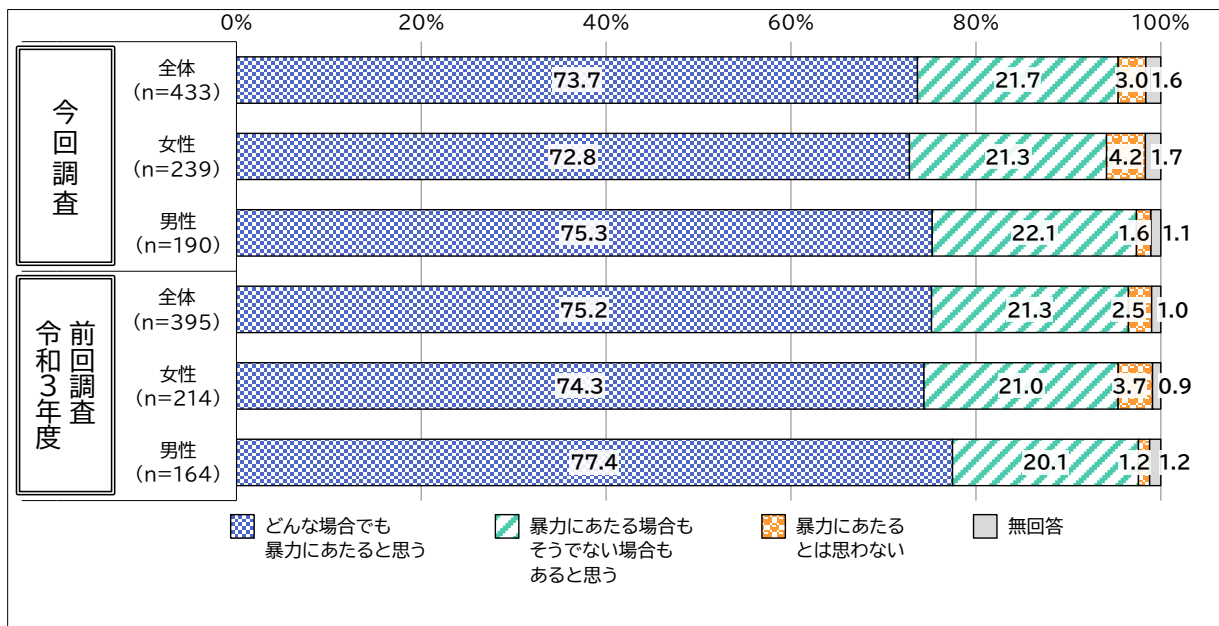
#### (4) 物を投げつける

- 「物を投げつける」という行為が配偶者・パートナーや恋人間で行われた場合、それを暴力だと思いかどうかについては、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が84.3%と最も高く、次いで「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」13.2%、「暴力にあたるとは思わない」0.7%となっている。
- 性別でみても、男女ともに「どんな場合でも暴力にあたると思う」が8割台、「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」が1～2割程度となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較しても、全体および性別ともに大きな差はみられない。
- 以上のことから、「物を投げつける」という行為については、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が全体で8割台と大半を占めており、配偶者・パートナーや恋人間においても暴力にあたる行為であるとの認識が広く共有されていることがうかがえる。また、性別による大きな差や前回調査との大きな違いはみられないことから、こうした行為を暴力と認識する意識は広く共有されているものと考えられる。



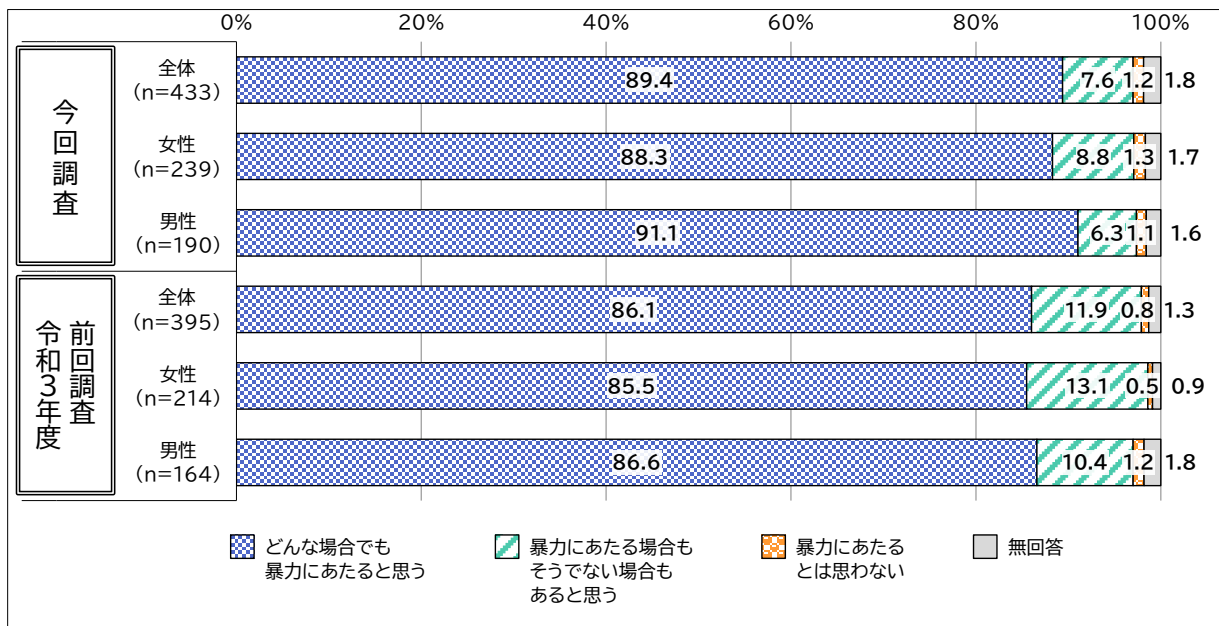
## (5) 殴るふりをしておどす

- 「殴るふりをしておどす」という行為が配偶者・パートナーや恋人間で行われた場合、それを暴力だと思うかどうかについては、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が73.7%と最も高く、次いで「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」21.7%、「暴力にあたるとは思わない」3.0%となっている。
- 性別でも、男女ともに「どんな場合でも暴力にあたると思う」が7割台、「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」が2割台となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較しても、全体および性別ともに大きな差はみられない。
- 以上のことから、「殴るふりをしておどす」という行為については、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が全体で7割台と多数を占めており、配偶者・パートナーや恋人間においても暴力にあたる行為であるとの認識が広くみられる。一方で、「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」とする回答も2割程度みられることから、身体的な暴力と比べると暴力としての認識にはやや幅があることがうかがえる。



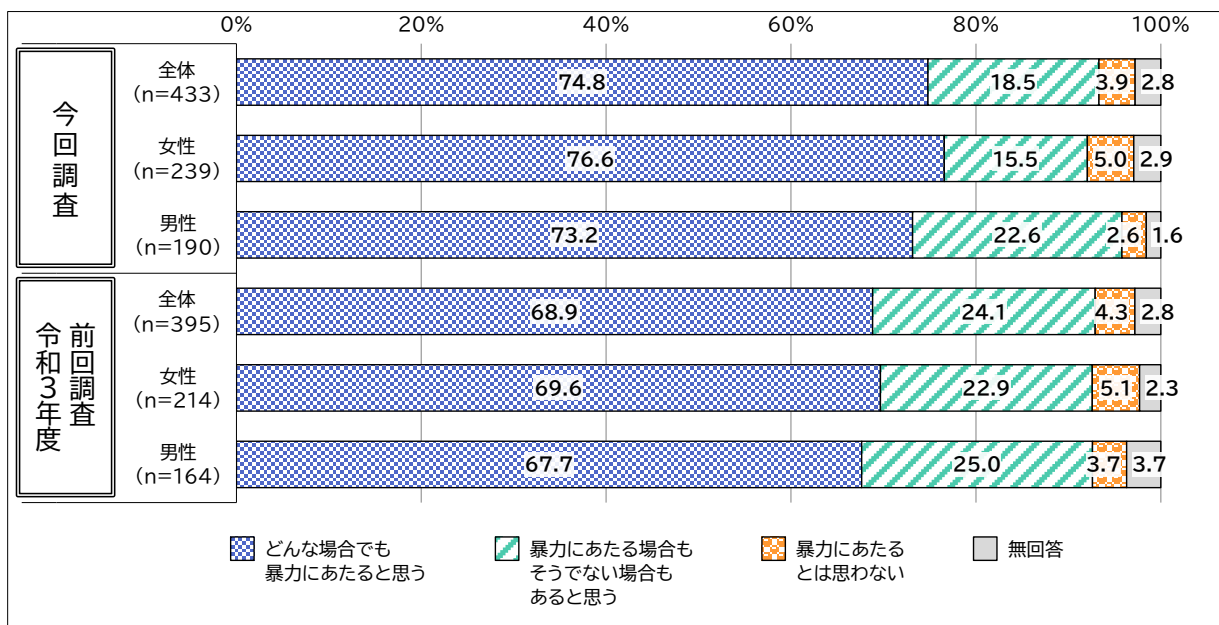
## (6) 嫌がっているのに性的な行為を強要する

- 「嫌がっているのに性的な行為を強要する」という行為が配偶者・パートナーや恋人間で行われた場合、それを暴力だと思うかどうかについては、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が89.4%と最も高く、次いで「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」7.6%、「暴力にあたるとは思わない」1.2%となっている。
- 性別でも、男女ともに「どんな場合でも暴力にあたると思う」が9割前後となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較しても、全体および性別ともに大きな差はみられない。
- 以上のことから、「嫌がっているのに性的な行為を強要する」という行為については、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が全体で約9割と非常に高く、配偶者・パートナーや恋人間においても暴力にあたる行為であるとの認識が広く浸透していることがうかがえる。また、性別による大きな差や前回調査との大きな違いはみられないことから、こうした行為を暴力と認識する意識は広く定着しているものと考えられる。



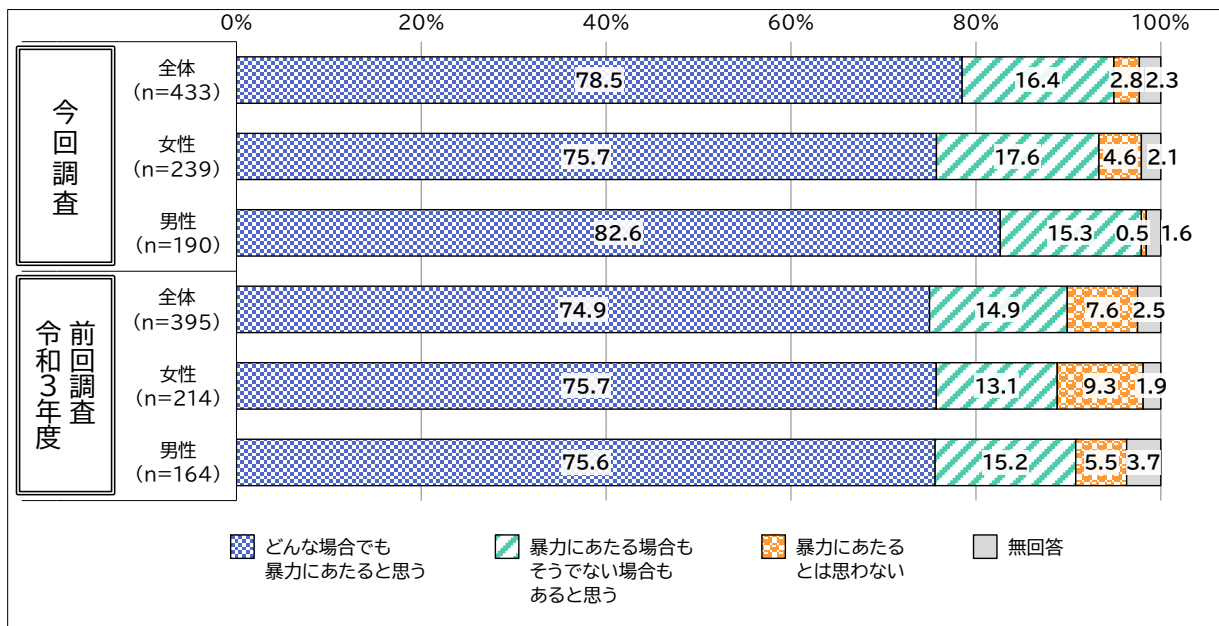
## (7) 避妊に協力しない

- 「避妊に協力しない」という行為が配偶者・パートナーや恋人間で行われた場合、それを暴力だと思うかどうかについては、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が74.8%と最も高く、次いで「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」18.5%、「暴力にあたるとは思わない」3.9%となっている。
- 性別でも、男女ともに「どんな場合でも暴力にあたると思う」が7割台、「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」が1～2割台となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較しても、全体および性別ともに大きな差はみられない。
- 以上のことから、「避妊に協力しない」という行為については、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が全体で7割台となっており、配偶者・パートナーや恋人間においても暴力にあたる行為と認識する人が多いことがうかがえる。また、性別による大きな差や前回調査との大きな違いはみられないことから、こうした行為を暴力と認識する意識は比較的広く定着していると考えられる。



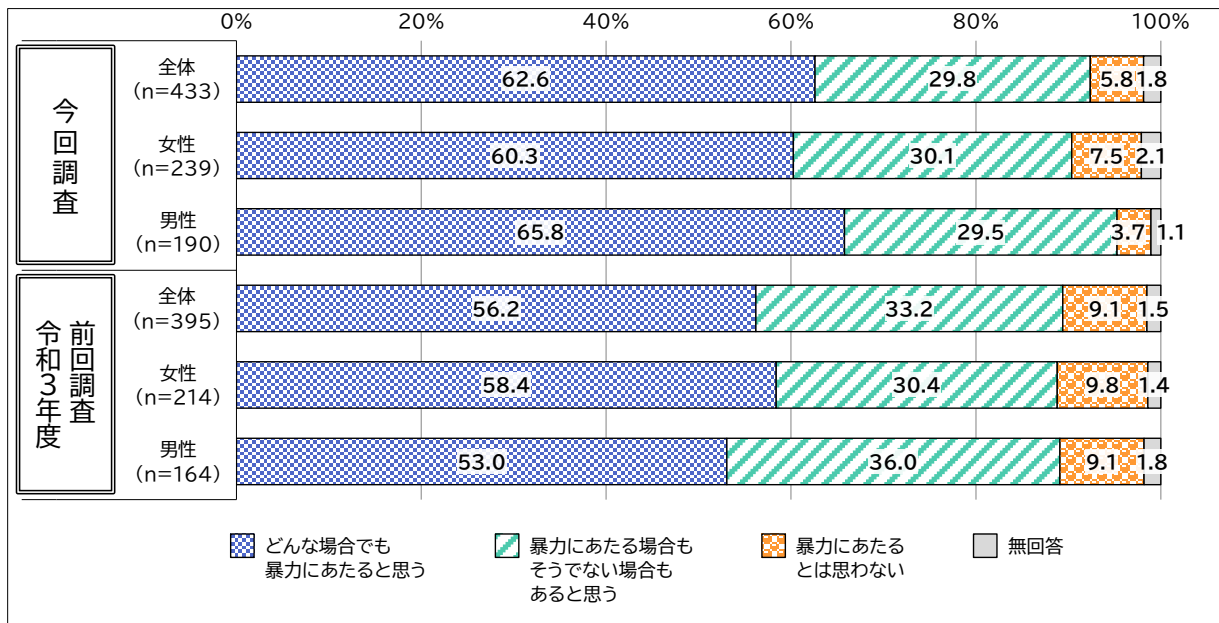
## (8) 見たくないのに、ポルノビデオやポルノ雑誌を見せる

- 「見たくないのに、ポルノビデオやポルノ雑誌を見せる」という行為が配偶者・パートナーや恋人間で行われた場合、それを暴力だと思うかどうかについては、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が78.5%と最も高く、次いで「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」16.4%、「暴力にあたるとは思わない」2.8%となっている。
- 性別でみても、男女ともに「どんな場合でも暴力にあたると思う」が7～8割台、「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」が1割台となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較しても、全体および性別ともに大きな差はみられない。
- 以上のことから、「見たくないのに、ポルノビデオやポルノ雑誌を見せる」という行為については、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が全体で約8割を占めており、配偶者・パートナーや恋人間においても暴力にあたる行為であるとの認識が広くみられる。また、性別による大きな差や前回調査との大きな違いはみられないことから、こうした行為を暴力と認識する意識は広く定着している状況がうかがえる。



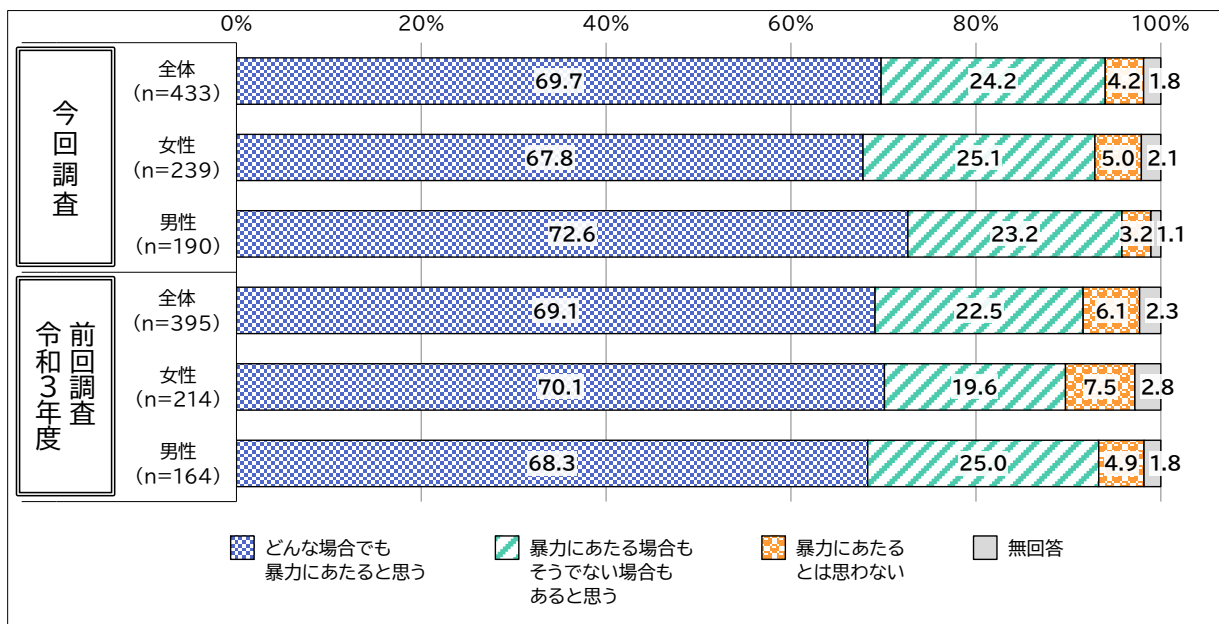
## (9) 何を言っても無視し続ける

- 「何を言っても無視し続ける」という行為が配偶者・パートナーや恋人間で行われた場合、それを暴力だと思うかどうかについては、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が62.6%と最も高く、次いで「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」29.8%、「暴力にあたるとは思わない」5.8%となっている。
- 性別でも、男女ともに「どんな場合でも暴力にあたると思う」が6割台、「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」が3割前後となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較すると、男性では「どんな場合でも暴力にあたると思う」が12.8ポイント高くなっている。
- 以上のことから、「何を言っても無視し続ける」という行為については、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が全体で6割台となっており、配偶者・パートナーや恋人間において精神的な暴力と認識する人が一定程度みられる。一方で、「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」とする回答も3割程度みられることから、身体的暴力と比べると暴力としての認識にはやや幅があることが読み取れる。また、前回調査と比較すると、特に男性において暴力と認識する割合が高くなっており、精神的な行為についても暴力として捉える意識が高まりつつあることがうかがえる。



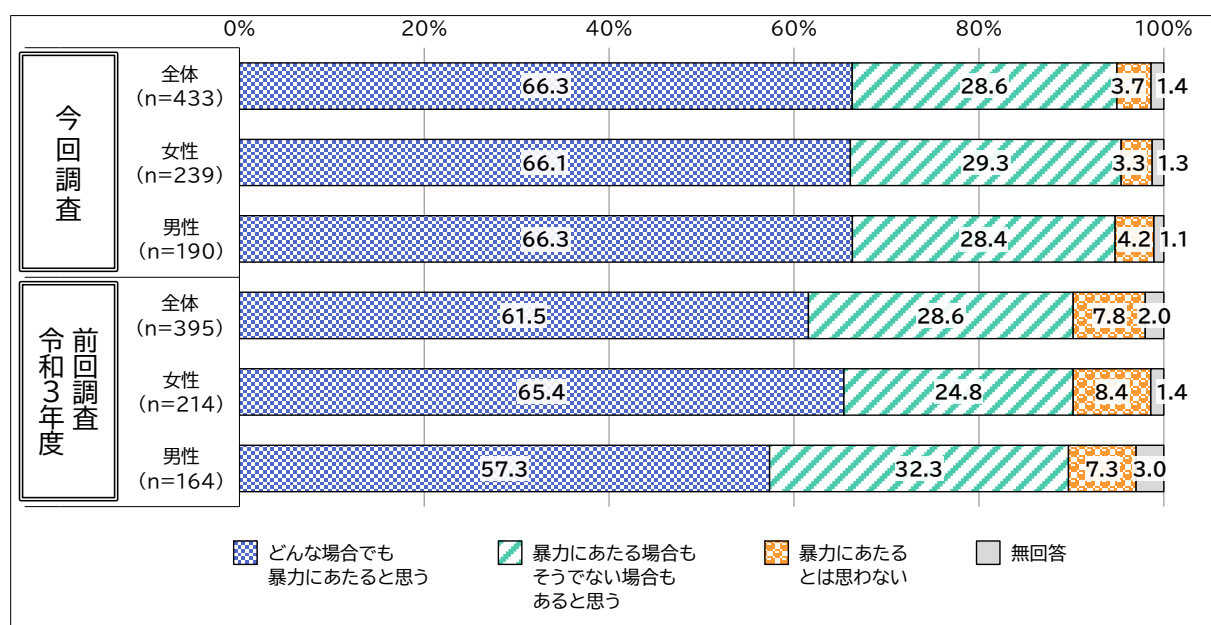
## (10) 必要な生活費を渡さない

- 「必要な生活費を渡さない」という行為が配偶者・パートナーや恋人間で行われた場合、それを暴力だと思うかどうかについては、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が69.7%と最も高く、次いで「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」24.2%、「暴力にあたるとは思わない」4.2%となっている。
- 性別でも、男女ともに「どんな場合でも暴力にあたると思う」が7割前後、「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」が2割台となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較しても、全体および性別ともに大きな差はみられない。
- 以上のことから、「必要な生活費を渡さない」という行為については、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が全体で約7割を占めており、配偶者・パートナーや恋人間における経済的な圧力についても暴力にあたる行為であると認識する人が多いことが読み取れる。一方で、「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」とする回答も2割台となっていることから、身体的暴力などと比べると、経済的な圧力行為を暴力として捉える認識には一定の幅があることがうかがえる。



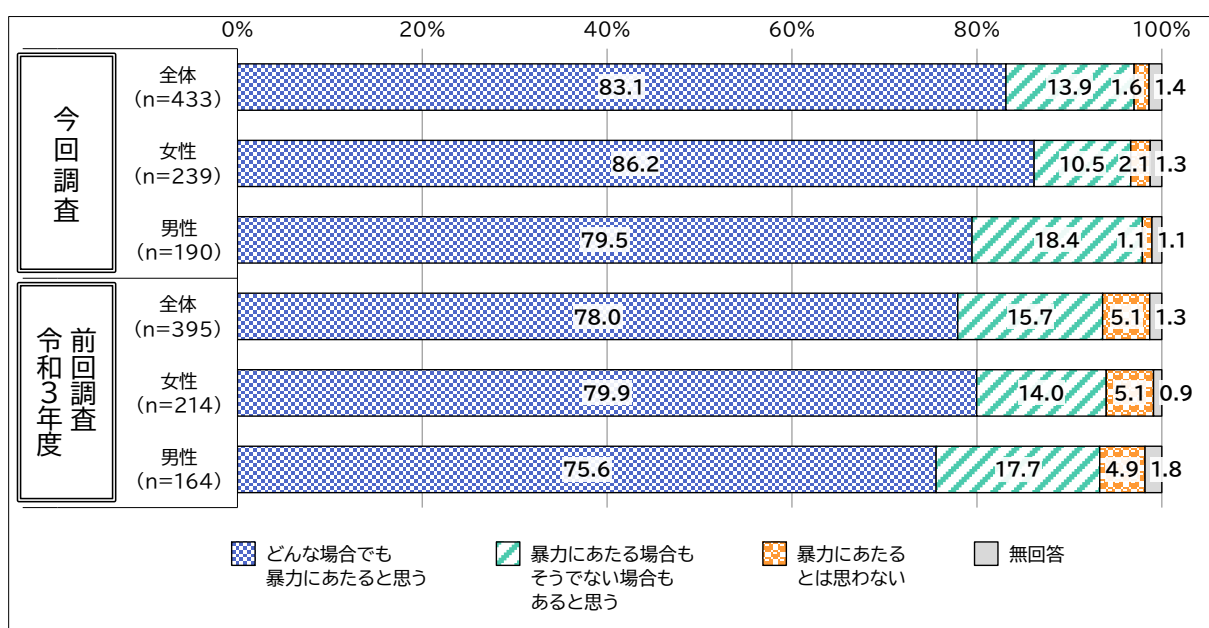
## (11) 交友関係や電話・メール等を細かく監視する

- 「交友関係や電話・メール等を細かく監視する」という行為が配偶者・パートナーや恋人間で行われた場合、それを暴力だと思うかどうかについては、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が66.3%と最も高く、次いで「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」28.6%、「暴力にあたるとは思わない」3.7%となっている。
- 性別で見ても、男女ともに「どんな場合でも暴力にあたると思う」が6割台、「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」が約3割となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較すると、男性では「どんな場合でも暴力にあたると思う」が10ポイント程度高くなっている。
- 以上のことから、「交友関係や電話・メール等を細かく監視する」という行為については、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が全体で6割台となっており、配偶者・パートナーや恋人間において精神的な暴力と認識する人が一定程度みられる。一方で、「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」とする回答も約3割みられることから、身体的暴力と比べると暴力としての認識には一定の幅があることが読み取れる。また、前回調査と比較すると、特に男性において暴力と認識する割合が高くなっており、こうした行為を精神的な暴力として捉える意識が高まりつつあることがうかがえる。



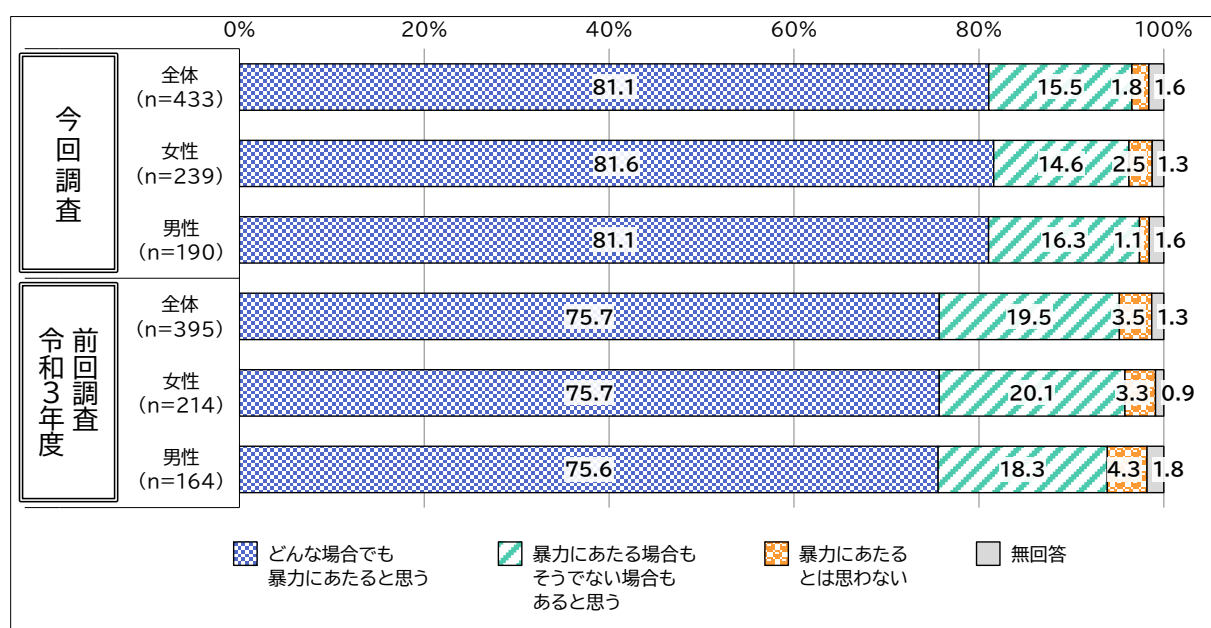
## (12)「だれのおかげで、生活できるんだ」とか「かいしょうなし」という

- 「だれのおかげで、生活できるんだ」とか「かいしょうなし」という行為が配偶者・パートナーや恋人間で行われた場合、それを暴力だと思うかどうかについては、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が83.1%と最も高く、次いで「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」13.9%、「暴力にあたるとは思わない」1.6%となっている。
- 性別でも、男女ともに「どんな場合でも暴力にあたると思う」が8割前後、「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」が1割台となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較しても、全体および性別ともに大きな差はみられない。
- 以上のことから、「だれのおかげで生活できるんだ」や「かいしょうなし」といった人格を否定するような発言を行う行為については、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が全体で8割を超えており、配偶者・パートナーや恋人間における精神的な暴力として認識する人が多いことがうかがえる。また、性別による大きな差や前回調査との大きな違いはみられないことから、こうした行為を暴力と認識する意識は広く定着している状況がうかがえる。



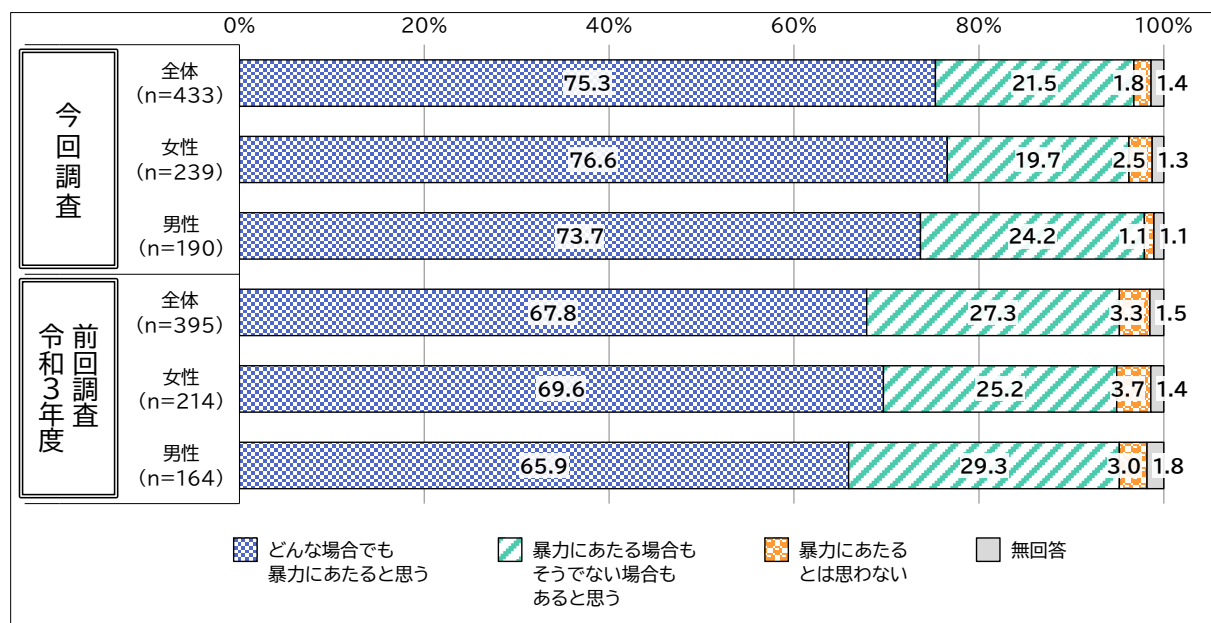
### (13) 子どもや他人の前で侮辱したり、馬鹿にしたりする

- 「子どもや他人の前で侮辱したり、馬鹿にしたりする」という行為が配偶者・パートナーや恋人間で行われた場合、それを暴力だと思うかどうかについては、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が81.1%と最も高く、次いで「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」15.5%、「暴力にあたるとは思わない」1.8%となっている。
- 性別で見ても、男女ともに「どんな場合でも暴力にあたると思う」が8割台、「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」が1割台となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較しても、全体および性別ともに大きな差はみられない。
- 以上のことから、「子どもや他人の前で侮辱したり、馬鹿にしたりする」といった行為については、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が全体で8割を超えており、配偶者・パートナーや恋人間における精神的な暴力として認識する人が多いことがうかがえる。また、性別による大きな差や前回調査との大きな違いはみられないことから、こうした行為を暴力と認識する意識は広く定着しているものと考えられる。



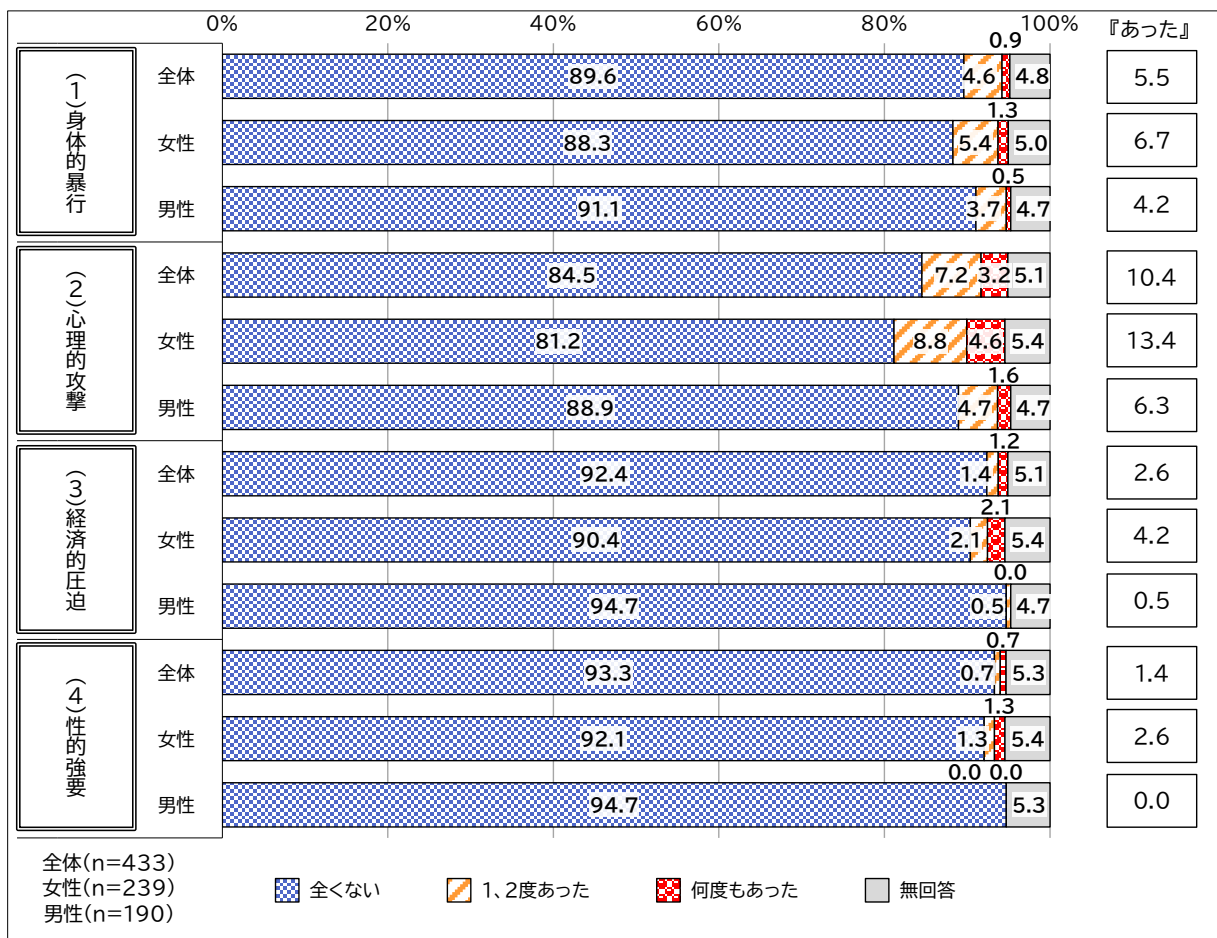
## (14) 大声でどなる

- 「大声でどなる」という行為が配偶者・パートナーや恋人間で行われた場合、それを暴力だと思いかどうかについては、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が75.3%と最も高く、次いで「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」21.5%、「暴力にあたるとは思わない」1.8%となっている。
- 性別で見ても、男女ともに「どんな場合でも暴力にあたると思う」が7割台、「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」が1～2割台となっており、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較しても、全体および性別ともに大きな差はみられない。
- 以上のことから、「大声でどなる」という行為については、「どんな場合でも暴力にあたると思う」が全体で7割台となっており、配偶者・パートナーや恋人間においても暴力にあたる行為と認識する人が多いことが読み取れる。一方で、「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」とする回答も2割程度みられることから、こうした威圧的な言動については、暴力としての認識に一定の幅があることがうかがえる。また、性別による大きな差や前回調査との大きな違いはみられないことから、こうした行為を暴力と認識する意識は比較的広く共有されていると考えられる。



問17 あなたはここ3年ぐらいの間にあなたの配偶者・パートナーや恋人関係にある（あった）人から次のようなことをされたことがありますか。（単数回答）

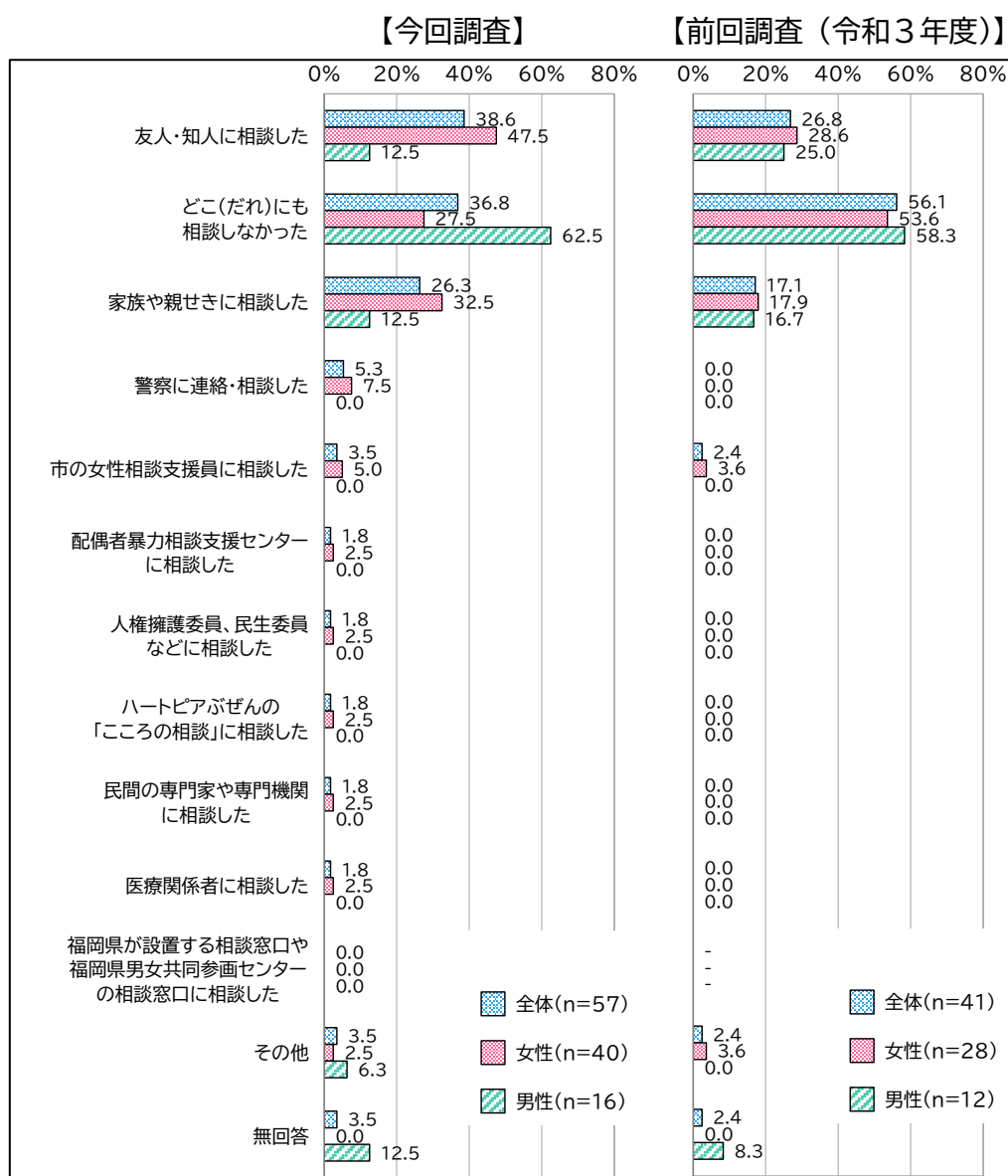
- 過去3年の間に配偶者・パートナーや恋人関係にある（あった）人から受けた行為については、いずれの行為においても「全くない」が8～9割台と最も高くなっている。一方、「心理的攻撃」については『あった：1、2度あった+何度もあった』が1割を超えている。
- 性別でみると、いずれの行為についても女性は男性より『あった』が高く、「心理的攻撃」については1割を超えている。
- 以上のことから、過去3年の間に配偶者・パートナーや恋人関係にある（あった）人から受けた行為については、いずれの行為においても「全くない」とする回答が大半を占めており、多くの方がこうした行為を経験していないことが読み取れる。一方で、「心理的攻撃」については他の項目に比べて経験があるとする割合がやや高く、特に女性でその傾向がみられることから、言葉や態度による精神的な影響を受けている人が一定程度いることがうかがえる。



【問17で1つでも「1、2度あった」又は、「何度もあった」と答えた方のみ】

問17-1 あなたは、あなたの配偶者・パートナーや恋人関係にある（あった）人から受けたそのような行為について、誰かに打ち明けたり、相談したりしましたか。（複数回答）

- 配偶者・パートナーや恋人関係にある（あった）人から受けた行為の相談状況については、「友人・知人に相談した」が38.6%と最も高く、次いで「どこ（だれ）にも相談しなかった」36.8%、「家族や親せきに相談した」26.3%となっている。
- 性別でみると、女性は男性より「友人・知人に相談した」「家族や親せきに相談した」が高く、「どこ（だれ）にも相談しなかった」が低くなっており、20ポイント以上差が生じている。
- 前回調査と比較すると、全体では「友人・知人に相談した」が高くなっている。性別でみると、女性では「友人・知人に相談した」「家族や親せきに相談した」が高く、「どこ（だれ）にも相談しなかった」が低くなっている。一方、男性では「友人・知人に相談した」が低くなっており、いずれも10ポイント以上の差が生じている。
- 以上のことから、配偶者・パートナーや恋人関係にある（あった）人から受けた行為の相談状況については、友人・知人や家族・親せきなど身近な人に相談する人が比較的多い一方で、誰にも相談していない人も一定程度みられる。性別でみると、女性は男性より身近な人に相談する割合が高く、男性は女性より相談しない割合が高くなっており、相談行動に男女差がみられる。また、前回調査と比較すると、女性では身近な人に相談する割合が高くなっている一方、男性では低くなるなど、相談状況の変化もうかがえる。

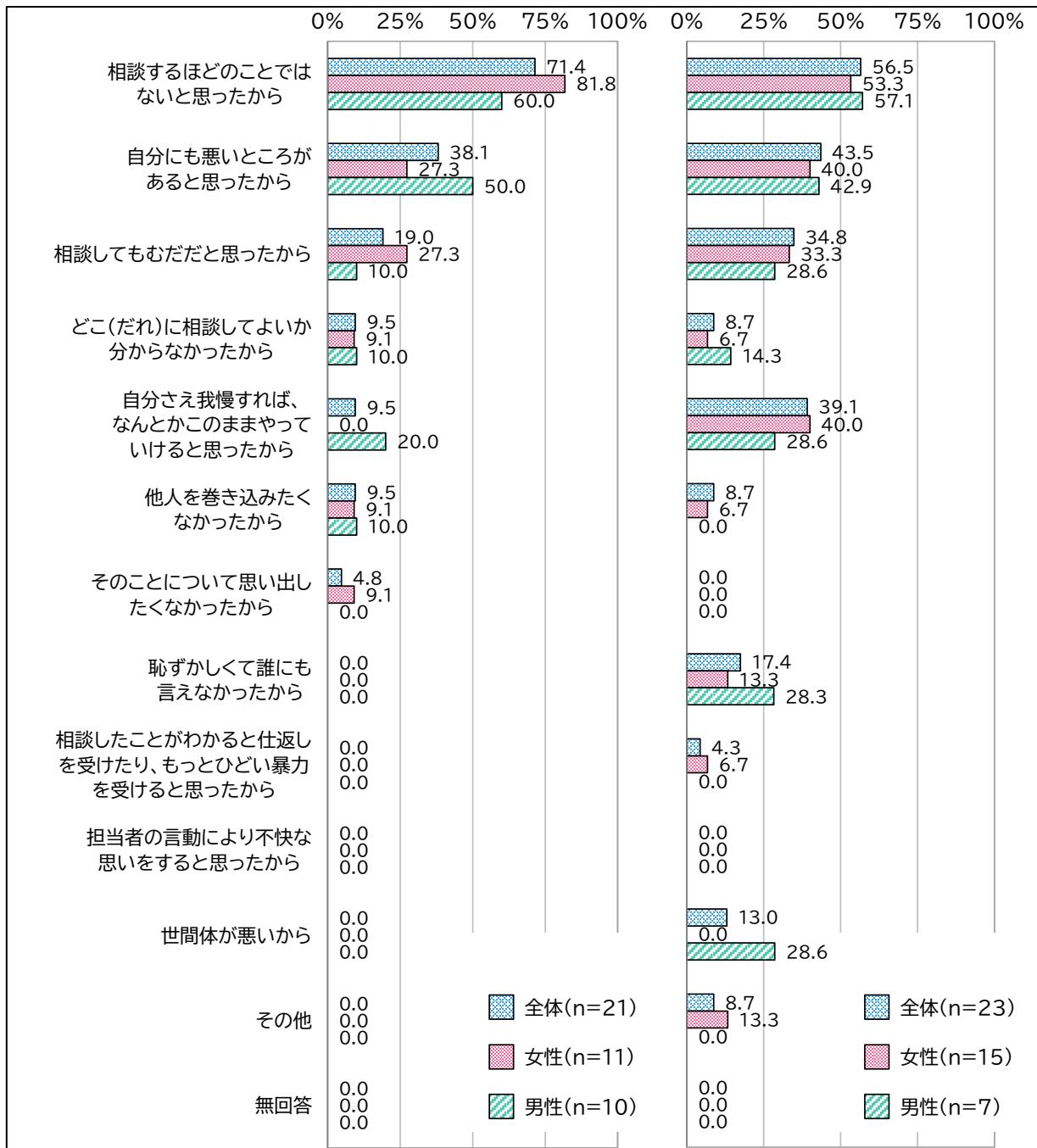


問 17—2 相談しなかったのはなぜですか。（複数回答）

- 配偶者・パートナーや恋人関係にある（あった）人から受けた行為を相談しなかった理由については、「相談するほどのことではないと思ったから」が 71.4%と最も高く、次いで「自分にも悪いところがあると思ったから」38.1%、「相談してもむだだと思ったから」19.0%となっている。
- 性別でみると、女性は男性より「相談するほどのことではないと思ったから」「相談してもむだだと思ったから」が高く、「自分にも悪いところがあると思ったから」「自分さえ我慢すればなんとかこのままやっていけると思ったから」が低くなっており、10 ポイント以上差が生じている。
- 前回調査と比較すると、全体では「相談するほどのことではないと思ったから」が高く、「相談してもむだだと思ったから」「自分さえ我慢すればなんとかこのままやっていけると思ったから」が低くなっており、10 ポイント以上差が生じている。性別でみると、女性では「相談するほどのことではないと思ったから」が高く、「自分にも悪いところがあると思ったから」「自分さえ我慢すればなんとかこのままやっていけると思ったから」が低く、男性では「相談してもむだだと思ったから」が低く、「他人を巻き込みたくなかったから」が高くなっており、10 ポイント以上差が生じている。また、今回調査では「恥ずかしくて誰にも言えなかったから」「相談したことがわかると仕返しを受けたり、もっとひどい暴力を受けると思ったから」「世間体が悪いから」「その他」については、いずれも回答がみられなかった。
- 以上のことから、相談しなかった理由としては、「相談するほどのことではないと思ったから」を挙げる割合が最も高く、被害を相談する必要がないと受け止めている人が多いことがうかがえる。また、「自分にも悪いところがあると思った」や「相談してもむだだと思った」などの理由も挙げられており、相談をためらう心理がみられる。性別でみると、女性は相談する必要性を感じなかったり相談しても解決しないと考える割合が高く、男性は自分にも責任があると捉える割合が比較的高く、自身の負担を抱え込むなど、相談を控える理由に違いがみられる。さらに、前回調査と比較すると、女性では相談するほどのことではないとする割合が高くなり、男性では他人を巻き込みたくないとする割合が高くなるなど、相談を控える理由の一部に変化がみられる。

【今回調査】

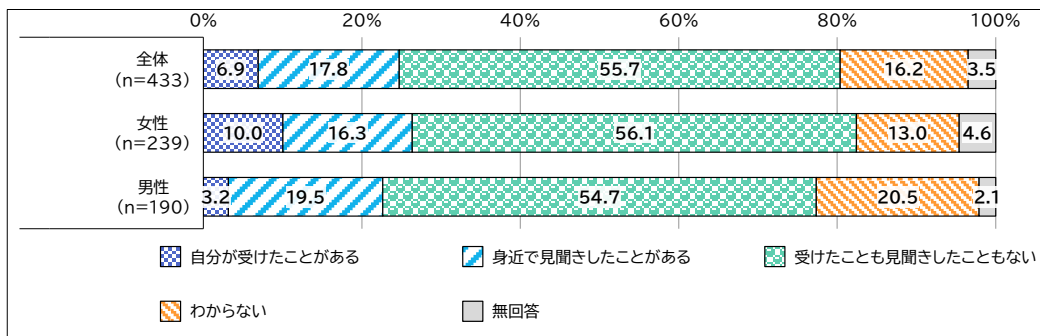
【前回調査（令和3年度）】



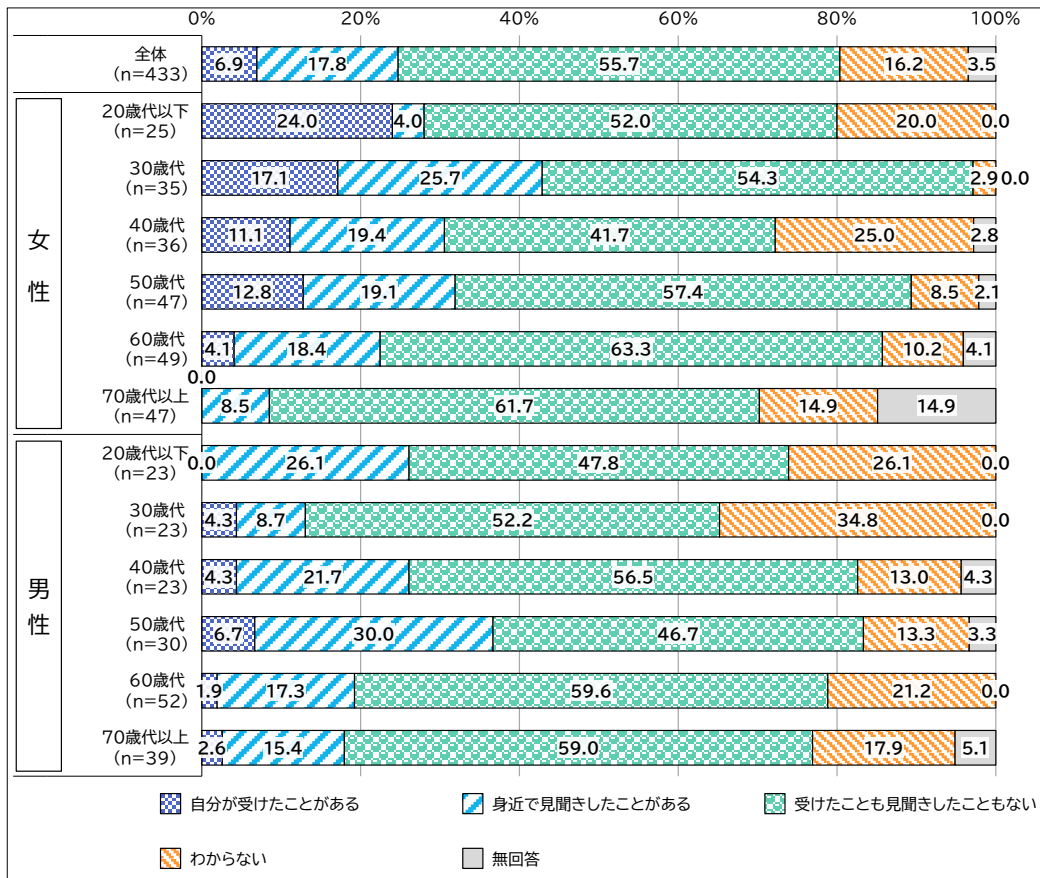
**問18 あなたは、ここ3年ぐらいの間に次のようなハラスメント（意識的・無意識的に関わらず、他の者を不快にする言動等）を受けたことがありますか、または身近で見聞きしたことがありますか。（単数回答）**

**(1) セクシュアルハラスメント（セクハラ）**

- 過去3年の間における「セクシュアルハラスメント（セクハラ）」の経験については、「受けたことも見聞きしたこともない」が55.7%と最も高く、次いで「身近で見聞きしたことがある」17.8%、「わからない」16.2%となっている。
- 性別でみると、男女ともに「受けたことも見聞きしたこともない」が5割台となっている。
- 性・年代別でみると、男女すべての年代で「受けたことも見聞きしたこともない」が4～6割台と最も高くなっている。一方、「自分が受けたことがある」は女性の20歳代以下が24.0%と最も高く、女性の30歳代から50歳代でも1割を超えている。
- 以上のことから、「セクシュアルハラスメント（セクハラ）」の経験については、「受けたことも見聞きしたこともない」が最も高く5割を超えているものの、「身近で見聞きしたことがある」「自分が受けたことがある」とする人も一定程度みられる。特に女性では男性より「自分が受けたことがある」が高く、若年層、なかでも20歳代以下で比較的高い傾向がみられる。

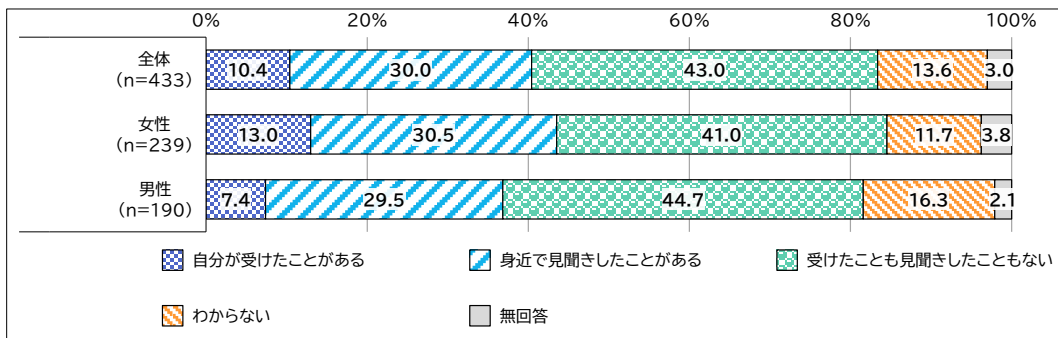


**【性・年代別】**

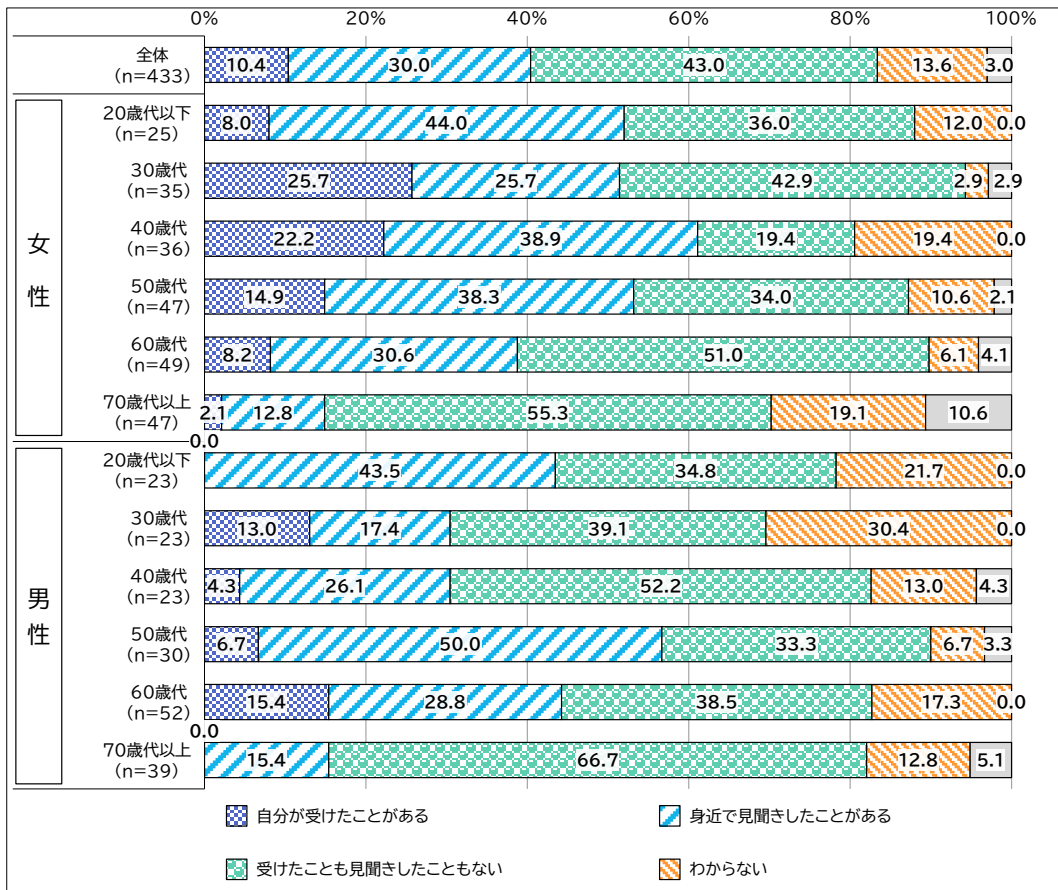


## (2) パワーハラスメント (パワハラ)

- 「パワーハラスメント (パワハラ)」の経験については、「受けたことも見聞きしたこともない」が 43.0%と最も高く、次いで「身近で見聞きしたことがある」30.0%、「わからない」13.6%となっている。
- 性別でみると、男女ともに「受けたことも見聞きしたこともない」が4割台となっている一方、「身近で見聞きしたことがある」も3割前後となっている。
- 性・年代別でみると、男女ともに20歳代以下および50歳代では「身近で見聞きしたことがある」、30歳代および60歳代以上では「受けたことも見聞きしたこともない」が最も高くなっており、40歳代では女性は「身近で見聞きしたことがある」、男性は「受けたことも見聞きしたこともない」が最も高くなっている。一方、「自分が受けたことがある」も一定程度みられ、女性の30歳代が25.7%と最も高く、女性の40歳代でも2割を超えている。
- 以上のことから、「パワーハラスメント (パワハラ)」の経験については、「受けたことも見聞きしたこともない」が最も高いものの、「身近で見聞きしたことがある」も一定程度みられ、身近な場面で発生している状況がうかがえる。また、性・年代別でみると、パワハラの経験や見聞きの状況は年代により大きな違いがみられ、40代では男女でその傾向が分かれている。また、30歳代から40歳代の女性では実際の被害経験が2割を超えており、働き盛りの年代でその被害が多い状況がうかがえる。

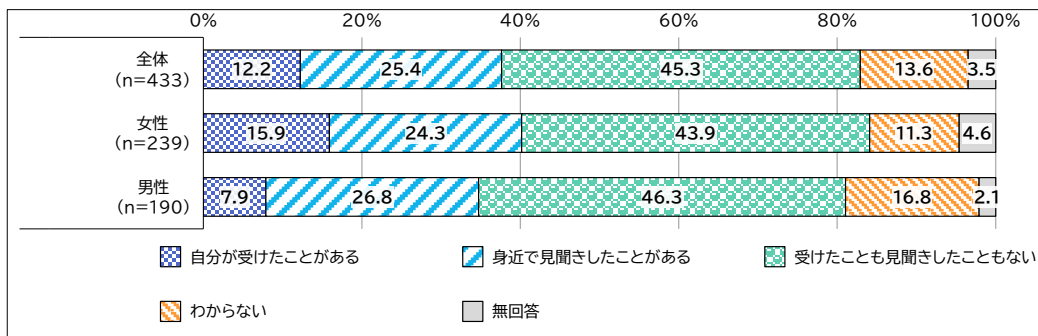


【性・年代別】

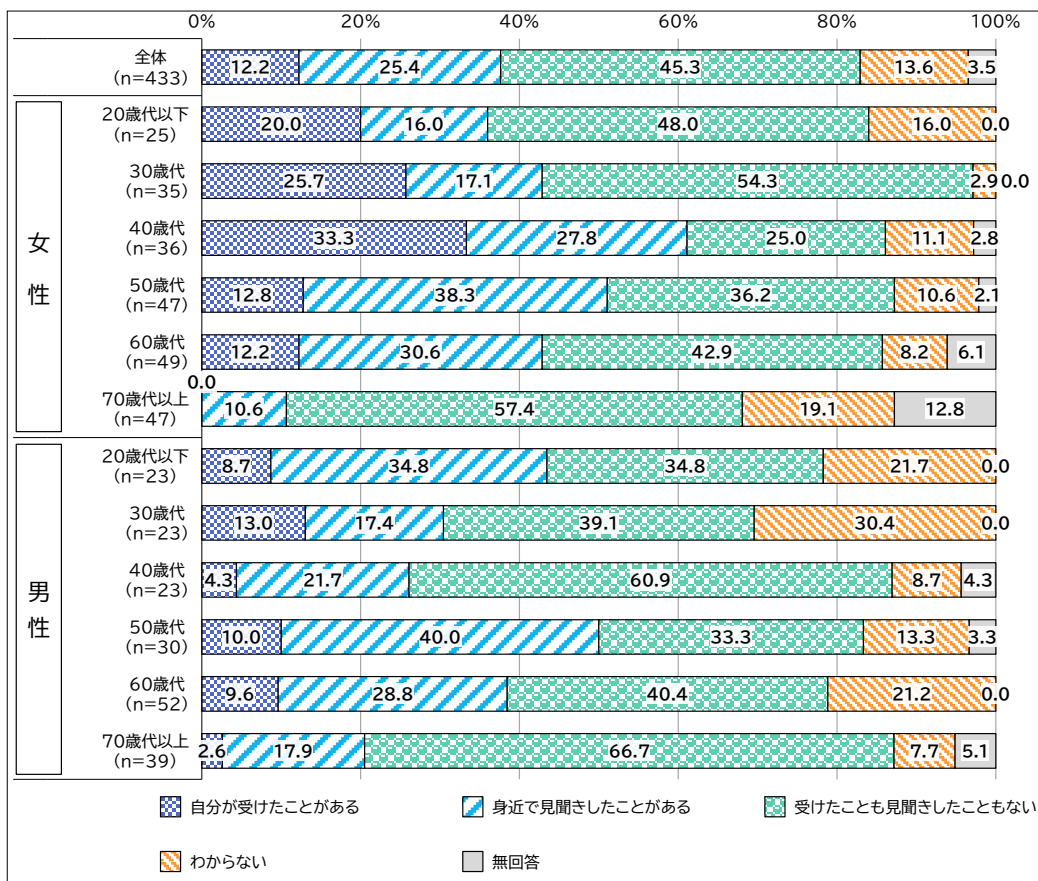


### (3) モラルハラスメント（モラハラ）

- 「モラルハラスメント（モラハラ）」の経験については、「受けたことも見聞きしたこともない」が45.3%と最も高く、次いで「身近で見聞きしたことがある」25.4%、「わからない」13.6%となっている。
- 性別でみると、男女ともに「受けたことも見聞きしたこともない」が4割台となっている一方、「身近で見聞きしたことがある」も2割台となっている。
- 性・年代別でみると、女性の40歳代では「自分が受けたことがある」が3割を超えて最も高くなっている。男女ともに50歳代では「身近で見聞きしたことがある」が4割程度と最も高くなり、男性の20歳代以下では「身近で見聞きしたことがある」と「受けたことも見聞きしたこともない」が同率で最も高くなっている。それ以外の年代ではいずれも「受けたことも見聞きしたこともない」が最も高くなっている。また、60歳代以下の世代において女性は男性より「自分が受けたことがある」が高く、特に40歳代以下では2割を超えている。
- 以上のことから、「モラルハラスメント（モラハラ）」の経験については、「受けたことも見聞きしたこともない」が最も高いものの、「身近で見聞きしたことがある」とする回答も一定程度みられ、身近な場面で発生している状況がうかがえる。また、性・年代別でみると、モラハラの経験や見聞きの状況は年代や性別により大きな違いがみられるが、40歳代以下の女性は実際の被害経験が2割を超えていることから、就労期の女性がモラハラの対象になりやすい傾向がうかがえる。

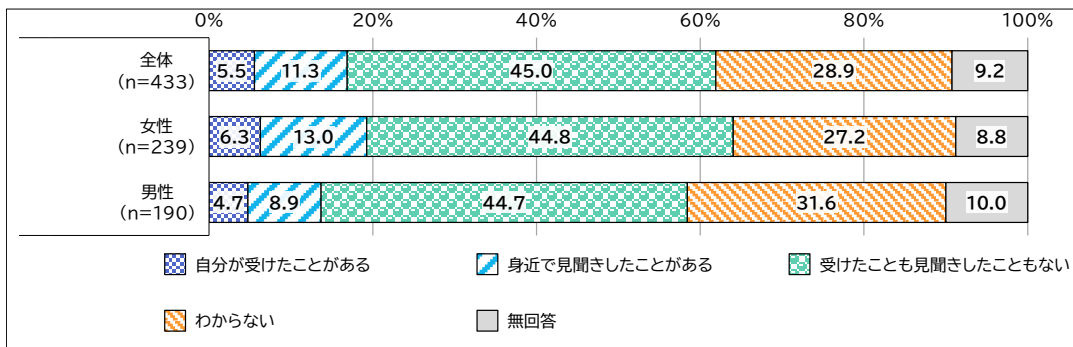


【性・年代別】

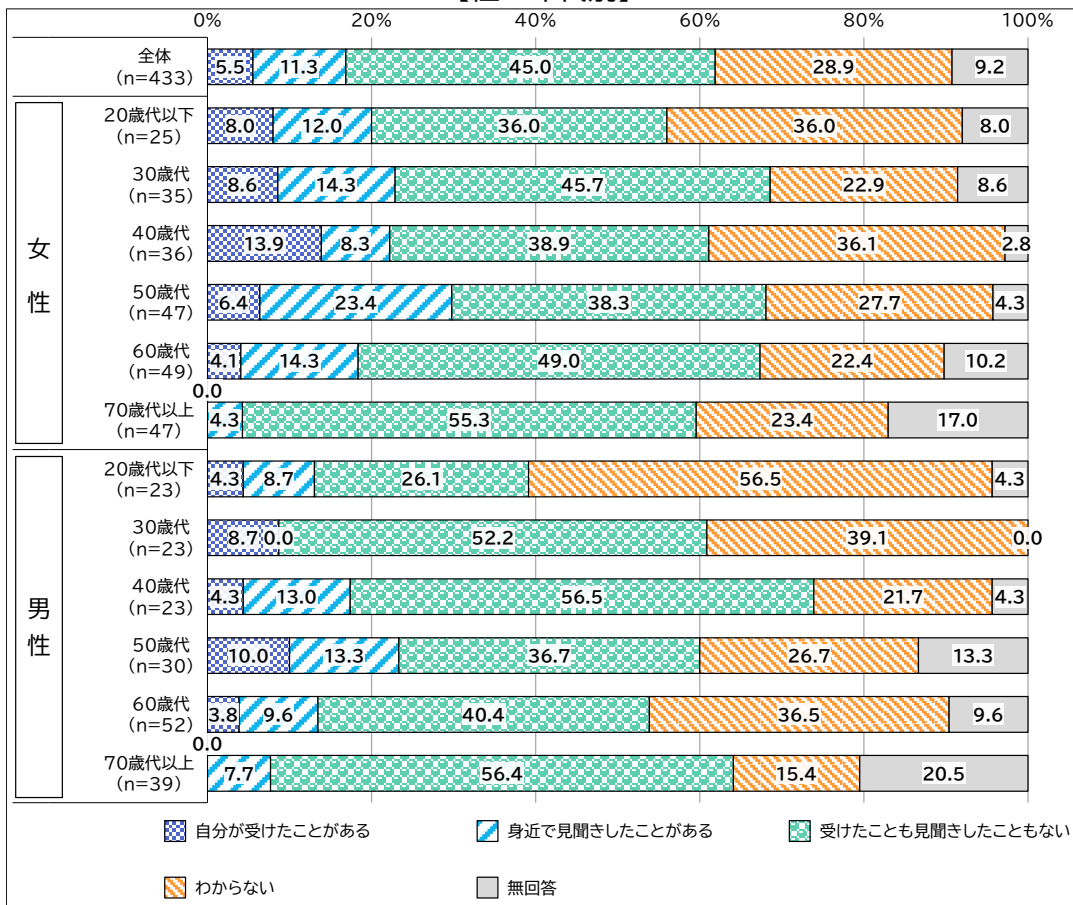


#### (4) その他のハラスメント

- 「その他のハラスメント」の経験については、「受けたことも見聞きしたこともない」が45.0%と最も高く、次いで「わからない」28.9%、「身近で見聞きしたことがある」11.3%となっている。
- 性別でみると、男女ともに「受けたことも見聞きしたこともない」が4割台、「わからない」が3割前後となっている。
- 性・年代別でみると、男性の20歳代以下では「わからない」、女性の20歳代以下では「受けたことも見聞きしたこともない」「わからない」が同率で最も高くなっている。それ以外の年代では「受けたことも見聞きしたこともない」が最も高くなっている。
- 以上のことから、「その他のハラスメント」の経験については、「受けたことも見聞きしたこともない」が最も高いものの、「わからない」とする回答も一定程度みられ、他のハラスメントと比べて内容や該当する事例について十分に認識されていない可能性がうかがえる。性別でみると大きな差はみられないが、性・年代別でみると、「受けたことも見聞きしたこともない」が中心となっている年代が多い一方、「わからない」とする回答が比較的高い年代もみられるなど、年代によって回答の傾向に違いがみられる。



#### 【性・年代別】



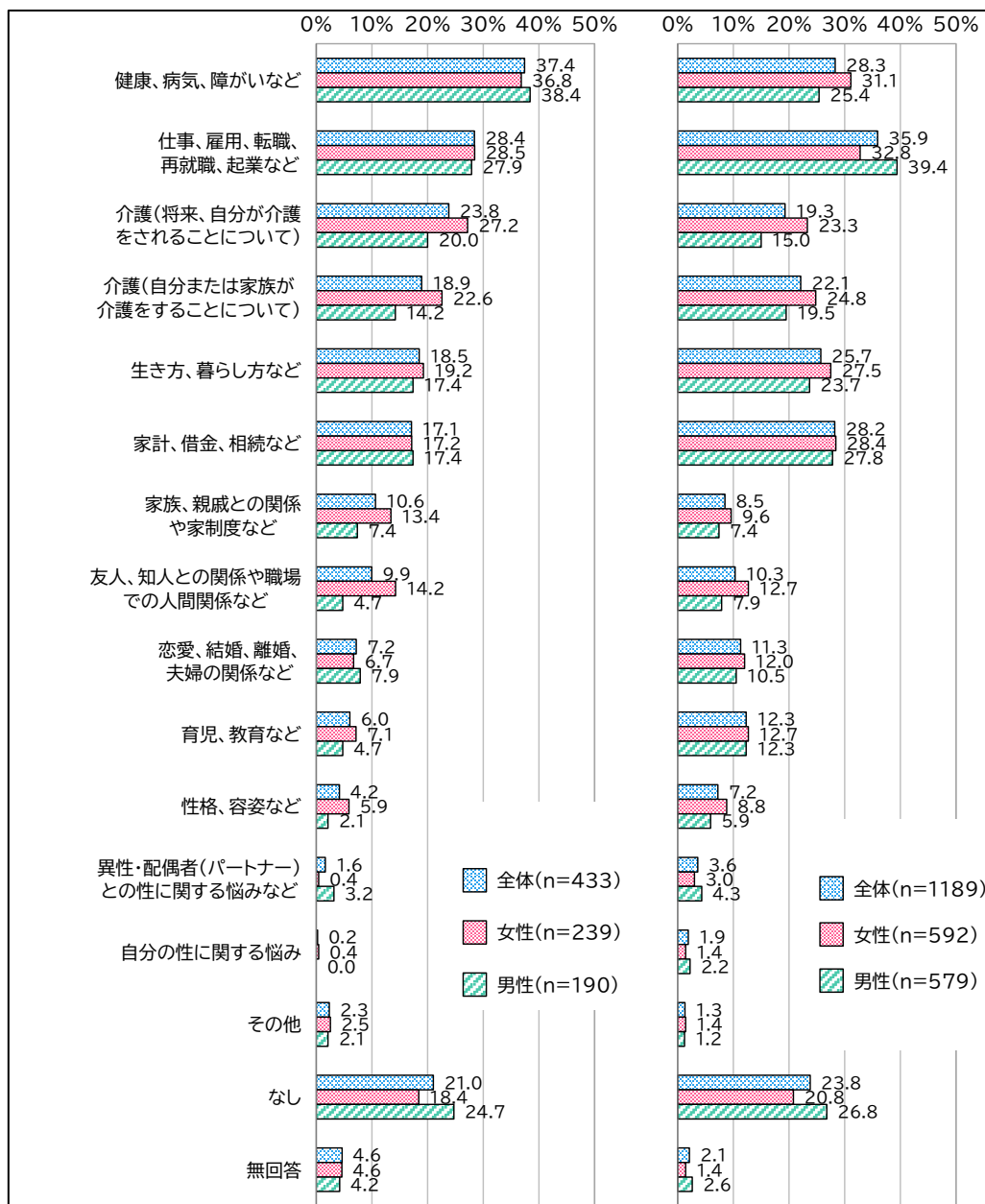
## 6. 悩みや困りごとについて

### 問19 あなたは、現在、次のような悩みや困りごとがありますか。(複数回答)

- 悩みや困りごとの内容については、「健康、病気、障がいなど」が37.4%と最も高く、次いで「仕事、雇用、転職、再就職、起業など」28.4%、「介護（将来、自分が介護をされることについて）」23.8%となっている。
- 性別で見ると、女性は男性より「友人、知人との関係や職場での人間関係など」が10ポイント度高くなっている。
- 福岡県調査と比較すると、全体および性別ともに「家計、借金、相続など」が10ポイント以上低くなっている。また、男性では「健康、病気、障がいなど」が高く、「仕事、雇用、転職、再就職、起業など」が低くなっており、10ポイント以上差が生じている。
- 以上のことから、悩みや困りごとの内容としては、健康や病気、障がいに関するものを挙げる割合が最も高く、仕事や将来自分が介護される状況などに関する不安も一定程度みられる。性別で見ると、女性は男性より友人・知人や職場などの人間関係に関する悩みを抱える傾向が高くなっている。また、福岡県調査と比較すると、家計や借金、相続などの経済面の悩みを挙げる割合が全体および男女ともに低くなっているほか、男性では健康に関する悩みが高く、仕事に関する悩みが低くなるなど、回答の傾向に違いがみられる。

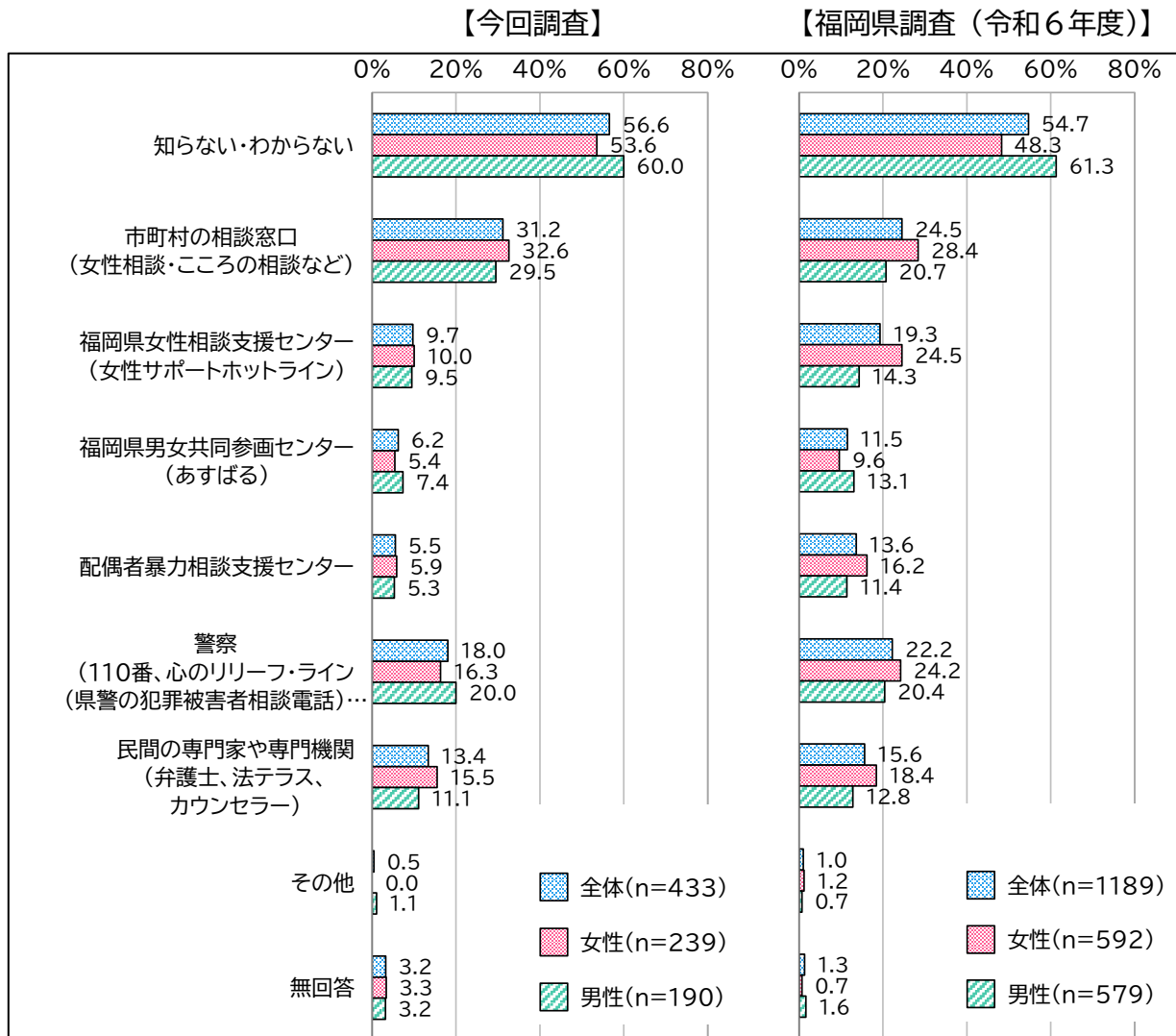
【今回調査】

【福岡県調査（令和6年度）】



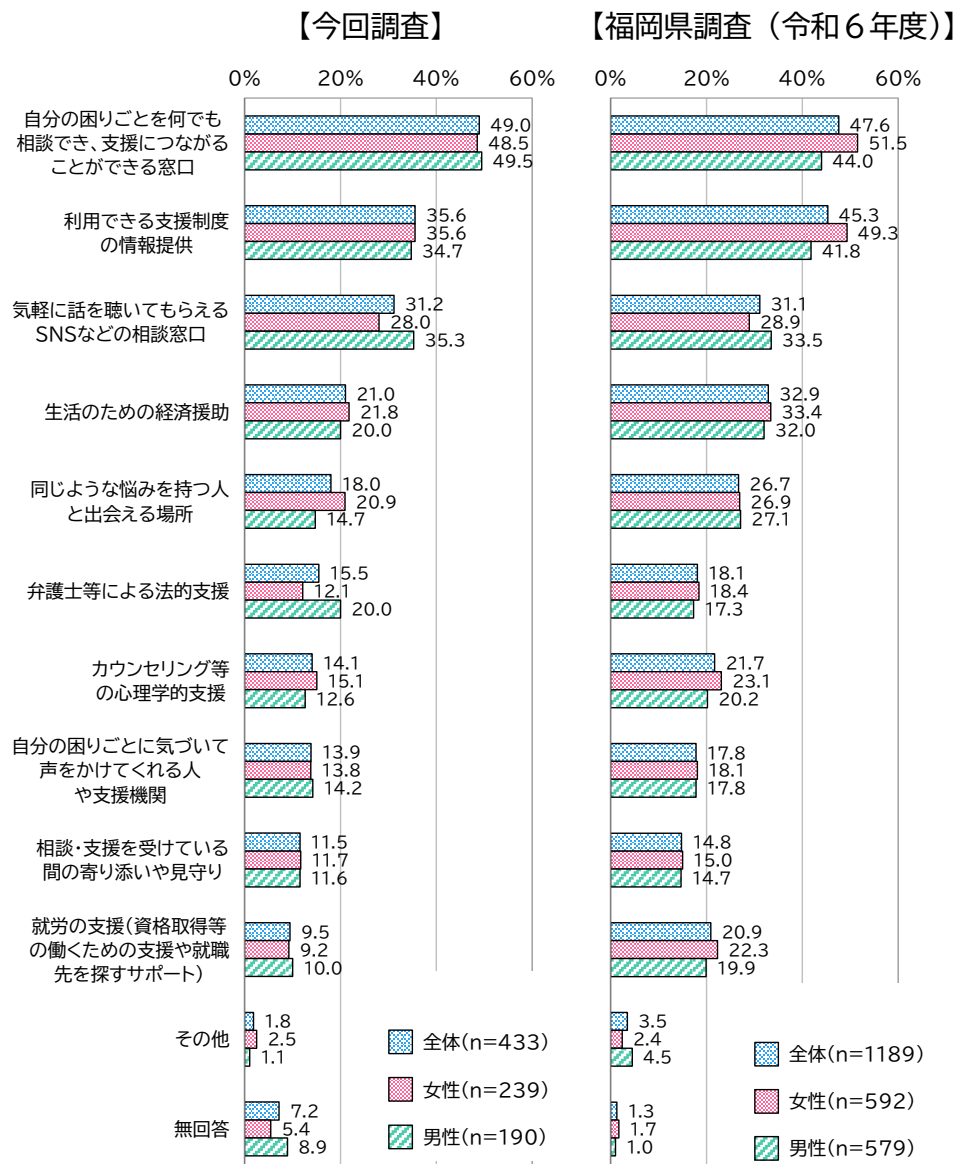
## 問20 困難な問題を抱える女性のための相談窓口を知っていますか。(複数回答)

- 困難な問題を抱える女性のための相談窓口の認知度については、「知らない・わからない」が56.6%と最も高く、次いで「市町村の相談窓口（女性相談・こころの相談など）」31.2%、「警察（110番、心のリリーフ・ライン（県警の犯罪被害者相談電話）など）」18.0%となっている。
- 性別でみても、男女ともに「知らない・わからない」が最も高く、5割を超えている。
- 福岡県調査と比較すると、女性では「福岡県女性相談支援センター（女性サポートホットライン）」「配偶者暴力相談支援センター」が10ポイント以上低くなっている。
- 以上のことから、困難な問題を抱える女性のための相談窓口については、「知らない・わからない」とする回答が半数を超えており、相談窓口の認知が十分に広がっていない状況がうかがえる。性別でみても大きな差はみられず、男女ともに同様の傾向となっている。また、福岡県調査と比較すると、女性では福岡県女性相談支援センター（女性サポートホットライン）や配偶者暴力相談支援センターの認知度が低く、さらに「市町村の相談窓口」「その他」以外の相談窓口の認知度が県調査よりも低いことから、相談窓口の周知を進める取組が求められる。



## 問 2 1 困難な問題を抱える女性の方の悩み・困りごとを解決するために、どのような環境や支援があるとよいと思いますか。(複数回答)

- 困難な問題を抱える女性の方の悩み・困りごとを解決するために、必要な環境や支援については、「自分の困りごとを何でも相談でき、支援につながる事ができる窓口」が49.0%と最も高く、次いで「利用できる支援制度の情報提供」35.6%、「気軽に話を聞いてもらえる SNS などの相談窓口」31.2%となっている。
- 性別でみても、男女ともに「自分の困りごとを何でも相談でき、支援につながる事ができる窓口」が最も高く、約5割となっている。
- 福岡県調査と比較すると、全体では「生活のための経済援助」「就労の支援（資格取得等の働くための支援や就職先を探すサポート）」が10ポイント以上低くなっている。性別で見ると、女性では「利用できる支援制度の情報提供」「生活のための経済援助」「就労の支援（資格取得等の働くための支援や就職先を探すサポート）」、男性では「生活のための経済援助」「同じような悩みを持つ人と出会える場所」がいずれも10ポイント以上低くなっている。
- 以上のことから、困難な問題を抱える女性の悩みや困りごとを解決するためには、相談しやすく必要な支援につながる窓口の整備が特に求められていることがうかがえる。また、支援制度の情報提供や SNS などを活用した気軽に相談できる環境へのニーズもみられる。性別で見ても大きな差はみられず、男女ともに同様の傾向となっている。さらに、福岡県調査と比較すると、経済的支援や就労支援を求める割合が全体で低くなっているほか、女性では利用できる支援制度の情報提供、男性では同じような悩みを持つ人と出会える場所を挙げる割合が低くなっており、男女で求められる支援内容に違いがみられる。



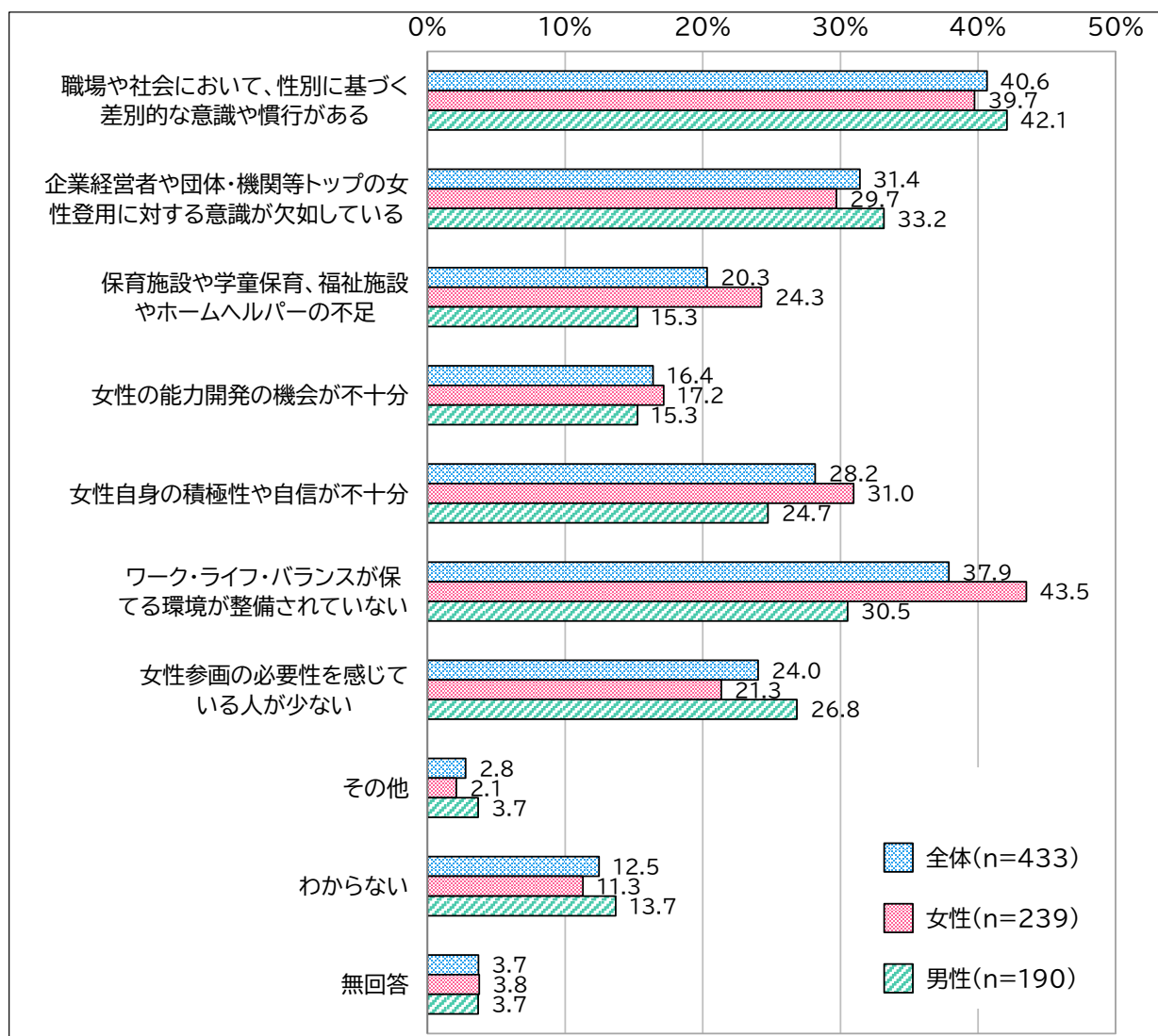
## 7. 女性の活躍推進について

問22 あなたは、政治や行政、企業などのさまざまな分野において、管理職等への登用など企画や方針決定の場に女性の参画が少ない理由は何だと思いますか。  
(複数回答)

○政治や行政、企業などのさまざまな分野において女性の企画・方針決定の場への参画が少ない理由については、「職場や社会において、性別に基づく差別的な意識や慣行がある」が40.6%と最も高く、次いで「ワーク・ライフ・バランスが保てる環境が整備されていない」37.9%、「企業経営者や団体・機関等トップの女性登用に対する意識が欠如している」31.4%となっている。

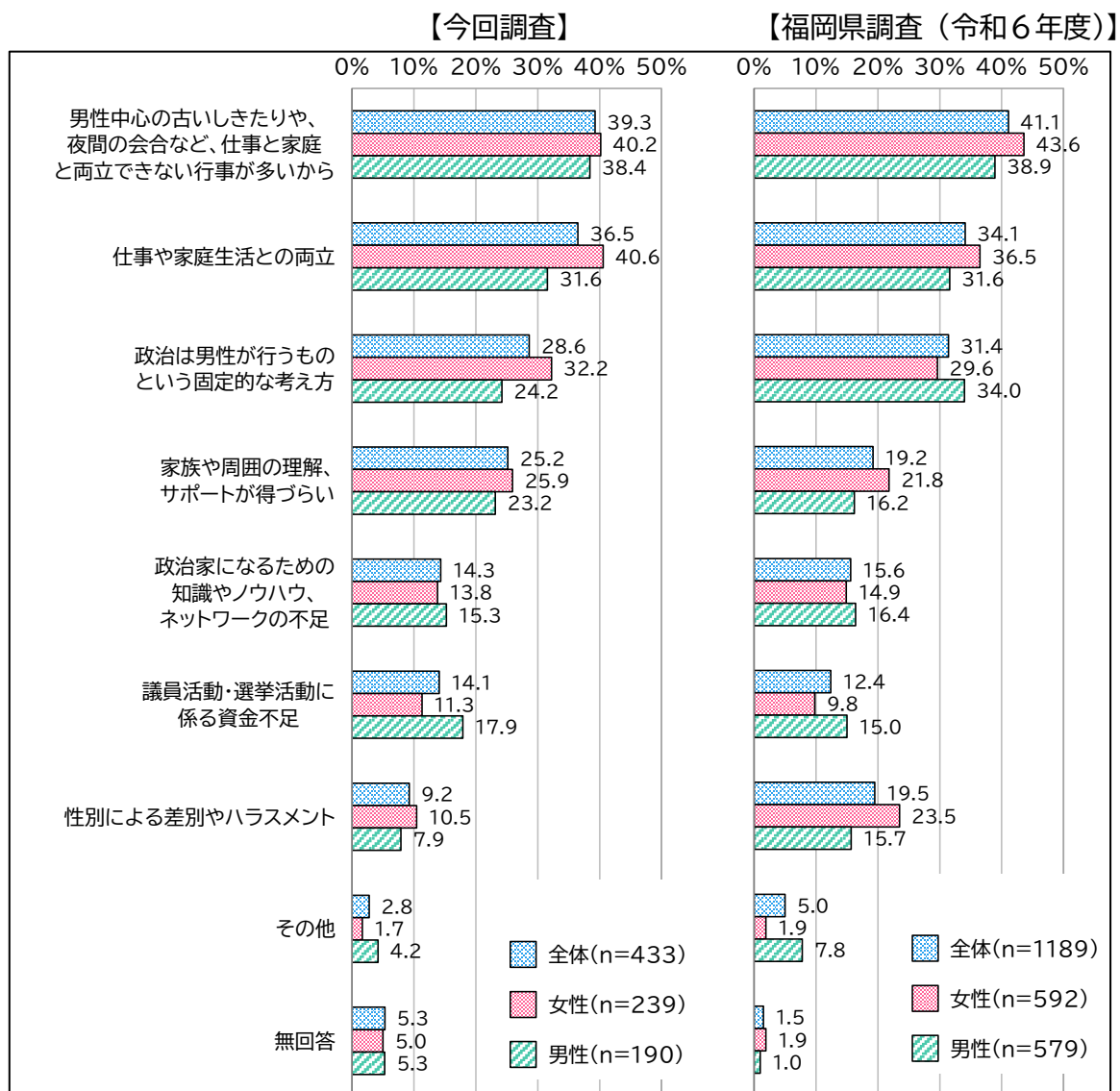
○性別でみると、女性は男性より「ワーク・ライフ・バランスが保てる環境が整備されていない」が13.0ポイント高くなっている。

○以上のことから、女性の企画・方針決定の場への参画が少ない理由としては、職場や社会における性別に基づく意識や慣行、企業経営者などの女性登用に対する意識の不足に加え、ワーク・ライフ・バランスが保てる環境が十分に整備されていないことなどが影響していることがうかがえる。性別でみると、女性は男性よりワーク・ライフ・バランスが保てる環境が整備されていないとする割合が高く、仕事と家庭生活の両立に向けた環境整備の必要性がより強く認識されていることがうかがえる。



問23 あなたは、政治分野への女性の参画を阻む障壁（課題）は、何だと思いますか。（複数回答）

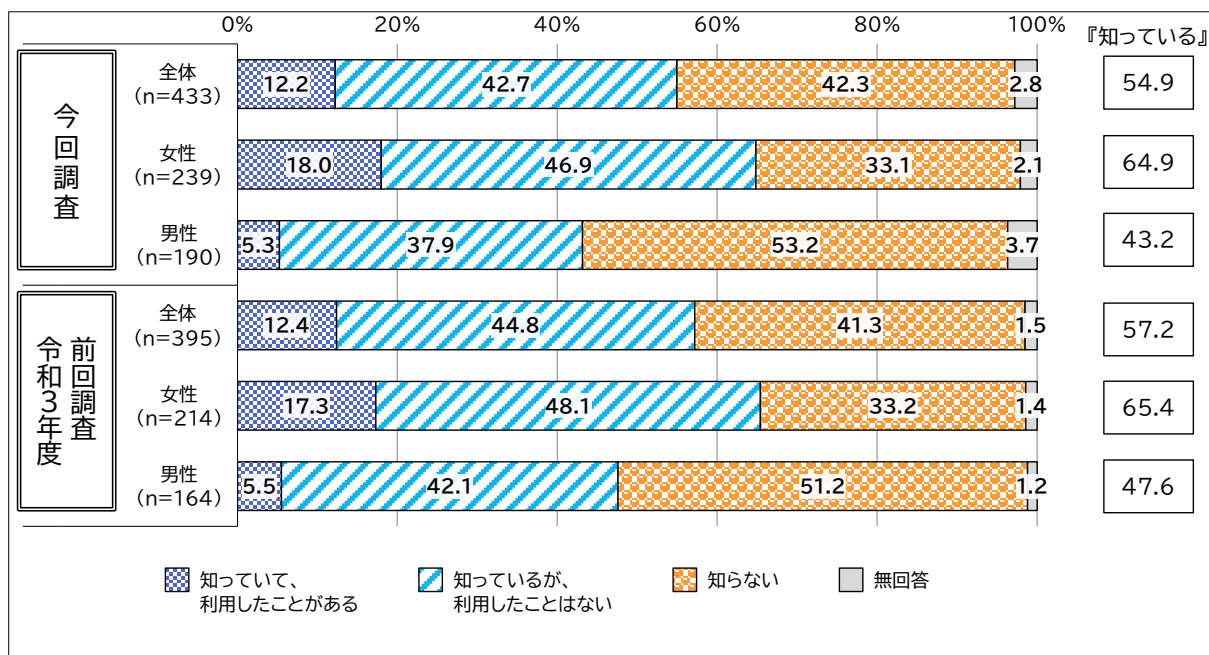
- 政治分野への女性の参画を阻む障壁（課題）については、「男性中心の古いしきたりや、夜間の会合など、仕事と家庭と両立できない行事が多いから」が39.3%と最も高く、次いで「仕事や家庭生活との両立」36.5%、「政治は男性が行うものという固定的な考え方」28.6%となっている。
- 性別でみると、女性では「仕事や家庭生活との両立」、男性では「男性中心の古いしきたりや、夜間の会合など、仕事と家庭と両立できない行事が多いから」が最も高く、いずれも4割前後となっている。
- 福岡県調査と比較すると、女性では「性別による差別やハラスメント」、男性では「政治は男性が行うものという固定的な考え方」がいずれも10ポイント前後低くなっている。
- 以上のことから、政治分野への女性の参画を阻む障壁としては、男性中心の慣行や夜間の会合など仕事や家庭生活との両立が難しい活動形態を挙げる割合が高く、政治活動と家庭生活の両立の難しさが大きな要因となっていることがうかがえる。また、政治は男性が担うものという固定的な考え方も影響していると考えられる。性別でみても大きな差はみられず、男女ともに同様の傾向となっている。さらに、福岡県調査と比較すると、女性では「性別による差別やハラスメント」、男性では「政治は男性が行うものという固定的な考え方」を挙げる割合が低くっており、政治分野への参画を阻む要因の捉え方に違いがみられる。



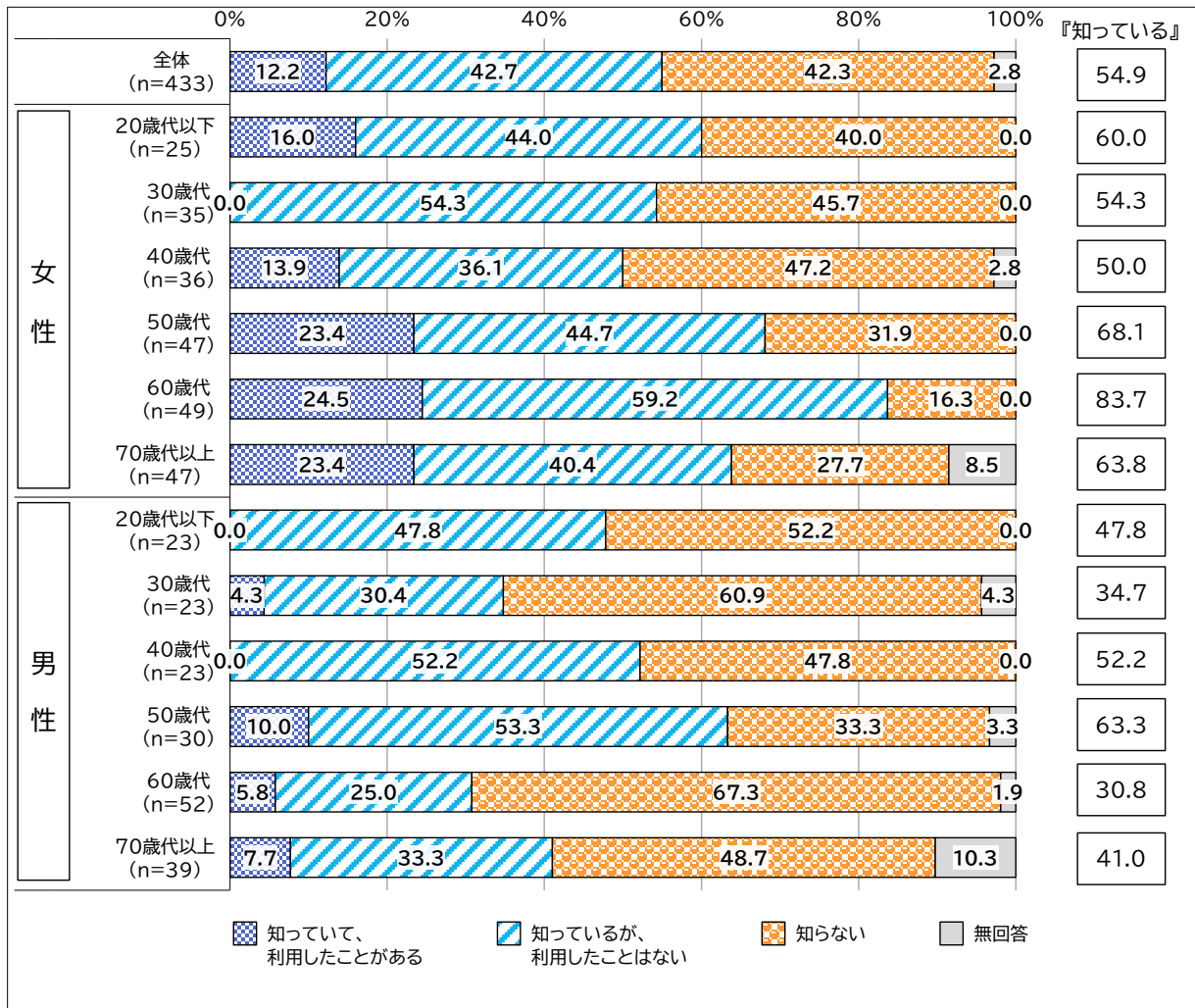
## 8. 今後の施策について

### 問24 あなたは豊前市の男女共同参画推進の拠点である「ハートピアぶぜん」をご存じですか。(単数回答)

- 「ハートピアぶぜん」の認知度については、「知っているが、利用したことはない」が42.7%と最も高く、次いで「知らない」42.3%、「知っている、利用したことがある」12.2%となっており、『知っている：知っている、利用したことがある+知っているが、利用したことはない』は54.9%となっている。
- 性別で見ると、女性は男性より『知っている』が高く、「知らない」が低く、10ポイント以上差が生じている。
- 前回調査と比較すると、全体および性別ともに大きな変化はみられない。
- 性・年代別で見ると、女性の40歳代、男性の30歳代以下、60歳代以上では「知らない」が最も高く、男性の30歳代と60歳代では6割を超えている。また、それ以外の年代では「知っているが、利用したことはない」が最も高く、女性の60歳代では約6割となっている。一方、「知っている、利用したことがある」は女性の50歳代以上で2割を超えている。
- 以上のことから、「ハートピアぶぜん」の認知度については、「知っているが、利用したことはない」が最も高いものの、「知らない」とする回答もほぼ同程度であり、認知が十分に広がっているとはいえない状況がうかがえる。性別で見ると、女性は男性より『知っている』の割合が高く、「知らない」が低いなど、認知や利用状況に差がみられる。また、前回調査と比較すると、全体および性別ともに大きな変化はみられない。性・年代別で見ると、「知らない」や「知っているが、利用したことはない」が最も高い年代がみられる一方、女性では「知っている、利用したことがある」も一定程度みられる年代があるなど、性別や年代によって認知状況に違いがみられる。



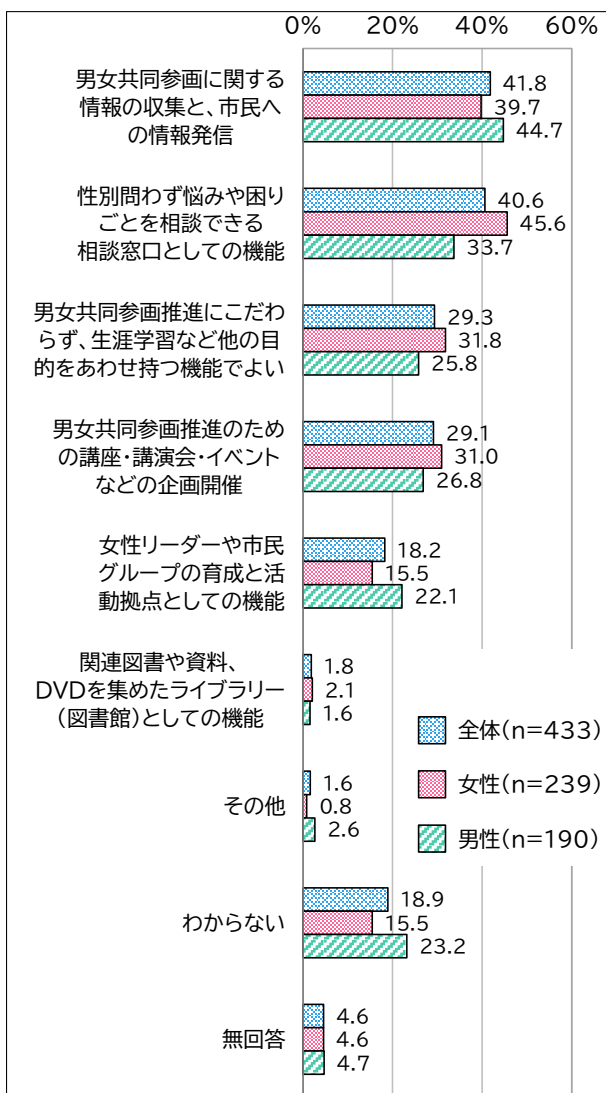
【性・年代別】



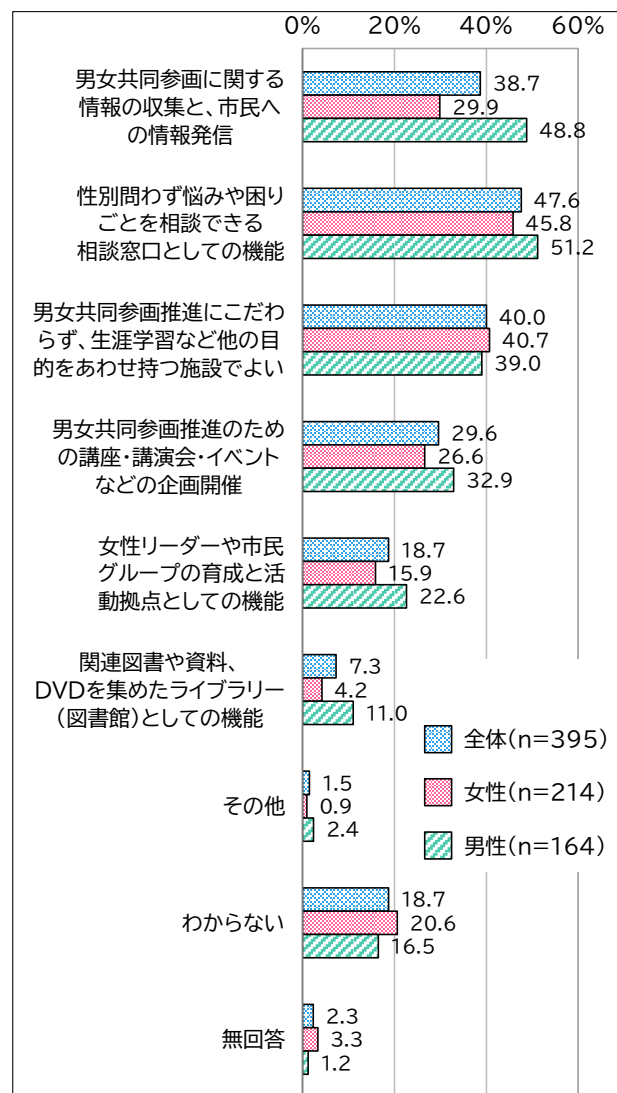
**問25 あなたは「ハートピアぶぜん」が男女共同参画の拠点施設としてどのような機能を備えるべきだと思いますか。(複数回答)**

- 男女共同参画の拠点施設として「ハートピアぶぜん」に求められる機能としては、「男女共同参画に関する情報の収集と、市民への情報発信」が41.8%と最も高く、次いで「性別問わず悩みや困りごとを相談できる相談窓口としての機能」40.6%、「男女共同参画推進にこだわらず、生涯学習など他の目的をあわせ持つ機能でよい」29.3%となっている。
- 性別でみると、女性は男性より「性別問わず悩みや困りごとを相談できる相談窓口としての機能」が11.9ポイント高くなっている。
- 前回調査と比較すると、全体および性別ともに、「男女共同参画推進にこだわらず、生涯学習など他の目的をあわせ持つ機能でよい」が10ポイント前後低くなっている。また、女性では「男女共同参画に関する情報の収集と、市民への情報発信」が高く、男性では「性別問わず悩みや困りごとを相談できる相談窓口としての機能」が低く、10ポイント程度差が生じている。
- 以上のことから、男女共同参画の拠点施設として「ハートピアぶぜん」には、男女共同参画に関する情報の収集・発信や、悩みや困りごとを相談できる窓口としての機能が求められていることがうかがえる。性別でみると、女性は男性より相談窓口としての機能を求める割合が高くなっている。また、前回調査と比較すると、男女共同参画推進にこだわらず、生涯学習など他の目的をあわせ持つ機能を求める割合が低くなっており、男女共同参画の拠点施設としての役割をより重視する傾向がみられる。さらに、女性では男女共同参画に関する情報の収集・発信、男性では相談窓口としての機能を求める割合も低くなっていることから、男女で求める機能に変化がみられる。

【今回調査】

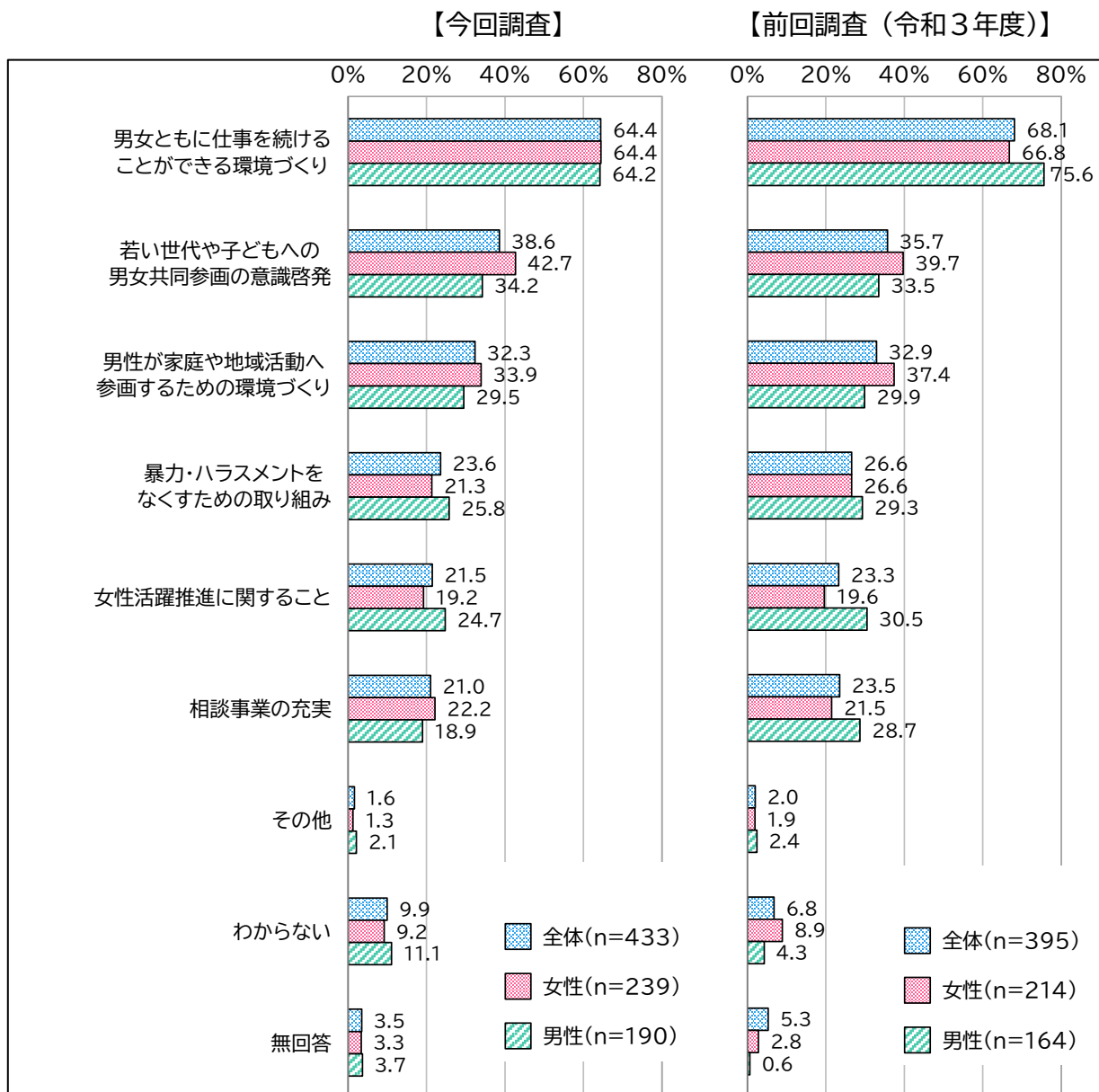


【前回調査(令和3年度)】



## 問26 「男女共同参画社会」を実現するために、今後、行政はどのようなことに力を 入れていくべきだと思いますか。(複数回答)

- 「男女共同参画社会」を実現するために、今後行政が力を入れるべきこととしては、「男女ともに仕事を続けることができる環境づくり」が64.4%と最も高く、次いで「若い世代や子どもへの男女共同参画の意識啓発」38.6%、「男性が家庭や地域活動へ参画するための環境づくり」32.3%となっている。
- 性別でみても、男女ともに「男女ともに仕事を続けることができる環境づくり」が6割台と最も高く、大きな差はみられない。
- 前回調査と比較すると、男性では「男女ともに仕事を続けることができる環境づくり」「相談事業の充実」が10ポイント前後低くなっている。
- 以上のことから、「男女共同参画社会」を実現するために行政が力を入れるべきこととしては、男女がともに働き続けることができる環境づくりを求める割合が最も高く、次いで若い世代や子どもへの意識啓発や、男性の家庭・地域活動への参画を促す体制整備などが挙げられており、仕事と家庭生活の両立や意識の醸成に向けた取組が求められていることがうかがえる。性別で見ると大きな差はみられず、男女ともに同様の傾向となっている。また、前回調査と比較すると、男性では仕事を続けやすい環境づくりや相談事業の充実を求める割合が低くなっており、行政に求める施策の内容に変化がみられる。



---

問27 男女共同参画についてのご意見、この調査に対するご感想等がありましたら、ご自由にご記入ください。(自由回答)

---

内容に応じ、分類を行った結果は以下の通りです。

一人の対象者が複数の項目に関して記述している場合もありますが、ここでは主な意見の1つを分類しています。

分類	件数
男女共同参画への意見・要望	15件
行政への意見・要望	9件
調査への意見	6件
地域社会	4件
教育・啓発	2件
その他	3件
合計	39件

【男女共同参画への意見・要望：15件】

年代	性別	男女共同参画への意見・要望
20歳代以下	女性	男女で役割を決めるのではなく、やりたい人が挑戦できる社会にすべき
	男性	男女共同参画という取組み自体はとても素晴らしいものだと思いますが、昨今では女性が優遇され男性が生きづらい社会になりつつある面もあると思う。本当の意味での男女共同参画のためには、従来の男尊女卑の考えを改める必要があるが、必要以上の制度や法の制定は間違いだと感じる。
30歳代	男性	既に共同参画できていると思うが、困窮女性ばかり注目され困窮男性に注目されていない点が気になる。
40歳代	女性	性別で役割を決めつけず、一人一人が希望や能力に応じて社会参加できることが理想。 男女それぞれの得意不得意を活かして協力することが大切。
	男性	女性だから支援する、男性だから優遇するのではなく双方同じように支援が必要。 女性リーダーに対する先入観に気づいた。男女共同参画を推進していくべきだと思う。
50歳代	女性	完全な男女平等は難しい面もあるのではないかと。 女性が正当な利益を享受できる社会になってほしい。
	男性	男性の意識改革より、実際は女性のやる気や意識改革が進まないことが大きいと感じる。
60歳代	女性	若い世代は男女平等の意識が広がっていると思う。
		男女共同参画が逆に男女意識を強めている面もあると感じる。
70歳代以上	女性	男女共同参画社会の難しさを感じた。
		女性が公の場に出ない世代で生きてきたため、生きづらさは特に感じない。
		男女それぞれの立場を尊重することが大切。

【行政への意見・要望：9件】

年代	性別	行政への意見・要望
40歳代	男性	豊前市は公園が2か所しかなく、子どもを安心して遊ばせる場所がない。室内プレイルームなどを整備してほしい。
50歳代	女性	市が具体的に何をしているのかわからない。もっとアピールが必要では。
		情報発信が少ないため様々なツールで周知した方がよい。 豊前市は男女共同参画の意識が低い。賃金向上や企業誘致などにも力を入れてほしい。
	男性	子育てやイベント活動を個別ではなく全体でインパクトのある行事として進めてはどうか。
60歳代	女性	公共施設の老朽化やトイレの洋式化などを改善してほしい。
	男性	計画策定の際は中間報告を市民に出す必要があると思う。 アンケートの回答を基に住みやすい豊前市に改革してほしい。
70歳代以上	女性	子育てと仕事を両立できるよう職場に付属した施設があればよい。

【調査への意見：6件】

年代	性別	調査への意見
20歳代以下	男性	設問や選択肢が誘導的に感じる部分があった。
50歳代	男性	アンケート結果や市の取組を教えてほしい。
60歳代	女性	若い人のアンケートを行った方が良かったのでは。
70歳代以上	女性	初めてのアンケートで勉強になった。
	男性	アンケートは実施するだけでなく活用してほしい。 男女共同参画の調査は若い世代に行う方がよいのでは。

【地域社会：4件】

年代	性別	地域社会
40歳代	女性	豊前市は子育て支援が少なく住みにくい。
70歳代以上	女性	地域の考え方が古いと感じる場面がある。
	男性	若い人が戻ってきて活気ある地域になってほしい。 働く婦人の家が特定の人が集まりになっている。

【教育・啓発：2件】

年代	性別	教育・啓発
50歳代	女性	50代以上は男女の意識が強い。男性の考え方を教育し直す必要があると思う。
60歳代	男性	男女共同参画については中学生の時に教育する必要があるのではないかな。

【その他：3件】

年代	性別	その他
60歳代	男性	言うのは簡単だが実行は難しいと思う。
		特に意見はないが頑張って進めてほしい。
70歳代以上	女性	豊前市が住みやすい地域になることを願う。

---

豊前市男女共同参画づくりに向けての市民意識調査 結果報告書

令和8年3月

発行 豊前市総務部 人権男女共同参画室 男女共同参画係  
電話 0979-82-8003  
F A X 0979-83-2560  
Eメール danjyo@city.buzen.lg.jp

---

